

研究紀要 23

目 次

土器を飾る猪～山梨を中心とした猪造形の展開～	新津 健	1
春日居町鎮目某古墳出土の素環鏡板付弁	坂本 美夫	15
墨書き土器ネットワークの検討		
—甲斐国巨麻郡の事例—	末木 健	27
宮の前遺跡出土の縄文土器	吉岡 弘樹	59
横堀遺跡出土の条痕文期土偶	野代 恵子	65
甲府盆地から見たヤマト（1）		
—甲斐銚子塚古墳出土の腕輪形石製品—	小林 健二	69
伝中央市（旧東八代郡豊富村）出土初期須恵器について	石神 孝子	75
塚越遺跡の ¹⁴ C年代測定	小林 謙一	77
	遠部 慎	
	宮田 佳樹	
	松崎 浩之	
	正木 季洋	

序

このたび、山梨県立考古博物館ならびに山梨県埋蔵文化財センターの日頃の研究成果の一端を掲載した『研究紀要』第23号を刊行する運びとなりました。

今回は、論文と報告・資料紹介などを合わせて8篇掲載しております。巻頭の新津健「上器を飾る猪～山梨を中心とした猪造形の展開～」は、縄文土器に付けられた猪装飾の始まりから展開についてその変遷をたどるとともに、縄文人と猪との深い関わりの背景を検討しました。坂本美夫「春日居町鎮日某古墳出土の素環鏡板付壺」では、鎮日某古墳出土の素環鏡板付壺の年代的位置と馬具の存在による強大な軍事力をもつ氏族の存在、さらに後の郡域の決定への影響力の検証を行いました。また、後期古墳の時期に見られる鉢具立圓素環鏡板付壺について、その形態や時期などについて考察しました。木本健「墨書き土器ネットワークの検討－甲斐国巨麻郡の事例－」では、甲斐国巨麻郡における余良・平安時代の集落出土の墨書き土器の出土様相と大量の墨書き土器から同一文字に絞って、地域ネットワークを想定し、郡衙（郡家）・郷の関係や御牧・莊園などとの関係の考察を試みました。

報告・資料紹介などとして、野代恵子「横堀遺跡出土の土偶」は、横堀遺跡（南アルプス市）から出土した縄文時代晩期最終末から弥生時代前期初頭の時期に属する土偶についての再報告を行いました。吉岡弘樹「宮の前遺跡出土の縄文土器」は、平成14年度に試掘調査された宮の前遺跡出土の縄文時代中期から後期初頭にかけての土器の紹介を行いました。小林健二「中府盆地から見たヤマト（1）－甲斐銚子塚古墳出土の腕輪形石製品－」は、国指定史跡中斐銚子塚古墳から1928（昭和3）年に出土した副葬品のうち、腕輪形石製品について、今年度開催された考古博物館第24回特別展「甲府盆地から見たヤマト－甲斐銚子塚古墳出現の背景－」の企画展示を通して、改めて考察しました。石神孝子「伝中央市（旧東八代郡豊富村）出土初期須恵器について」では、中央市（旧東八代郡豊富村）より出土したと伝えられる古相を示す須恵器の資料紹介をしました。国立歴史民俗博物館の年代測定研究グループから寄稿いただいた「塙越遺跡の¹⁴C年代測定」では、塙越遺跡（富士河口湖町）から出土した縄文時代晩期～弥生時代中期初頭の上器に付着した炭化物の年代測定の報告を行いました。

考古博物館ならびに埋蔵文化財センターでは、これからも山梨の考古学や郷土の歴史研究に貢献し、県民の皆様に文化財の周知や普及活用を推進していくよう努力をかさね、より一層の充実をはかる所存であります。本誌が少しでもその趣旨に寄与できれば、幸いであるとともに、各位からのご教示と忌憚のないご批判を賜りますようお願い申し上げます。

2007年3月

山梨県立考古博物館長

遠山和男

山梨県埋蔵文化財センター所長

末木健

土器を飾る猪～山梨を中心とした猪造形の展開～

新津 健

はじめに

- 1 猪装飾のはじまり
- 2 再び上器へ
- おわりに～課題と展望～

3 中期中葉への展開

4 猪造形の意味

はじめに

縄文時代前期後半、諸窯式の時期に群馬地盤を中心に瓶面装飾の上器が盛行する。口縁部にみられるその特徴からは、猪を表現した造形であることがどうえられている。この表現は関東、東北、中部山岳地域を中心に広く普及するがその継続する時期は短く、同じ諸窯式でも新段階ですでに形態化する。その後中期初頭段階で新たな造形として再び登場するが、北陸方面では蛇とともに猪の特徴を一部に持った動物表現が前期末からみられるようになる。やがて中期中葉になると特に中部山岳地域を中心として、リアルな猪表現もみられるとともに蛇や人面と組み合った造形が土器を飾る。すでに渡辺誠氏や小野正文氏により猪造形の意味や、特に蛇と組み付けて縄文人がイメージした想像上の動物という観点からの解釈もなされているとおりである（渡辺1992、小野1992）。その後中期後半には、上器への猪装飾は釣手土器を除き影をひそめ、いくつかの例外はあるものの後期から晩期への猪形土製品としての造形へと変っていく。

筆者は、人と猪とのかかわりについて興味を持っており、これまで縄文時代から現代にいたるまでのデータから、いくつかの考えをまとめてきた。弥生の銅鐸、古墳の埴輪、古事記や風上記での猪に関する記事、江戸時代における猪害の記録等であり、これらから人と猪との間には長く深いかかわりをみることができる。の中でも縄文時代は両者ののかかわりが最初に見い出せる時代でもあることから、今回の小論では山梨での事例を中心に土器に表された猪の実情を追ってみたい。特に中期中葉の土器での立体装飾は、縄文人でなければ理解できないような複雑な構成にあり、その一つの要素として猪がどのように関わっていたのか検討を試みることとする。

1 猪装飾のはじまり

前期諸窯式土器の時期、山梨でも深鉢形土器の口縁部に猪の顔面をかたどった突起が出現する（第1図）。最もリアルさをとどめているのがハケ岳南麓地域に位置する山

崎第4遺跡出土土器である（1）。これは浮線文も太くしっかりとしている上器の波頂部に突出するもので、口耳の表現も確かである。この遺跡の北約300mに位置するのが中央墓域型環状集落としてよく知られる犬神遺跡である。この遺跡からも明確に猪と認識できる装飾が2点出土している。2は鼻、目耳、頭部といった特徴のみが残るもので、3は更に象徴化が進んでいる。他にもこれらの特徴が形態化していく過程のものもいくつか出土している（第2図）。

犬神遺跡の西約500mにある諸窯式期の住居3軒が発掘されている御所遺跡からも4点程（4～7）がみられる。いずれも鼻孔がしっかりと表現された吻端の特徴のみが残る造形である。特に4と5は上器の器形及び文様構成もよくわかり、深鉢形土器の口縁部上の突起として表現されていることがわかる。

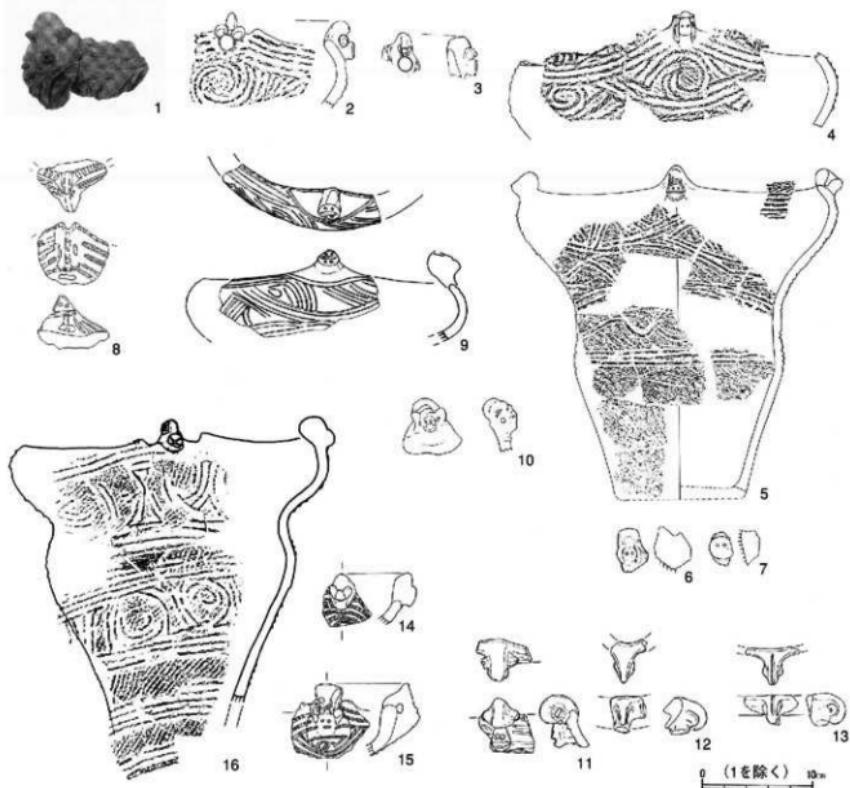
8は中央市（山豊富村）代中東遺跡の上器で、人面あるいは熊等他の動物の感じもあるがやはり猪装飾からの変遷でとらえたい造形である。

9は諸窯期の大規模な集落である花鳥山遺跡4号住居の土器である。吻端のみの表現でありしかも鼻孔と口とが強調されたものであるが実物とは相当隔たっている。同じ住居からは頭部と円形の鼻先が表現されたものも1点出土している。

10は縄文中期の大集落として著名な駿河郡遺跡の43号住居からの出土品で、鼻及び目耳の表現が残る。

11～13は、甲府盆地東部の甲州市塙山獅子之前遺跡から出土した3点。11は御所遺跡出土の4、5に類似した表現であるが、特に鼻と口とによく特徴をとどめているものの頭部はかなり強調されている。12、13も同遺跡の出土品であるが、11をベースにしながらも形態化が激しい。14～16は獅子之前遺跡の南約2kmにある大木戸遺跡のもので、14は2や3に類似する。16は十器の器形がわかる例で、余り強くない波状口縁の小突起として付けられたもの。鼻および頭部のみの表現がわずかに猪の特徴を醸し出している。

以上、本県での諸窯式期の猪装飾は余り多くなく、加

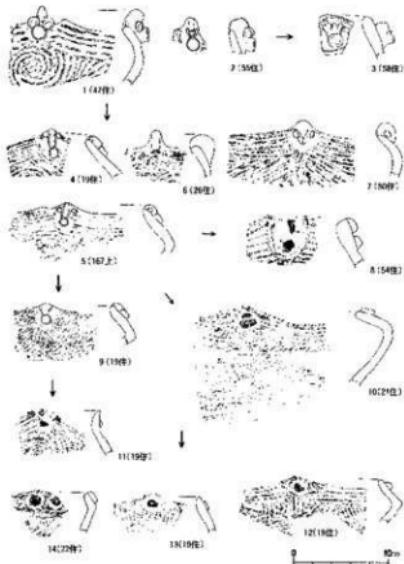


第1図 山梨の猪装飾（前期）（各報告書等より…出典一覧参照）

えてリアルさには欠けるものが主といえる。しかも拠点集落としてとらえられる天神遺跡からの出土も数点にとどまることは、時期的にも猪装飾盛行期が過ぎていく頃の造形とみられる。この点について、この種の上器が非常に多く出土した群馬県安中市中野谷松原遺跡の事例を参考にしてみたい。

中野谷松原遺跡は前期中葉から後葉を中心とする集落址であるが、その中でも特に諸磯b式1段階の時期に直径110mの環状集落が形成され、中央広場を持つ8～10軒程の同時性住居からなることがとらえられている（大工原1998）。環状集落構造は徐々に崩れていくものの、2段階は同程度の集落で同時性は6～9軒を保っているが、それが3段階になると7～10軒ではあるものの住居や建物群、墓域等の区域が環状構造から変化していくようである。さ

らに4段階では住居は小形化、散漫化し3～6軒ではあるものの集落自体が縮小乃至未調査の西側に移動する傾向がとらえられている。5段階では1軒しか発見されておらず、集落の縮小あるいは分散化するものとされている。このような諸磯b式期における集落の変遷がとらえられている中野谷松原遺跡にあって、猪装飾の出現は第2段階に始まり、第3段階に盛行し第4段階にまで継続するといった傾向を窺うことができる。その数は報告書に図示されたもの132点を数えるという多さである。この周辺地域から発見されている猪装飾は500～600点とも言われている¹¹⁰。これらの装飾はやはり諸磯b式の古段階から中段階にみられるものであり、新段階では円形や楕円の張り付け文へと形骸化することは確かであろう。筆者は先に第2図にみるよに天神遺跡における猪装飾の変化を図示したが（新津



第2図 天神遺跡での変遷（新津 1994）

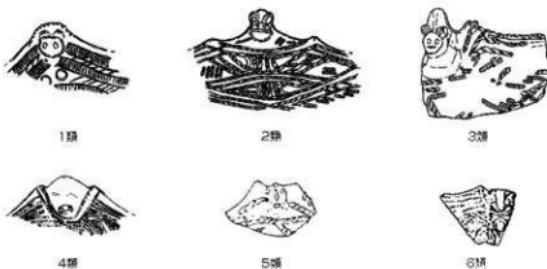
1994)、天神遺跡は諸磯 b 式中段階以降の集落であり、やはり猪装飾からみても中野谷松原集落より後出の遺跡であることがわかる。先に紹介した山梨県内の猪装飾についても同様なことが言える。大神遺跡と中野谷松原遺跡とを比較すると、天神1段階は中野谷松原3段階～4段階、天神2段階は中野谷松原4段階～5段階、天神3段階が中野谷松原5段階及びそれ以降となる。すなわち、中野谷松原遺跡にて猪装飾が盛行する時期の最終段階に天神遺跡の諸磯 b 式期集落が始まり、むしろ中野谷松原集落が衰退する第5段階以降（天神3段階）にて、大神集落が発達するという時期差が、猪装飾の盛衰にも関わっているものとみられる。この傾向は山梨全体に共通するものであろう。

従って猪装飾出現の背景やその展開についてはまず群馬県での事例をよく観察する必要がある。これについては既に関根慎一氏により検討が行われており（関根 2003）、その成果にふれてみよう。関根氏は中野谷松原遺跡出土の猪装飾を文様帶との関係や表現形態等から六つの類型に分類し、1類から6類への変遷をとらえた（第3図）。1類～11類部文様帶に粘土瘤による口・鼻を強調する形態、2類～10類部文様帶とは切り離して、イノシシ頭部が口縁部上に把手状に乗る、立体的表現。3類～頭部を口縁部頂部に貼り付け、目鼻口の部分を口縁部側面に貼付する形態。4類～頸全体が口縁部側面に貼付する形態。頭部は口縁部頂部と一体化し、目鼻口はボタン状の粘土瘤で表現。口

縁部文様帶と一体化。5類～4類同様であるもののさらに顔面は退化。6類～顔面は完全に退化し、口縁部波頂部側面に粘土瘤を貼付する形態。要約すると以上のような変遷であり、発生段階から最盛期を経て衰退する経過がとられれている。この変遷は諸磯 b 式上器の漸次変遷とほぼ同じとし、1類が出現期、2類～3類が最盛期、4類～5類が後半期、6類が終末期として区別できるとした。このような傾向は、途中からではあるものの山梨でも把握でき、特に天神遺跡では3類から6類に当たるまさにそれ以後、ボタン状貼付として移行する様子もとえられる。第1図に示した中で最もリアルな山崎第4遺跡出土品（第1図1）が、関根氏分類の2類の終わり頃から3類、天神遺跡（2、3）、御所遺跡（4、5）が3～4類ということになろうか。群馬県下で重要なのはやはり1類から3類という出現期から最盛期であり、ここに猪装飾出現の背景を考える上でポイントがあろう。そこで、その表現について少し詳しく検討して見よう。まず猪の表現は、顔面の正面から見ていることにある。捕獲された猪を觀察すると、移動や倒を探す際通常は頭を下げ鼻を地面に向ける様子。人と出会い、こちらを向いた際は土器に表現されたような形になるが、それでも口まで表現されるような状態は、さらには上向きになる必要がある。類似した姿勢としてはオリに入れられた猪が背伸びをしながらこちらを向くといった状態で、はじめて鼻が正面を向きその梢円形の鼻の下に口まで見ることができる。円形の鼻及び丸い二つの鼻孔の表現はまさに猪の最大の特徴である。この点、第3図にある1類は非常にリアルな鼻の表現であり、やはり発生期の状況とみてとれる。それに比較して2類、3類では全体に立体化しているものの、鼻口の表現は模式化している。すなわち円形の鼻の中に口も表現していることであり、特に2類では著しい。実際にはこのようにはならず、やはり1類での表現が正確性に富んでいるといえよう。

次に耳と口の表現である。耳も猪の特徴の一つであり、2類3類では表現される事例も多い。この耳とともに細長く口も表現されている。しかし実際の猪を觀察すると、鼻を正面からみた場合には口は鼻の上端の輪郭近くなることから、図のような目としての表現はできない。従って、2類3類では口と耳が同時に強調して表現される場合が多いものと理解できる。

頸部の表現も2類では普通の状態であるものの、3類では極めて大きくしかも手前にせりだすような造形もみられる。特に山梨での事例では極端なものもある（第1図11・15）。頸部から背中にかけての盛り上がりあるいはたてがみの表現という見方も可能ではある。しかし口側面に牙が付くものは全く見られないことから、興奮した雄猪とみなすこともできない。中期以降、後期晩期での猪造形でも牙の表現は明確ものが少ないと見られ、特に雄雌の区別はなかったのか、あるいは雌乃至子供を表現したものか検討する必要はある（註）。雌であるとすればやはり多産という意



第3図 群馬での猪装飾変遷（関根 2003より）

識が働いていたとも考えねばならない。このことについては中期の頃で再度ふれることとした。

以上のような表現の特徴が確認できるが、やはり猪が顔を上げ正面に向いた様子を表現した造形であろう。中期の顔面把手の付く上器自体が身体を表現しているのと同様、諸磯式土器の猪付き土器もやはり土器自体が猪の体部を表現しているのか、あるいは土器の中にいる猪が背伸びをして外を見ている姿勢なのか、といった検討も必要である。しかし発生期での猪は上器からは突出しておらず鼻だけが強調されているような表現であることから、土器自体が猪を表現したようにも思われる。

では、土器に猪が付けられた意味は何であろうか。関根氏や大工原氏は黒曜石の交易に関わって群馬西部集団の「威信材としてのイノシシ土器」の意義を考察されている。イノシシ土器の変遷を黒曜石流通システムにおける群馬西部地域集落の役割の消長の中に位置付けるという構想は、多角的で興味深いとえらかたである。しかしこの種の土器の東日本における広がりと短期間での変遷の説明とはなりえても、発生する意味や威信材になりえた猪装飾の意味付けはまた別の問題でもある。この点について、黒曜石産地周辺地域と群馬西部地域での猪生息数の差を問題視する関根氏の着眼点には注目したい。少なくとも、猪装飾が発生する背景には、縄文人と猪との出会いの多さを考えるべきであろう。環状聚落の形成やその周辺への開拓の展開等、人間の居住空間・生産空間の拡大による動物達との関わりの増大、あるいは生息環境の好転に基づく個体数の増加など、諸磯b式古段階にて猪が増加したことは十分に考えられる。ただし同じ時期、やはり東日本全体としても同様な生息条件を満たした地域においては、群馬西部同様に猪も増加したと考えられる。要は、群馬西部地域での猪との出会いの多さが土器への表現として表われたことの意味である。

猪が付く土器は深鉢形土器であり、これは本来煮炊き用の道具である。猪付き土器の全体が分かる事例は多くはないものの、このような使用痕跡の検討も必要である。少ない1例での事例であるが、花鳥山遺跡や大木戸遺跡例（第

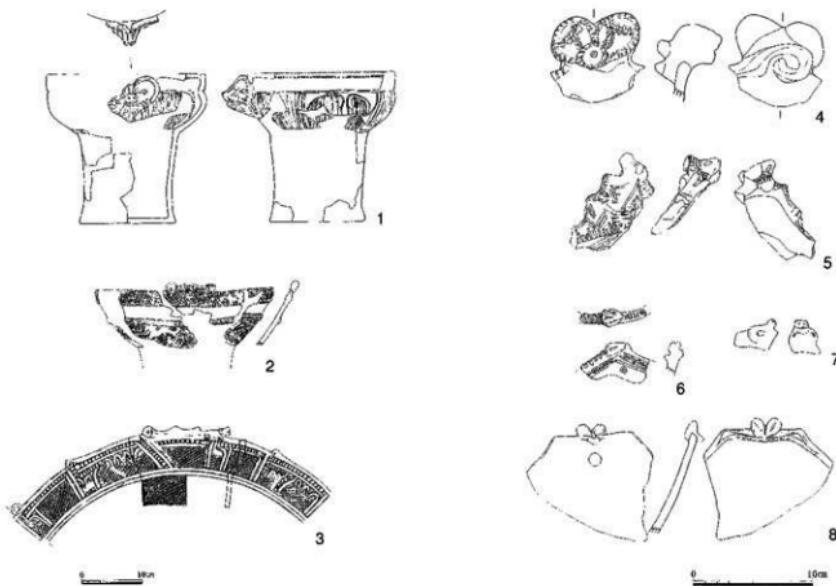
1図16）ではやはり煮沸具としての痕跡を認める事ができる。このことも含め、食べ物を生み出す土器という点も加え、日常の生活の中から猪土器の意味を考えたい。

江戸時代以降現代に至るまでの猪の記録をたどると、害の発生には波があることがわかる^{①②}。猪鹿の害が激しい現在にあっても、この傾向は昭和の終わり頃から平成初期に始まっている。すなわち猪の増加には、気候や環境さらには人との関わりの中で、一定のサイクルが考えられるのである。このような観点からすると、諸磯b式古段階の時期が、猪増

加の頂点であった可能性が考えられる。これは群馬西部地域だけのことではなく、東日本を含めたより広範囲での出来事であったと思われる。ただ集落形成の拡大した群馬西部地域の縄文人が、この現象を契機として、土器の造形に取り込んだのではなかろうか。猪の持つ多座性あるいは食料としての重要性から、食料加工の道具としての深鉢形土器に猪装飾を取り込んだという考え方である。ここには祈りや願いといった意味付けも当然含まれるものと思われるが、後述する中湖中頃での祭祀的な様相の高い猪や蛇を媒体とした祈りの世界に展開するまでは至らなかった^{③④}。中期につながる集落構造や石器群からみた縄文中期的な生産形態は発生しているものの、その連續性は短い。加えて猪発生のピークもそう長くはなく、諸磯b式新段階までは続かなかった。山梨において集落数が増加するとともに天神遺跡のような環状聚落が形成される時期、猪増加のピークはすでに過ぎていたのではないか。山梨県内での猪装飾の少なさやリアルさにかける表現は、そのことを示しているのである。再び猪が登場するのは中期初頭まで待つことになる。その第二の波は、他の動物も組み込む中でさらに大きく展開することになる。このような動きを考えると、前期後半の一時期ではあるものの猪を土器に取り込んだでいごとは極めて重要な問題を含んでいることになろう。

2 再び土器へ

前期終末・新潟から北陸方面にて再び猪装飾らしき造形が土器に表われる。新潟県鍋屋町遺跡出土の口縁部破片には、吻端を上に向けた獣面が付けられている（小島 1996、堀沢 2004）。他に石川県から富山県では、前期終末から中期初頭にかけて小島俊彰氏が首長獸と呼ぶ不思議な動物造形が登場する。この時期の特徴として諸磯b式湖と異なる点は、猪のみならず蛇をかたどった装飾が伴うことである。中期中葉に盛行する猪と蛇、その造形が前期終末・中期初頭という時期に始まることは重要である。縄文人が抱いた二つの動物、それに連なる複雑な文様構成で飾られる土器への表現がこの時期に始まるという、一つの周期を示すように思われるからである。



第4図 中期初頭・前葉の動物装飾（各報告書等より…出典一覧参照）

中期初頭から前葉にかけては中部、関東でも動物装飾が表われる。東京都多聞寺前遺跡の試面付き上器は良く知られる事例である（第4図-1）。クマやコウモリ等の意見もあるが吻端の表現からは猪と見ておきたい事例もある。多聞寺前遺跡や北陸方面の事例を参考にすると、やや時期が下るが山梨県大木戸遺跡の破片（4）は猪汎式期に特徴的な人面装飾の部類に入るものの、猪の特徴を備えているとみてよかろう。一方蛇については山梨県酒呑谷遺跡からは口縁部を違うリアルな造形がある（2）。三角形の頭部や全体の表現からは蛇とみてよかろう。駒平遺跡例も蛇とみられる表現である（6）。さらに不思議な動物表現として、富山県愛本新遺跡の著名な事例がある（3）。堀沢祐一氏はヤモリとするが、小野正文氏は後述する長野県穴場遺跡の釣手土器等も含め「猪頭蛇尾」という表現で、繩文人が作り出した想像上の動物と考えている（小野1992）。類似した造形に駒迎堂遺跡例がある（5）。これは浅鉢形土器の波部に猪とみられる突起が付けられ、さらに口縁に沿って一見蛇と思わせるような隆帯が続くものである。7および8も駒迎堂遺跡出土の動物造形であり、8は浅鉢に付けられており北陸の事例を参考にすると蛇の目が強調された表現の可能性がある。7は明らかに猪であるが時期的な検討も必要である。

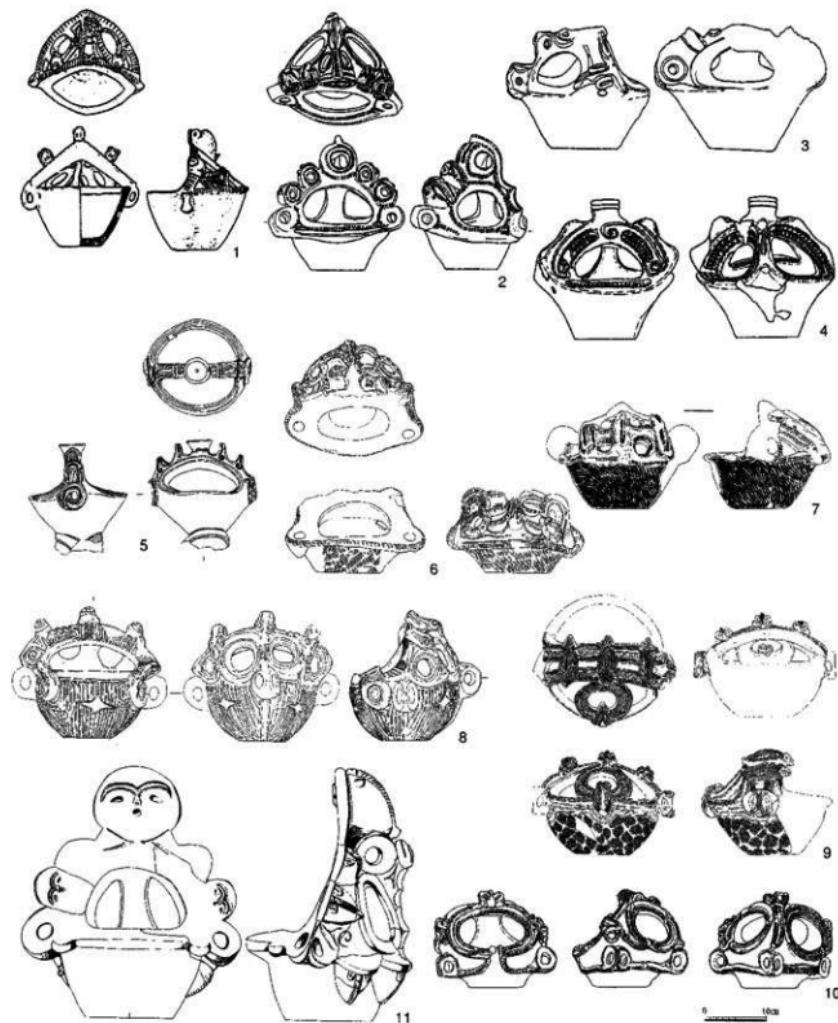
以上の造形についてはその後の時期への継続性や類例の

検証など問題は残るが、少なくとも中期初頭の五頭ヶ台式の時期に猪と蛇とが上器に登場することは確かである。

3 中期中葉への展開

(1) 釣手土器と猪

釣手土器は輪内式から曾利式土器の時期、長野山梨等から中津、関東の山崎地域を中心に用いられた上器である。後期後半以降は地域を越えて発達するが、ここでは中期の上器を対象とする。猪とわかる典型例には山梨県北原遺跡の釣手土器（第5図1）がある。これは井戸尻式期の人面系列釣手土器³²⁾でありその頭頂部に一頭、両脇にそれぞれ一頭づつの計3頭の猪が付く。現在詳細な観察はできないものの、二つの鼻孔、目耳、丸みを帯びた体部そして尻尾の表現など比較的リアルな猪造形である。第7図3、4に示した駒迎堂遺跡出土の猪造形もこのようないかにもう一つかもしれない。これに対して曾利2式の住居から出土した山梨県宮の前遺跡例の造形は同じ人面系列ながらやや異なる（2）。猪造形は、大きな丸い孔一つという鼻に変り、アーチの頭頂部に大きな猪、両脇に2頭づつ計5頭が並ぶ。あたかも親猪の両側にウリボウが4疋並ぶようでもあり、正面から見ると人面タイプ釣手土器の頭部にカールした髪の毛が付くような感がある。これが猪造形であることは、背面の丸みのある体部やそこにつけられた文様、耳の表現



第5図 鈎手土器の動物装飾 (各報告書等より…出典一覧参照)

等から理解でき、北原遺跡例からの展開を確認することができる。北原と大きく違う点は、中央の親猪には背面から蛇がうねり猪頭部に重なることである。猪と蛇との二種が重なった造形でもある。

猪の変遷について北原から宮の前へという展開があると

すれば、頭頂部は少くものの一の沢遺跡にも猪が付いていた可能性はある(3)。加えて背面の波状の隆帯表現は、宮の前の親猪の背を這う蛇と同じ表現とも言える。猪→猪+蛇という展開にあるとすれば、頭頂部に円柱状の突起が付けられている糸迦室例(4)では、この円柱部分が猪、側

面の波状のうねりが蛇という可能性もある。同様な表現は③系列釣手土器である塩瀬下原遺跡例(5)のブリッジ頭部の猪口状突起と、その両側のうねりにも該当しようか。但し、この時期になると猪あるいは蛇といった意識はかなり薄れ、本来の意味が逆転するような場合もある。また曾利式段階になると①系列では頭頂部、②系列ではブリッジ上に人面が出現し、この種の土器の神秘性が一層増す。

ところで北原例より古い藤内式とみられる古林第4遺跡出土の釣手土器(6)にも動物が付く可能性がある。これは頭部を欠いているものの凹脚動物を上から見たような表現にも見える。この動物の頭部が突出していた可能性が高く前稿ではそれを猪と考えたが、体部は1や2のような猪タイプではない。7に示した下平遺跡例も形態は6に類似し、背面には藤内式に特有の抽象文がある。これも頭頂部に伸びているものやはり上部を欠損している。ここに動物の頭部が有った可能性は高いが、どのようなものかは不明。後述するが長野県札沢例のような蛇の可能性もある。この2例について欠損部に猪があったと思いたいのだが、この時期に猪が登場するという事例も明確ではなく今後の資料収集に期待したい。

以上、山梨の事例を追ってみたが猪や蛇という二つの動物の造形をみるとることはできた。

長野県の事例ではさらに複雑な様相にある。まず著名な穴場遺跡例をあげなければならない(8)。頭頂部に3匹、鉢部の両側に2匹の合計5匹の動物がつく。報告書ではこれらを「蛇頭が形どったと思われるモチーフ」「鼻及び口の作出技法は(中略)イノシシに似る作り」「あるいは蛇体とは異なった別の生物をイメージ」という不思議な動物に見立てた(高見1983)。後に渡辺氏や小野氏が呼んだイノヘビの意識がここにみられる。確かにこの土器を正面からみたとき3匹の突出した鼻口は北原遺跡と非常に類似する。その表現は諸説b式の猪と共通する。しかし背面からみると口を始めとした頭部や身体は蛇と見てよい。すなわちこの造形は、正面から見たときに限り猪の表現なのである。蛇体という表現はふさわしい(IH中1999)。時を少し遡る藤内式の札沢遺跡例はいさか異なる造形をなす(9)。釣手部に3匹、背面の環をのぞくかのように1匹、合計4匹、ツチノコとでもいうような動物が違う。鼻先が丸いものもあるが、やはり蛇とみてよいのではないか。時期的に次の段階に位置する熊久保遺跡の動物は、札沢例の顔面によく似るものとの鼻先がさらに丸く、しかも円孔があけられるものもある(10)。北陸地方中期初頭の猪の表現に類似するが、合わせて目の表現はその方面的蛇と共通する。さらに釣手部の3匹の内向かって左側の動物は一層猪に近い(IH中1999)。このように熊久保例は、蛇と猪との二つの特徴をもった構成の造形として注意したい。同様な顔つきは荒神山遺跡でもみられる。また、中道遺跡の例も実に異様である(11)。これは欠損部が多いとされるが猪の顔の部分が人面のように表現されているもので、若干様

相が異なるものの後述する深鉢形土器にも共通する事例がある。

このように、札沢→熊久保→穴場という順で蛇から猪と蛇との融合に進んでいくようである。さらに中期後半に入ると曾利遺跡、前尾根遺跡のように頭頂部に人面が付くが、この両側に連続する円孔文は、山梨県宮の前遺跡を参考にするとやはり猪の正面とすることができます。しかし猪の背面は蛇の感じがあり、この点からも穴場例からの展開が想定できる。

以上、動物を主体とした組み合わせには、①蛇(札沢)
②猪(山梨北原)
③猪・蛇(穴場)
④猪+蛇(宮の前)
⑤人頭猪体(中道)等を見る事ができる。実は他にも東京都武藏台東遺跡のような編蝠とも言われる動物もある。しかしこれも猪が意識されていたことは鼻の状態から推測できる。地域の広がりや下った時代では形骸化や別形態へと変遷する可能性はあるが、蛇・猪・人面がベースになっていたと考えたい。

釣手土器は、神の火を灯す聖なる道具(藤森1976)ともされるが、観察成果からしても中で火が焚かれた様子が窺え、しかも出土状態や文様構成から祭器であったことは確かと思われる(新井1999, 2002)。しかも①系列(人面系)としたタイプはそれ自体が前面であることが研究史からもとらえられており、その頭部を中心に蛇や猪等が付けられることに大きな意味があったと思われる。縄文人が抱いた猪と蛇に対する考え方、それを理解することは難しく想像の域を出ない。生命的復活や豐饒を、怖れや退しさを持つそれらの動物に祈るということもまた想定にすぎない。縄文神話にかかる祈り(小林公明1991)の面から追求する方法もまた魅力があるが、近年田中基氏は穴場遺跡の釣手土器を契機に伝統神話の根源をそこに求め、「火の起源と生命」に関する縄文人の思想を想定した(IH中2006)。前期終末~中期初頭に発生した猪と蛇との造形、それを基に複雑かつ大胆に展開した中期中葉。しかし後半にはその造形も形骸化していく。後期以降、地域を変えながらも上製品として発達していく猪造形。その意味付けはさらに課題として続く。

(2) 深鉢形土器

釣手土器の動物装飾としては、「蛇・猪・猪・蛇・猪+蛇・人頭猪体」という基本的なパターンがみられた。中期中葉の深鉢形土器は実に多彩な文様が施されるが、このうち上記の動物装飾についてはどうであろうか。文様解説についてすでに小野正文氏の後援の業績がある(小野1989)。要約すると、①具体的で表現体が明確なもの
②やや抽象化が進むものの理解可能なもの
③それ自体は不明だが文様構造から帰納的に理解できるもの
④本来の表現が変化し別個の表現要素も加わり帰納的に加え演繹的理解を必要とするもの
⑤推定の根拠はなくもっぱら演繹的理解が必要なもの、という区分である。

ここでは小野氏のいう①②を前提として資料を観察し、

状況に応じて③よりも取り込むことにしよう。まず蛇についてはその造形をたどりやすく、特に1単位の装飾あるいは把手についてはわかりやすい。単独の装飾として採用されている事例は多い。猪については単独で①のケースは少ない。頭部が猪を明確に表している事例として、安道寺遺跡例がある(図6-1)。しかしこれは不思議な文様構成であり、多彩な動物装飾をみることのできる土器である。口縁部から突出した姿は、鼻・口そして頭部の状況から猪に間違いない。しかし体は振った隆帶で表現されており、猪の頭部は表現されていない。小野氏が「猪頭蛇尾」と呼んだイノヘビのモデルの一つでもある。一方小林広和氏は、猪の頭部あたりの観察からこの部分が蛇の口にあたり、牙や喉の孔をも表した(第6図-1①)。具象性の高い表現であり、頭面・蛇身捻装飾土器と呼んだ(小林2003)。すなわちこの造形はキメラ的なものではなく、あくまでも猪の背後に口を開いた蛇が這うという独立した表現であるとした。この上器の特性はさらにも蛇の存在である。猪突起の反対側口縁によじ登るかのように蛙の両脚が表現されている(③)。しかも1縁部へのわずかな高まりとして表現されている以外、特に上半身は見当たらないのである。土器の中に入り込むという意味合いなのか、あるいは猪乃至蛇にくわえ込まれたのか定かではない。蛇をくわえる蛇あるいは蛇を追う蛇といった構図も上器に描かれる事例もある²⁰。猪と蛇、それに対向する蛙等、動物に対するすさまじいほどの繩文人の観察や意味づけが感じられる構成の土器である。天敵関係でもある蛙→蛇→猪という生態系での位置づけに基づくそれぞれの意味が、体として表現された造形であろう。

安道寺例は、蛙が向き合うものの、把手という状況からは猪把手1単位とうい構成である。このような表現は実際には少なく、猪の場合は蛇と向かい合った造形が多い。その典型が上の平遺跡の土器である(2)。口縁に延び上がった蛇、口縁に這い上がりその蛇に向かう猪という構成の土器である。ここでの猪は抽象性はあるものの、身体の丸み、目鼻の残存、円孔一つの扁平な吻端等から猪を表現したことは十分に推測できる。小野氏のいう②段階の表現としてよからう。これに類似した構成は富士見市羽沢遺跡出土品(3)、清瀬市野坂前原遺跡出土品(4)にもみられる。これらの時期は上の平が井戸戸式、羽沢が勝板式後半期、野坂前原が勝坂終末期とされることから、中期中葉の後半期にこのような対峙する猪・蛇造形が盛行したことがわかる。このような構成はさらに抽象化しながらも曾利1式期にまで継続し、甲ツ原遺跡、津金御所前遺跡の上器へという変遷を考えたことがある(第8図)(新津2003)。なお第7図5~8に示した駿連堂遺跡出土の把手破片は、このような上の平タイプの猪の可能性がある。

さて、偏平な吻端、時には鼻孔を表わした大きな円孔、ずんぐりとした体部など上の平例や羽沢例等にみる造形が猪の特徴であるとすると、このような事例は他にもいくつか認められる。原町農業高校前遺跡57号住居からは第6

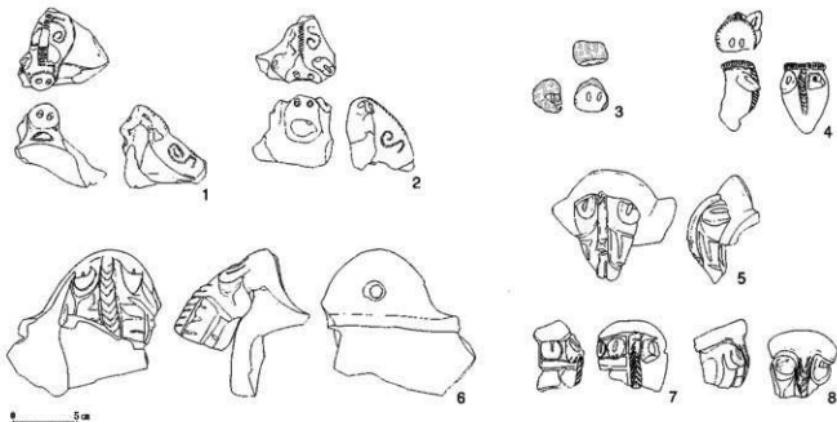
図5のような顔面把手のついた土器が出土している。この顔面把手側の胴部に蛇が巻きくが、その反対側胴部に付けられた立体的な楕円状の文様はまさにこれまで見た猪造形の特徴を表わしている。類例は甲ツ原遺跡3号土坑出土土器にもみられる(6)。この上器は把手部分を欠損するもののここに顔面が付いていた可能性は高い。但し原町農業高校前遺跡例とは異なり、把手側胴部が猪・反対側が蛇という構成である。小野氏は富士見町下原遺跡出土の類例もあげながらこの違いを猪と蛇との互換性と説くとともに、原町農業高校前遺跡例等でみると猪の下方に「土偶の尻のような尻が付く」と観察し、特に猪に女性のイメージが結びつくというこの種の造形の根源に関わると思われる大変重要な可能性を想定した(小野2002)。これらの例は深鉢形土器ではあるものの、胴部の膨らみが強い「樽」状の器形であることも重要と思われる。というのも口縁部にて猪と蛇とが対峙する上の平遺跡例等はキャリバー形であり、胴部で対峙するのが「樽」状胴部の上器なのである。すなわち、猪と蛇との位置が樽状土器では脚部、キャリバー形では1縁部という構成には、器形と文様とを含める種の物語り性ともとづく連続した流れがあるようにも思われる。そこに我々が誕生土器と呼ぶ顔面把手付きの海道前C遺跡の上器(7)を介するとさらに意味深い。これは胴の膨らみが強い土器であり、土器自体が女神の身体という見方もなされている。特に猪はつかないものの顔面把手の反対側に同心円状の文様がつくものである。これら上の平・羽沢、原町・甲ツ原、海道前Cなどの造形には、猪・蛇・女神等が介在する繩文人が醸し出したある種の思想が存在するようである。

なお、胴部に付けられた半円筒状の造形については、有孔鉢付上器にも類例がある。駿連堂遺跡S-1区4号住居例では両脇が付き人体文のようでもあるが猪の吻端状の表現もなされている(12)。また一の沢48号土坑出土の有孔鉢付上器でも胴部に4個の吻端状表現のされた装飾がつく(13)。これも猪造形に蛇の文様が施されたという見方もできよう。但しここまでくると、小野氏の解説^④段階にまでなり根拠は薄い。

次に一の沢遺跡4号住居から出土した一群の土器の事例もまた興味深い。まず第6図8である。ここには口縁部にずんぐりした把手が付く。これもその造形からは猪とみてよからう。円孔を持った丸い面は上を向いているが、なんとここには吻端を取り巻くかのように蛇が這い、頭を上げている。猪と蛇との対峙ではなく、重層なのである。但し、この上器の把手は二単位であり、この重層した猪・蛇の対面にも把手が剥がれた跡が残っている。この剥離の幅は、残っている把手の幅よりも広く全く同じ造形ではないことがわかる。蛇が中心となるのか人面が付けられていたのかは不明である。しかし東京都多摩ニュータウンN-67遺跡の例を参考にすると二単位把手とも同じ構成であった可能性が高い。多摩ニュータウン例は筒状の器形ではあるものの、1縁部に円筒形の猪とその吻端縁に巡る蛇とから構成



第6図 深鉢形土器等の動物装飾（各報告書等より…出典一覧参照）



第7図 駿遊堂遺跡の猪装飾（把手）（報告書より）

される把手が、相対して付けられている（東京国立博物館2001）。高く突出した把手は猪も蛇も大きく、その分口縁部に占める幅は広い。この部分が一の沢例にて欠損する片方の把手と同じ可能性を考えたい。

次に第6図9は4単位把手の胴が強く括れるキャリバー形の土器である。二箇所の把手が欠けてしまっているが、一つが顔面把手をなす。通常顔面は、両耳から頭頂部まで曲線的な三角形の輪郭の中に、アーモンド状の目、豚鼻状の鼻孔、丸い口等が描き出されるが、この顔面全体は円形であり、その中の眉の下に小さく丸い目が付くだけで鼻孔も口も表現されていない。しかもこの顔面は、側面および上面からみるとずんぐりした丸みのある体躯の前面に付けられていることがわかる。この体躯は先にみた上の平追跡や羽沢の猪と考えた身体つきによく似ているのではないか。側面に付けられた円孔や三叉文も同様である。やはりこの造形は猪が基本となっているようと思われる。顔面が丸く表現されているのも猪の鼻（吻端）の輪郭に人面を意識したからではなかろうか。この顔面の小さな目は、実は猪の鼻孔からきたものでありそれに眉を付け、人面の意識を醸し出そうとしたものかもしれない。本来は猪であったとみなしたい。長野県中追跡の釣手土器（第5図11）にも共通する。上の平追跡等では口縁部に違い上がった猪が、この9の土器では把手の最上部にまで至ったのである。さらに顔面の頂部につく突起が蛇であることは、これも側面や背面の観察から理解できる。すなわち猪の背中から頭部にかけて蛇が這っているのである。従ってこの造形は猪・蛇・人面といった三種の表現から構成されると考えられる。なお、この土器は四単位把手であり、猪・蛇・人面の把手の隣は蛇が中心となっている。残りの把手は欠損しており、

詳細は不明である。しかし四単位把手についても猪や蛇は基調になっていることがわかる。このような観点から他の土器を見ると、同じ一の沢遺跡4号住居の10では円筒状の突起4個がそれぞれ対峙して付けられている。釣手土器第5図4や5についてもふれたがこれも猪吻端の表現が基となった可能性がある。しかし円筒が乗る部分をみると、図にみるように①とした蛇を思わせる障壁が付けられたものと、猪の背を思わせる②の部分があり、それぞれが向かい合って四単位の把手を構成しているものとも思われる。このような見方ができるとすれば、駿遊堂遺跡出土の11のような四単位把手もその丸みは猪の体躯を源流とする可能性もあり、やはり蛇と猪という構成を考える必要があろう。これについてはやはり小野氏の解説段階④から⑤に踏み込むことになり、その解説は非常にむずかしい。

以上いくつかの事例から、猪にかかわる造形を推測してきた。特に猪・蛇・人面あるいは人體と共に表現される傾向を窺うことが出来た。ここで再度深鉢形上器の猪造形を整理すると、次のようになる。

- 1 猪+蛇+蛙 安道寺
 - 2 イ 口縁 猪+蛇 上の平、羽沢、野塩前原
 - ロ 脇 猪+蛇（顔面把手付土器脇部） 原町
 - 猪（顔面把手付土器脇部） ⇌蛇 甲ツ原
 - 3 猪+蛇+猪+蛇 多摩ニュータウンN. 67、一の沢（第6図8）
 - 4 猪+人面+蛇（4単位把手の一つ） 一の沢（第6図9）
- このような猪造形については、釣手土器では北原遺跡のように単独で付けられるものもあるが、深鉢形上器も含めて蛇とセットあるいは組み合わさることが多く認められ、むしろそれが基本であったと思われる。時には猪に人面が



第8図 対照する装飾土器の変遷（新津 2003）

表現される場合もあり、少ない事例ながら東京都草花遺跡のように顔面把手の頭頂部に猪がつくこともある。

次に時期の問題についてふれてみる。中期中葉において土器に猪が盛行するのは、井戸尻式の時期である。最もリアルな表現は釣手土器では北原遺跡例であり、顔面では深鉢形土器の安道寺遺跡例である。体形の表現が猪をよく物語る上の平遺跡や羽沢遺跡例もあるが、野塙前原例のような新段階も含めこれらは全て井戸尻式の段階である。猪の体形とともにリアルな蛇頭が表現される多摩ニュータウン67遺跡も、井戸尻式の古い段階に併行する時期に位置付けられよう。釣手土器についても、藤内式期にまで遡るもの、その段階では札沢遺跡例にみると蛇が表現されている。山梨でも古林第4遺跡や下原遺跡からこの時期の釣手土器が出土しているが、いずれも頭頂部が欠損することから、ここに蛇が付いたのか猪なのか残念ながら不明である。古林第4例にその可能性は残すものの、確実には北原遺跡のように井戸尻式である。但し利田堂遺跡出土の第7図1、2はかなりリアルな猪表現であり、細かい刺突文が連続する。このような施文は新道式の時期に遡るものであるが、その時期の猪造形は明確ではない。1、2とも把手部分の破片であることから土器全体からみないと詳細はわからないが、藤内式段階の可能性もあり今後の問題と

して残しておきたい。

こうしてみると、新道式期や藤内式期においては深鉢形土器での抽象文あるいはサンショウウオ文などからみて、蛇に起因する造形は発達するものの猪表現は明確ではなく、中期中葉では顔内式に始まり、井戸尻式期で盛行するといった傾向をみることができる。札沢の釣手土器に表現された蛇も、このような時期的な中で付けられたものであろう。

すでにみたように中期初頭では、猪造形も見られたにもかかわらず、さらなる展開は中期中葉後半にあるといった意味は何であろうか。なお、富山県愛本新遺跡や駒ヶ谷遺跡の事例から、すでに中期初頭の段階で、猪と蛇とが合体したような造形も表われているが、これも一旦は消滅してしまうのである。

4 猪造形の意味

諸磯b式土器の古段階から中段階頃、土器の口縁部を中心に猪とみられる造形が付く。地域的には東日本の諸磯b式土器が分布する地域に広く認められるがその期間は短く、また猪と理解できるリアルな造形は群馬県を中心とした地域が主体である。次に出現するのは、前期末の北陸方面でありこの時は蛇とみられる造形も始まる。この地域では中期初頭にまで継続し、この頃関東や山梨でも再び猪造形が土器を飾る。やはり蛇の造形もみられる。しかしこの五領ヶ台式土器の時期を過ぎると、蛇の文様はみられるものの猪はしばらく中断し、次に華々しく登場するのは中部山岳地帯を中心として、中期中葉後半の井戸尻式土器の段階を中心とした時期である。この坂釣手土器や深鉢形土器には、猪単独もわずかながらあるものの、主として蛇及び人面あるいは人体文とともに盛行する。この造形は明確さを失いながらも深鉢形土器では中期後葉の始め、曾利1式にまで続く。釣手土器では曾利2式までは猪として理解できる造形は残る。以後、蛇も猪も形態化し本来の意味は薄れてしまうが、後期以降富山県井口遺跡のような土器の猪造形はあるものの、単独の動物形土器製品としての展開を見る⁽²⁷⁾。このような猪装飾の出現や展開の意味は何なのであろうか。この猪装飾が語る意味については前期から晩期まで通して全く同じというわけではないと思われ、大きさは諸磯b式期、中期、後期以後という三つの時期で微妙な違いがあったものと思われる。諸磯b式期は猪の顔面が意識される時期であり、基本的には猪単独での造形にとどまる。縄文人の意識はあくまでも猪に限られたものと理解したい。後期以降の猪全体を立体的に表現した土器製品についても、猪そのものの表現である。但し藤岡神社東遺跡からは犬形を始めとして複数の動物形土器製品が出土しており、上製品を用いた儀礼ないし祭祀が行われたことも考えられる。

このような二つの時期での在り方に対して、中期の猪造形は複雑な様相を呈している。その第一は蛇とともに出現することである。北陸地域の前期末に猪装飾が出現するが、

このとき蛇装飾も土器に出現している。この状況は中期初頭でも同じで、山梨方面でも五頭ヶ台式土器には猪がつくもの、蛇が付くものそれぞれをみることができる。中断するものの井戸尻式の時期、同一土器にあって猪と蛇とが対峙する構成も多く、時には顔面把手付土器の肩部に猪と蛇とが対応する場合もある。また猪と蛇とが合体することもあるが、これには重層的に二つの個体が重なる場合とキメラ的な一つの個体という両者が有りうる。

このように、中期の猪は蛇や人面・人面、さらには蛙など組み合わされ、土器文様が展開している。この背景に小林公明氏が唱えるところの縄文神話にもとづく物語り性の存在（小林 1991）も推測できるところである。

ところで前期末、中期初頭に蛇とともに猪造形が再び登場するが、このことが猪の意味を考える手がかりになる。酒呑場遺跡例（第4図2）からはこの蛇は蠍の表現かと思われる。死をもたらす蠍の恐怖は、蛇に対する恐れをなす。ところが蛇は猪の食料源としてその好物の一つでもある。いわば猪は蛇の天敵ともいえる。現代の事例でも、猪が増えると蛇や蛇が減少するという伊豆谷での事例が紹介されている（松山 1978）。しかも猪は人にとっては食料源として重要かつ多産でもあり、豊穣の象徴ともなりうる。加えて子猪のかわいしさ、雄猪の強さ等、縄文人にとてインパクトの多い動物である。蛇と猪、この両者が同時に土器を飾る意味合いは二つの動物がもつ性格が、縄文人の日常や祈りの世界に大きな位置を占めていたからではなかろうか。特に井戸尻式の時期、猪と蛇とは対立対峙しながら土器の胴部から口縁そして突起の最上部までを行き来する。時には人面を持つ女神ととともに、時には二つの動物は重なり合いままたは合体し、恐れと豐穰とを合わせ持つような造形として土器を飾る。もとより深鉢形土器はたべものを生み出す道具であり、そこに表出された動物や人面もまたそれに関わる役割を持っていたと考えたい。すでに多くの先史により主張されてきたように、豊穣を願う縄文人の願いがこのような動物の表現に関わっていたと思われる。

おわりに～課題と展望～

これまで、縄文時代前期から中期までの猪装飾あるいは造形の発生や展開を概観してきた。最後に猪が土器に付けられる時期を再度整理するとともに、その背景についてふれておきたい。まず最初に出現するのが諸磯b式の土器であるが、これは長くなく古段階から中段階という限られた期間である。次に表されるのが北陸方面での前期終末期であり、中部山岳地域から関東では中期初頭からである。しかしこれも継続するのではなく、一旦下火になり再度燃え上るのは中期中葉でも後半の藤内式の終り頃から井戸尻式の時期である。特に井戸尻式の段階では蛇や人面・人体装飾と関わりあいながら実に多様な造形として展開する。これも曾利式に入ると急激に衰退し、一部鉤手土器等に継続するものやがて消滅する。次に盛んになるのは後期後半以降であり、しかもここでは土製品という表現が中

心となる。このような猪造形の消長は何を意味するのであろうか。縄文人が抱く猪觀が時期により異なるといった点もあるが、一つには猪との出会いの頻度によるものと思われる。縄文時代を通じて程度に差はある、食料源としての猪の重要性とそれに基づく関わりは共通しているであろう。しかし野性動物としての猪個体数の増減は当然あったと思われる。現在は猪の増大期に当たっており、各地にて猪被害の増加が報じられている。山梨の事例からは、昭和の末期ないし平成始めの頃から猪被害が始めている。ここ15～20年程のことである。江戸時代甲斐国での猪害の変遷を調べているが、そこでも害の程度は一定ではなく、現在に至るまで少なくとも30年程度のスパンで波がある傾向をつかむことができる（新津 2007）。このような野性動物の個体数増減の波は、環境変化とそれとともに野獣の確保や天敵との関わり等の生息条件に関連して常に生ずるものであるが、さらに人間の開発にもかかわって発生する事態と考えられる。特に現在では気候の温暖化とともに山林や農地の荒廃等、自然条件と人間がもたらす環境変化が猪や鹿の個体数増大に大きく関わっている可能性は高い。同様に縄文時代にあっても生息条件の好転にともない猪個体数が増加する時期も当然あったものとみられ、加えて集落の大規模化や周辺地域への開闢等により、人と猪との出会いの機会が増加するといった現象も考えられる。これまでみてきた猪装飾や造形の盛行期が、このような猪が増加する時期であったと考えることはできないであろうか。少なくとも猪造形を作り出すには猪を詳細に観察する必要があり、この点からも身近な動物であったことが考えられる。先にも述べたように、現在は猪出現率が極めて高く作物被害も増加している時期である。昨年の平成18年のことであるが、5月から7月にかけてウリボウが保護された報道が多く、筆者も実際に鳥獣保護センターにて3回にわたり保護された合計8匹のウリボウを観察した。さらに白宅の畑に表われたウリボウ1匹の脚付けに成功し餌養を試みた小野正文氏の事例や、保護していた雌猪が川へ戻った後再び身上に表われ出来たという道志村での事例等、猪と人との出会いに関わる話題が多い年でもあった²⁸⁾。

このような事例を参考にすると、縄文時代にあっての猪増加時期では特に人と猪との出会いは多かったものとみられる。このような状況を考えると、かつて小野氏が主張した半獣育的様相を意識した猪飼養論は実に魅力的である（小野 1984）。少なくとも猪を観察し造形の機会は多く、また猪に対する信仰が生まれ易い状況にあったことは確かであろう。

先にまとめた猪装飾や造形が盛行する時期、その背景には猪増減の周期が大きく関わっていたのではないか。土器の造形にとどまらず貝塚における猪骨や内陸部での焼骨等、猪にかかる出土遺物について周期的な増減状況をつかむことにより、さらに詳しい周期をつかむことができるものと考える。加えて AMS C14年代測定をあわせることにより、江戸時代以前での周期を推測したような実際の時

開拓をもつかむことができるのではないか。今後の課題としたい。

なお、猪と人とのかかわりは深く長い。現在においてもこの関係は変らず、むしろ作物被害も含めそのかかわりは一層強くなっている。特に甲山から耕地という限られた環境の中での生息という点では、これからの両者の関係はさらに重要となってこよう。このような問題を考える上でも、人と猪にかかる歴史を整理していく作業が大切である。この一環として今回は縄文時代における猪について資料を整理した次第である。猪装飾の意味、特に中期における蛇や人面・人体文との構成にかかる解釈はむずかしいが、そこには縄文人が抱いた動物観や世界観が表現されているのであろう。

このような問題も含め、現在に至るまでの長い歴史の中で、縄文人の猪との関係がどのように位置付けられるのか、今後追及していきたい。

以上、小論をまとめるにあたり、駿迎堂遺跡博物館と北杜市教育委員会には資料掲載や資料調査等で協力戴き、小野正文氏、小林広和氏、秋山主子氏、伊藤公明氏には資料に関わってお世話になった。文末ではあるが謝意を表します。

註

1 関根慎二氏の講演「イノシシの付いた土器」(2003年12月4日、安中市ふるさと学習館開催第3回企画展「ストーンロード—縄文時代の黒曜石交易—」連続講座)でのデータ。

2 小野正文氏は幼・若獣が表現されたものとみる(小野1989)。なお牙が表現された事例では富山県井口遺跡の後期注口土器の猪造形がある。また、後述する安道寺遺跡例について、小林広和氏はその可能性を考えている(小林2003)。

3 江戸時代甲斐国の場合ではあるが、村夫錢帳に記載された猪害対策費を抜き出していくと、時期や地域により増減を認めることができる。経費の多い年は猪出現率が高いものとみなされる(新津2007)。

4 関根慎二氏は中野谷松原遺跡の猪土器が特に墓坑から出土するものではないことから、浅鉢形土器とは異なって特に儀礼や信仰面での関わりは少ないものとみなし、日常的でも特別な使命の土器と考えている。これが黒曜石交流にかかる威信財説の根拠ともなっている(関根2003)。

一方清水比呂之氏は、千葉県飯山満遺跡のような猪装飾土器と墓との関連性を考える中で、豊饒や多幸への祈りを込めた祭祀儀礼を想定した(清水1981)

5 筆者はかつて山梨県内の釣手土器をまとめたことがある。この中で形態分類を行い、次のような系列を設定した(新津1999)。

①系列 釣手上器全体が顔面把手あるいは十個の顔面を

意味した形態であることから、このような系列にあるものを指した。人面系列とも称することができる。

②系列 鉢部U縫から幅広く張り出した鈎がせりあがつて釣手となる形態。

③系列 一本のアーチが釣手部を形成する形態

④系列 鉢形土器の左右に把手が付くものの、アーチとはならない形態

⑤系列 ④系列をベースに複合した要素により形成されるもの

この中に動物や人面が付くのは①系列を中心に②系列が含まれる。

6 長野県丸山遺跡からは蛇が蛙の前脚をくわえ込む表現の有孔鉢付上器が出土している。曾利遺跡の著名な蛙文土器についても、設楽博己氏は同様の構図とした(設楽1996)

7 山梨では後期の猪形土製品には駿遊堂遺跡例がある。また中期にも皆無ではなく、長野県梨久保遺跡、南八王子地区遺跡等の出土例からその可能性は指摘されている。

8 小野正文氏が自宅に現れたウリボウを飼付けし、詳細な観察をおこなっている。筆者も見学させて戴くとともに、いろいろとご教示戴いた。また1年前保護していたウリボウが成長後山へ戻ったが、年明け後の5月再び表われ6匹のウリボウを出産した事例については、それを育てた道志村渡辺新平氏から詳細を伺った。これらの事例から、子猪は実に人に慣れやすく可愛らしさもあり、縄文人との関係にも強いものがあったと考えられる。

引用文献

小野正文1984「縄文時代における猪飼養問題」「甲府盆地—その歴史と地域性」

1989「上器文様解説の一研究方法」「甲斐の成立と地方的展開」角川書店

1992「イノヘビー猪蛇装飾のある上器について」「考古学ジャーナル」346

2002「物語文様について」「上器から探る縄文社会」山梨県考古学協会

小島俊彦1996「土器把手の表現—北陸の中期縄文土器に現われた動物たち」「中部高地をとりまく中期の上偶シンボジウム発表要旨」「土偶とその情報」研究会

小林公明1991「新石器時代中期の民俗と文化」「富士見町史」上巻

小林広和2003「蛇身挖装飾について」「山梨考古学ノート」「田代孝氏追職記念刊行会

設楽博己1996「つきあいのはじまり」「動物とのつきあい」「国立歴史民俗博物館

清水比呂之1981「多闇寺前遺跡出土の顔面付土器」「どるめん」30 JICC出版局

関根慎二2003「黒曜石交易のトレードマーク—イノシシの付いた土器—」「ストーンロード—縄文時代の黒曜石

- 交易一』安中市ふるさと学習館
大人工豊 1998『中野谷松原遺跡』群馬県安中市教育委員会
高見俊樹 1983『穴場!』諏訪市教育委員会他
田中 総 1999『縄文土器のふしぎな世界』第二章・中部高地の釣手土器展小川鉢 諏訪市博物館
田中 基 2006『純文のメドゥーサ』現代書房
東京国立博物館 2001『土器の造形』展示図録
新津 健 1994『イノシシ装飾の変遷』「天神遺跡」
1999『縄文中期釣手土器考』『山梨県史研究』7
2002『縄文中期釣手土器考2』『研究紀要』18
山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
2003「上の平遺跡出土の動物装飾付土器とその周辺」『研究紀要』19 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
2007『大錢帳からみた猪鹿害への対策』(上)
(下)『甲斐』112, 113山梨縣土研会
藤森栄一 1976『縄文農耕』学習研究社
堀沢祐一 2004『北陸地域の動物意匠について』『考古学ジャーナル』515
松山義雄 1978『狩りの語彙』法政大学出版局
山梨大学考古学研究会 1978『御所遺跡発掘調査報告』山梨大学考古学研究会調査報告第1集
1981『御所遺跡第一2次発掘調査報告書』山梨大学考古学研究会調査報告第2集
締田弘実 1999『長野県富士見町札武遺跡出土の釣手土器』
『長野県立歴史館研究紀要』5
渡辺誠 1992『縄文土器の形と心』『考古学ジャーナル』346
- ### 図の出典
- 第1図 (1) 北杜市教育委員会提供 (2, 3) 山梨県教育委員会 1994『天神遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第97集 (4) 山梨大学考古学研究会 1978『御所遺跡発掘調査報告書』山梨大学考古学研究会調査報告第1集 (5~7) 山梨大学考古学研究会 1981『御所遺跡第一2次発掘調査報告書』山梨大学考古学研究会調査報告第2集 (8) 豊富村誌編さん委員会 2000『豊富村誌』上 (9) 山梨県教育委員会 1989『花鳥山遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第45集 (10) 山梨県教育委員会 1987『駿迎堂』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第21集 (11~13) 山梨県教育委員会 1991『獅子之前遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第61集 (14~16) 山梨県教育委員会 2003『大木戸遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第205集
- 第2図 山梨県教育委員会 1994『天神遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第97集
- 第3図 国根慎二 2003『黒曜石交易のトレードマーク—イノシシの付いた土器—『ストーンロード—縄文時代の黒曜石交易—』安中市ふるさと学習館

- 第4図 (1) 清水比呂之 1981『多聞寺前遺跡出土の獸面付土器』『どるめん』30 JICC出版局 (2) 山梨県教育委員会 2004『洒落場遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第216集 (3) 小島俊彰 1996『土器把手の表現—北陸の中期縄文土器に現われた動物たち』「中部高地をとりまく中期の土偶 シンボジウム発表要旨」「土偶とその情報」研究会 (4) 山梨県教育委員会 2003『大木戸遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第205集 (5, 7, 8) 山梨県教育委員会 1987『駿迎堂』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第21集 (6) 豊富村誌編さん委員会 2000『豊富村誌』
- 第5図 (1) 上川名昭 1971『甲斐北原・柳田遺跡の研究』
(2) 西桂町教育委員会 1993『宮の前遺跡発掘調査報告書』(3) 山梨県教育委員会 1989『一の沢遺跡調査報告書』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第42集 (4) 山梨県教育委員会 1986『駿迎堂』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第17集 (5) 山梨県教育委員会 2000『塩瀬下原遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第185集 (6) 大泉村教育委員会 2002『古林第4遺跡』大泉村埋蔵文化財調査報告書第16集 (7) 須玉町史編さん委員会 1998『須玉町史』考古・古代・中世 (8) 諏訪市教育委員会他 1983『穴場!』(9~11) 締田弘実 1999『長野県富士見町札沢遺跡出土の釣手土器』『長野県立歴史館研究紀要』5
- 第6図 (1) 小林広和 2003『蛇身挽装飾について』山梨考古学ノート・田代孝氏退職記念誌刊行会 (2) 山梨県教育委員会 1987『上の平遺跡』第4次・5次発掘調査報告書 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第29集 (3) 富士見市教育委員会 1985『富士見町遺跡群』富士見市文化財報告第34集 (4) 清瀬市教育委員会 1982『野塙前原』清瀬市文化財報告I (5) 山梨県教育委員会 2005『原町農業高校前遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第221集 (6) 山梨県教育委員会 1996『甲ツ原遺跡IV』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第145集、写真は北杜市教育委員会提供(小川忠博氏撮影) (7) 山梨県教育委員会 2000『海道前C遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第165集 (8~10, 13) 山梨県教育委員会 1986『一の沢西遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第1986集 (11, 12) 山梨県教育委員会 1987『駿迎堂』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第21集
- 第7図 山梨県教育委員会 1987『駿迎堂』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第21集
- 第8図 新津 健 2003『上の平遺跡出土の動物装飾付土器とその周辺』『研究紀要』19 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

春日居町鎮目某古墳出土の素環鏡板付轡

坂本美夫

- 1 はじめに
- 2 資料の概観
- 3 年代
- 4 春日居古墳群の性格

- 5 春日居古墳群の歴史的背景
- 6 銀具立開素環鏡板付轡の編年的素描
- 7 おわりに

1 はじめに

旧東山梨郡春日居町鎮目は、平成17年に合併し、現在は、笛吹市春日居町鎮目となっている。この轡は、当センターの出前事業に赴いた先に勤務する中村直人先生から提示されたものである。中村先生の話によると、轡は春日居町に住まいのある叔父から預かったとのことで、さらに出上地の特定はできないが、叔父の知人が鎮目地域の占領から掘り出したものを譲り受け、保管していたものと聞いていたとのことであった。

このため、出土した古墳を具体的に特定することはできないが、少なくとも鎮目地域の占領から得られたことは確かなことといえる。そして鎮目地区は、鎮目地区を含めた一帯に春日居古墳群が分布している地域であり、これまでに県内に有数の馬具出土地域となっている。

このような地域から新たに確認された轡は、春日居古墳群の性格を解明するまでの資料となり、先ず7世紀中頃に使われた馬具であることを確認した。さらに本資料を含めた春日居古墳群の馬具の出土数・副葬時期を求める中から、県内最強の軍事氏族の存在を確信し、これによって、後の都境設定に係わることができた氏族であったことを想定した。

合わせて、古墳時代後期の代表的形態である馬具編年素案を検討、5形態5期に渡る変遷について提示したところである。以下、これらの検討、考察について述べてみたい。

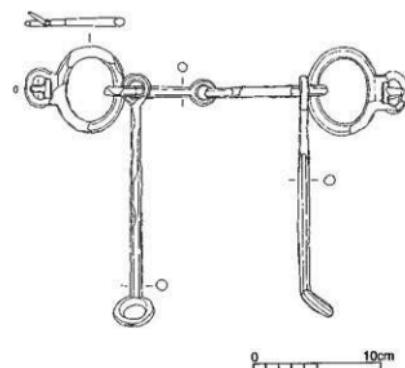
2 資料の概観

本例における引手などの取り付け形態は、銜先環に引手と鏡板とと共に結合するものである。鏡板の環体は、断面楕円形の鉄棒を楕円形に曲げた形態で、長径6.8~6.9cm、短径5.2~5.4cmの大きさである。立間は、鏡板の環体から鏡具部の間に0.6cmほどの扁平な頭部をもつ形態で、長さ2.6cmほどである。鏡具部の環体は、断面楕円形の鉄棒を、鏡板の環体と同様に楕円形に曲げた形態で、幅3.1~3.3cm、高さ2cmほどの大きさである。鏡具部に付く刺金は、「T」の字状の刺金で、基部を環体にはめ込んだ形態である。

なお、この刺金輪は、鏡具部の環体の間いっぽいの幅広の形態である。引手は、単線の「く」の字引手で、向かって左が19.8cm、向かって右が18.9cmと多少の長さの違いをみせる。引手の断面は、円形である。銜は、二連式のもので、銜先環の内側で12cm、銜先環の外側で17.8cmほどの長さである。

3 年代

本例は、以上概観したとおり素環鏡板付轡の中でも、立開部に刺金を取り付けた鏡具立開素環鏡板付轡である。この形態の轡は、後期古墳の時代に盛行する形態であるが、本例は、先に述べたように、刺金の刺金輪の軸を鏡具部環体に接するまでいっぽいに接する形態に特徴があるものといえる。この形態を、これまで本県で確認されている鏡具立開素環鏡板付轡の形態と比較してみると、次のようになる。鏡具立開素環鏡板付轡は、9例ほど確認されているが、そのうち刺金を頭部にあけた小孔にからめて取り付ける形態



鎮目某古墳出土轡

が5例(可能性のあるものを含めると7例)であるのに対して、刺金輪をはめ込み取り付ける形態は2例と少なく、比率的には23%程度で、県内においては少數派の形態といえるようである。この傾向は、手持ちの資料で全国をみた場合でも、刺金輪を持った例が比率にして20%ほどと本県とほとんど変わらない低い比率を見せており、それほど普及した形態ではないようにも考えられる。

県内のこれまでに確認されている刺金輪を持つ形態の2例は、甲府里垣無名墳^①、それに春日居天神のこし古墳^②である。このうち甲府里垣無名墳とは、刺金輪の幅いっぱいの刺金輪という点では本例と同じであるが、甲府里垣無名墳が本例の側に比べて立聞き、特に頭部が長く、その断面形態も両側が軌道状を形成する形態をとるもので、全く違う形態といえる。一方の天神のこし古墳例は、頭部の長さなどもほぼ近い類似の形態である。ただし、天神のこし古墳の刺金輪の幅は非常に狭く、頭部幅の3分の1程度で、鉢具部環体に接することなく遙か内側で刺金輪がはめ込まれる形態であり、本例のように鉢具部環体に接する刺金輪の幅に違いをみせている。従って、全く同形態のものは、今のところ見られないということになる。

次に、いつ頃作られたもののか検討してみたい。ただし、伴出遺物が轍のみであることから、これ自体から導きだすという制限がある。本例は、鉢具立聞素環鏡板付轍の中でも立聞き形態から「呂」の字形の形態をとるものといえる。この形態については、既に幾つかの論説が提示されているが、立聞きの突出度が時間の下に従って次第に低くなる傾向が指摘されており、筆者もかって鉢具立聞素環鏡板付轍の出現期を中心に検討したことがある。その中で頭部の長さについても検討をこころみたが、突出度との間に時期との間に若干あるが相関関係の存在が想定できるような状況といえる。この検討結果と比べると本例の頭部ははるかに短く、概観で示したように6mmほどである。この数

値は、初現期の轍である甲府里垣無名古墳の14mmにはほど遠く、春日居古墳群中に存在する天神のこし古墳(笛吹市春日居町熊野)の8mmに近い数値である。数値的には頭部が6mm以下の場合は、搬出遺物、特に須恵器から見た場合7世紀後半世紀前後に集中がみられることから、このころの時期を想定してもそれほど誤りはあるまいと考え、これをもって本資料の年代と捉えておきたい。年代を決定する他の資料の存在しない点からすれば、やむを得ないものと考えているが、あくまでも、頭部数値と年代観との関係が厳密に確認されているわけではない。

4 春日居古墳群の性格

(1) 県内古墳群における馬具出土状況

春日居古墳群(41基)から出土した馬具の数は、表1のように轍だけとりあげてもこれまでに12例が確認されている。このうち正式調査で確認されたものは、平林2号墳^③の1古墳4例、天神のこし古墳の1例に過ぎず、残りは全て旧蔵品である。このような点から考えると、数の多いことに偶然性とばかりいえないものがある。もともと副葬数の多かったものと受け止めなければ、本来の特性を見落とすことにもなりかねないと思われる。馬具の多いことを春日居古墳群の特徴と捉えることが、性格を把握する上で必要なことであろう。

それでは、次に県内の他の古墳群における馬具保有状況がどのようなものであるのか、春日居古墳群の周辺に分布する古墳群の状況をみたうえで、馬具保有古墳群を中心にしてその概要に触れ、特徴をみてみたい。

まず、県内の古墳群の分布状況をみると次のようになる。特に古墳群は甲府盆地の北部、中でも北東地域に顕著に認められる。春日居古墳群を起点とした西側には、大藏経寺古墳群(笛吹市石和町)、横根・桜井古墳群(甲府市)、北原古墳群(同)、赤坂古墳群(甲斐市)、東側には岩下古墳

表1 春日居古墳群出土馬具の消長

古墳名	馬具種類	時期(四半世紀)	6世紀		7世紀	
			3	4	1	2
寺の前古墳	心葉形鏡板付轍	~6第4	●	○		
	板状立聞素環鏡板付轍	7第1			○	
	鉢具立聞素環鏡板付轍、「8」	7第2~			○	
狐塚古墳	不明	(6第4~7第1)	●	○	○	
	鉢具立聞素環鏡板付轍、「8」	7第2~			○	
鎮目無名墳	鉢具立聞素環鏡板付轍、「呂」	~7第2			○	
	花形鏡板付轍	7第1	●		○	
平林2号墳	板状立聞素環鏡板付轍	7第1			○	
	板状立聞素環鏡板付轍	7第2			○	
	板状立聞素環鏡板付轍	7第2			○	
	鉢具立聞素環鏡板付轍、「呂」	~7第1	●		○	
天神のこし古墳	鉢具立聞素環鏡板付轍、「呂」	7第1~			○	
梅沢無名古墳	鉢具立聞素環鏡板付轍、「呂」	7第1~			○	
	金属製壺鉗	7第1			○	

●は古墳築造期

群(山梨市)、鎌生古墳群(笛吹市御坂町)、長田古墳群(同)、竹居古墳群(同御坂町・八代町)、八代古墳群(同八代町)、八乙女山古墳群(同境川町)、蛇山古墳群(同)、四ツ塚古墳群(笛吹市・宮町)、国分古墳群(同)、塙田古墳群(同)、千米寺・石古墳群(同)などが主な古墳群として抽出でき、これらの多くは群集墳を形成するものが多い。このほか前期古墳の造られた地域にも、やや小規模であるが古墳群がみられる。このうちこれまでに正式調査された四ツ塚古墳群、長田古墳群、国分古墳群(同市国分地内ほか)、赤坂台古墳群などについて取り上げてみた。⁶

四ツ塚古墳群は、7基中26基が調査されている。直径16~6mほどの円墳の占墳群である。これらの築造時期は6世紀後半ころから開始され、8世紀初頭までの追葬が確認できる。出土品の中に巻、鏡といった明確な馬具は全く存在しない。ただ、毛彫りの施された蛇尾と考えられる遺物が1点発見されており、この手のものが金銅製毛彫り馬具の中に入られることがある。ただし、その時期は馬具の中でも新しい、7世紀後半以降に中心の馬具といえる。

長田古墳群は、35基の古墳が調査されている。直径25~50mほどの円墳の古墳群である。これらの築造時期は、6世紀中葉から7世紀中葉を中心とした時期で、8世紀初めころまでの追葬がみられる。このうち規模の大きな1号墳(直径25~26m)、F1号(直径不明)の2基に、板状立開素環鏡板付巻がそれぞれ1点ずつ副葬されていた。

国分古墳群は110基ほどの古墳が数えられているが、そのうち6基が調査されているに過ぎず、その全容は未だ不明である。直徑20m前後に収まると考えられる円墳の古墳群である。これらの築造時期は、7世紀初めころの時期が考えられている。蛇尾、筋り金具など、馬具と考えられる製品がこれら2基の古墳から確認されている。

横根・桜井古墳群(積石塚)は、145基ほどの古墳からなることが分かっているが、このうち調査されたは僅か2基に過ぎない。直徑13~4.6mほどの大きさで、5~7mのものが70%ほどを占める。これらの築造時期は、5世紀末まで遡る可能性が指摘されているが、今のところ6世紀第2四半世紀ころに築造が開始され、8世紀初めころまで追葬が行われたことが確認されている。この古墳群からの馬具の出土は、調査によっても、また過去の出土についても皆無といった状況である。

赤坂台古墳群は、約30基ほどで構成された、直徑24~10mの円墳からなる。このうち6基の古墳が調査されているが、大半のものは開墳などで消滅している。これらの築造時期は、6世紀末から7世紀代に造られ、8世紀初めころまでの追葬が確認されている。調査された6基のうちの2基から鉢具立開素環鏡板付巻がそれぞれ1点ずつ、また他の2基から馬具の筋り金具(内一基からは毛彫り馬具の杏葉)が出土しており、前述の古墳群よりは馬具の保有率が高いように思われる。

春日居古墳群(土盛墳と積石塚)は、既に述べたように

41基の古墳が数えられる。直徑35~7m、ほどの規模で、上盛墳に規模の大きなものが多い。築造時期は、6世紀後半以降に中心が置かれる古墳群である。そして馬具については、既に述べたように発掘調査・旧蔵品合わせて轄だけでも12例(表1)の発見が確認できるのである。これに比べ今みてきたように、他の古墳群で馬具の出土は多々伝わっているものの、現実的に確認できているものは少ない。古墳群形成の時期に差ほどの違いがみられないにもかかわらず、轄は赤坂台古墳群の3例(毛彫り馬具を含む)、長田古墳群の2例のみである。また、先に取り上げなかつたが68基ほどからなる千米寺・石古墳群も2例を数えるほどである。なお、春日居古墳群の西側に接し、勢力下になつたと想定される大藏經寺古墳群(13基)においては、鉄製橢円形鏡板付巻・素環鏡板付巻2の3例が確認されている⁷。

古墳群における馬具の存在は、その後の開発などにより発見されて運良く残る場合と、残らない場合といったように偶然性に左右されることが多いに考えられるところであるが、以上みてきたように春日居古墳群以外の大半は、調査によってもその存在が微々たることを確認できる。また、赤坂台古墳群についても、1古墳に複数個以上の馬具を副葬する例は今のところみられない。このことからすれば、春日居古墳群以外では、馬具の副葬が当初より極めて少なかったのであり、さらに空きつめれば当初より副葬数が限定されていたものと想定でき、そこに古墳群の性格が投影されていると捉えられるのである。

(2) 春日居古墳群における馬具の消長と性格

これまでのことから春日居古墳群に副葬された馬具の量は、他の古墳群に比べれば、極めて多いという事が一日瞭然にわかる。馬具が後期古墳に通有的に副葬されたものと捉えられる中で、運良く残った偶然性を考えなくとも当然濃淡は存在したであろうし、あるいは偶然を考えたとしても春日居古墳群は通有的な範囲をはるかに超えているものとみてよいだろう。むしろ他の古墳群に比べ、異常なほどまでの状況を呈しているともよい。これを前提にした出土状況からみれば、春日居古墳群においては少數の小規模な積石塚を除けば、馬具を持たない古墳はほとんどなかつたのではないかとさえ想定できる。

では、この状況は何に起因し、発現したのであろうか。端的に述べると、外的・内的の要因のいずれとしても、古墳群を形成した氏族の性格を具現化したものと捉えるのが最も妥当なところといえよう。何かといえば、馬具の究極の使いみちは騎馬・騎兵にあることから、その根底に騎馬の保有を物語ものにほかならない。そしてその保有状況は、騎馬として組織に組み込まれたこと、ひいては騎馬として中央、地方に仕えた結果とみることができる。さらにその多寡は、組織の性格・強弱の状況を明示しているものと捉えられ、そこに春日居古墳群が一大勢力であったことが先ず想定できる。

次に、春日居古墳群における馬具の副葬の具体的漫透に

ついて触れてみたい。まず寺の前古墳、狐塚古墳は、保雲寺支群の中で日と昇の先に位置し、平林2号墳は寺の前古墳などより多少離れた位置であるが、同一の保雲寺支群中に造られている。この保雲寺支群では、寺の前古墳、狐塚古墳において馬具の時期もやや不安定なところもあるが、古墳の発掘とほぼ同時(初幕)に馬具が副葬されたと想定した。そして両古墳には、その後も馬具の副葬が引き続き行われたことを確認できる。このことは、代々馬具を使用する性格、すなはち騎馬を保有していた家族であったことを想定できる。

一方、同一支群であるが、平林2号墳は、古墳築造時期より少し時間をおいて馬具の副葬されたことを想定でき、その後も寺の前古墳などと同様に引き続いた馬具の副葬が確認できる。さらに東方でやや遠方の天神塚支群中にある天神のこし古墳などにおいても、古墳築造時期より少し時間をわいて馬具の副葬されたことが捉えられる。この状況の中には、後に副葬品が漏出と考えられないこともないが、単純に考えると、ある時点で騎馬として組織に組み込まれたことを現すものと捉えることも可能であろう。その後については、寺の前古墳などと同様な経過をたどったものと考えられるのである。

一度、別な視点で、特に春日居古墳群の馬具の副葬された時期にしぼって、そこに何が捉えられるのか考えてみたい。既に述べたように春日居古墳群には、6世紀第4四半世紀前後から馬具副葬されるようになったと捉えているのであるが³⁰。表1からはその中にあって、盛んしたのはむしろ7世紀代に入つてからのことは明らかなところとなる。しかも、この7世紀代における変化は、春日居古墳群において幾つかの支群を横断するような横一線での変化であったと捉えられ、そこに大きな変換点を求めることができるのではないだろうか。そしてこの一連の大規模な変化は、家族から氏族(共同体)全体が騎馬・騎兵の組織の中に組み込まれ、あるいは騎馬・騎兵の出仕などの支援体制が整った状態を物語るとしてよいのではないだろうか。さらに馬具保有数・時期からすれば、県内屈指の軍事氏族(共同体)へと変貌をとげた、新興勢力の台頭した姿をそこに捉えられるのではないだろうか。

5 春日居古墳群の歴史的背景

変化の捉えられた7世紀といえば、甲斐国にかかる興味深い内容が「日本書紀」中にみられる。時期はややさがあり7世紀後半のこととなるが、壬申の乱に関係する記事である。それは、天武天皇元年(672)に勃発した壬申の乱に甲斐の国から加わった「甲斐の勇者」という、わずかひと言の記述である。磯貝正義氏によれば、大海人皇子は、東国の武力を味方にした勝利で亂を鎮結したが、「伊勢から使者を東海道・東山道につかわして軍兵を徵集させ」、その微集に応じた数万の軍兵が皇子の麾下に集まり、応援軍として美濃から大和に向かう中に、「甲斐の勇者」がみられるのである³¹。この美濃といった地名は、地理的位置

から考えれば、既に中央に出仕していた人物が再集結した場所ではなく、皇子の微集に応じて新たに甲斐団を含めた東山道・東海道の国々などから参集した騎兵などが集結した場所と捉えられる。この可能性は極めて高いと考えられ、そして兵士の数からすれば「甲斐の勇者」だけが参戦したのではなく、この他にも多数の甲斐国などの騎兵が戦列に加わったことを想定するのは、さほど難しいことではあるまい。

これを可能にした背景は、まず県内における馬具の出土数の多いことからくる豊富な騎馬・騎兵の存在であったであろう。ちなみに長野・静岡・群馬県における馬具出土数は、いずれも本県を凌いでいる。しかし、国の領域面積に対する馬具の出土比率からみる限り、過大にいえば長野県に拮抗する量になり、静岡・群馬県を凌ぐのではないかと思われるほどの量になるといえるのである。このような中に、「甲斐の勇者」などが存在したのである。

「甲斐の勇者」そのものの、甲斐団のどの地域出身の人物なのか特定することは他に譲ることとして、既に述べたように甲斐団からは、「甲斐の勇者」のほかにも多数の騎馬・騎兵が微集されたことはまず間違いないといえよう。そしてその多数の騎馬・騎兵の出身地については、県内における馬具の分布状況が、その一端を示しているとともにまた確かにいえよう。既に述べてきた中からは、春日居町地域(春日居古墳群)、巣生町地域(赤坂台古墳群)が先ず想定され、このほか馬具の出土が比較的多く付く地域として、県内第4の勢力となる八代町地域(八代古墳群・竹居古墳群)があげられる。このうちの八代古墳群は、県内第5位の石室規模を誇る地蔵塚古墳を中心に構成された古墳群で、その東側の地域にはさらに竹居古墳群が続くようにならざるを得ない。これらを統合したのが八代勢力と考えられるが、この八代地域は、優品の毛彫り馬具を副葬していた御崎古墳(竹居古墳群)・透彫心葉形鏡板付響(八代古墳群)などを副葬していた古柳塚古墳・馬鈴を副葬した莊塚古墳³²などがみられ、まさに周囲の古墳からの馬具の出土を比較的多く伝えていた地域である。また、F字形鏡板付響の出土を伝える古い時期から騎馬に馴染みを持っていた地域である。

この八代地域を加えた3地域が、軍事的中心的役割を担っていたものとみて間違いないであろう。その中でも6世紀後半以降は、先ず春日居古墳群がその中心で、かつ筆頭にあったとみなければならない。これは、当時の馬具保有状況からすれば当然の帰結といえるもので、春日居古墳群を形成した氏族が県内において多数(集団)で印參戦できる体制を持っていた、第一の集団と考えられるところである。これに伴い支配地域も広域であり、あるいは拡大したことと窺わせ³³、隣接地の横根・桜井古墳群の前面に構築された川田丸塚跡で生産された瓦の搬入を可能にさせたことを含め、春日居古墳群の眼下である寺木の地に寺本庵寺を建立に向かわせた原動力となったものと考えられる。さらに寺本庵寺という大伽藍の建造物を作り上げた力がそ

の点に求められるのであって、その力は絶大であったとみななければならぬ。当然、寺院建立の背景には、寺の前古墳、孤塚古墳にみられる仏教用具である銅鏡の存在を忘れてはならない。春日居古墳群の氏族が、寺院建立以前から先進的文化を取り入れ、精神的柱としていたことがその前提にあってのことと考えられるのである。さらに、このことは畿内の氏族などとの結びつきにも深いものがあったことを合わせて示しており、その存在の知名度も比較的高かったのではないかと考えられるのである。また、寺の前3号墳より出土した金銅製單鳳環頭大刀¹⁰の存在は、そこに指揮官としての姿がとらえられ、さらに蘇我氏系の氏族、あるいは蘇我氏に間わりのある大伴氏が想定できるのではないかとみている。横根・桜井古墳群の存在する地域には、巴山(トモエヤマ)、桜井あるいは山崎といった大伴氏にかかるかわると考えられる地名が認められ、「記・紀」にみられる酒折宮の伝説は、かかる状況があつてこそ過去の事象が取り込まれたとすることも一考の余地があるのではないだろうか。

検討の筋をもとにまとめるが、その後、奈良時代になると、甲斐国に都郷制が執られるようになる。その際の都域決定にあたっては、地域勢力の存在は無視できなかつたものがあつるかと考えられる。この都域を決める直前の時期には、盆地の東側の御坂町地域にある姥塚古墳を盟主とする御坂勢力と、盆地の西側の甲府市地域にある加牟那塚古墳を盟主とする甲府勢力の二大勢力の存在が指摘できるのであり¹¹、都域決定に大きな影響をもつたことは、その巨大石室をもち、かつ周辺に多くの古墳を從えていたことからすれば当然なことであろう。これに対して春日居古墳群は、位置としてこの時期の二大勢力の間に所在しているが、春日居古墳群の石室規模は、姥塚古墳、加牟那塚古墳

といった巨大石室とまではいかない(表2)。それでも、両古墳に次ぐような規模の石室をもった古墳が多数みられる面からも、新たな勢力の誕生、存在は少なくとも確認できる。しかし、石室規模を厳密にみれば両者の次の大きさといわれながら、実態としては数段階離れたような規模の小さくなつた石室であることを拭いすることはできない。

そこで石室規模から見る限り、それほど有力視できない規模であるにもかかわらず、それでも御坂勢力と甲府勢力との間に割り込んで劣勢を跳ね除け、郡(山梨郡)を設定、あるいは可能にさせたとみられるのは何故であろうか。それは他でもない。何處も述べたように他の地城を圧倒するだけの馬具の保有=豊富な騎馬・騎兵の存在があつたからこそ可能になつたものといえるのである。結論として、先と同じとなるが極めて強力な軍事氏族(共同体)となつた故の結果であり、このことが後の郡の分割にも影響力を行使できたものと捉えられるのである。

6 鋸具立聞素環鏡板付巻の編年素描

鋸具立聞素環鏡板付巻については、20年ほど前に検討したことがある¹²。だが内容的には満足のいくものではなく、後日の再検討を考えていたところである。その後、何人かの研究者によって検討が加えられてきており、また、筆者自身も平成12年に鋸具立聞素環鏡板付巻の初現形態を中心に、新しい時期についても検討を加えたところである¹³。今回、春日居町鎮田無名塚の資料を加えるなかで、鋸具立聞素環鏡板付巻にも何種類かの形態がみられることがから、平成12年度の結果を中心として素描であるが一文をまとめてみたい。

(1) 形態と時期

先ず、今回取り上げた形態であるが、従来から分類され

表2 後期古墳の石室規模(現存長)

大月	三珠	八代	御坂	一宮	勝沼	山梨	春日居	甲府	鷹島	双葉	電王	白根	甲西	村市町	古墳名
金子の山神	オノ エン	奥 見 名 も り	風 無 く う 地 石	無 名 名	桂 屋 屋	千 手 寺 神 社	天 神 祠	天 神 祠	天 神 祠	万 代 寺	大 平 二 二 号	大 平 二 二 号	大 平 二 二 号	大 平 二 二 号	おお む か わ 村 六 塚
山神	坂塚	坂	坂 坂 坂	坂 坂 坂	坂 坂 坂	坂 坂 坂	坂 坂 坂	坂 坂 坂	坂 坂 坂	坂 坂 坂	坂 坂 坂	坂 坂 坂	坂 坂 坂	坂 坂 坂	坂 坂 坂
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○○	○○	○○	○○○○○○	○○○○○○	○○○○○○	○○○○○○	○○○○○○	○○○○○○	○○○○○○	○○○○○○	○○○○○○	○○○○○○	○○○○○○	○○○○○○	○○○○○○
○○	○○	○○	○○○○○○	○○○○○○	○○○○○○	○○○○○○	○○○○○○	○○○○○○	○○○○○○	○○○○○○	○○○○○○	○○○○○○	○○○○○○	○○○○○○	○○○○○○
都留郡	八代郡	山型(東)郡	山型(西)郡	巨麻郡											の和 郡名 名抄

ている「呂」の字形態(以下「呂」形態)、「8」字形態(以下「8」形態)、それに角形形態である。このうち「呂」形態においては、さらに刺金の形態などから3形態に細分できることから、合わせて5形態ということになる。なお、鉢具立開素環鏡板付轡に分類できるものとして、このほか鉢具部を鏡板の環にリング状に取り付けた形態など幾つかの形態がみられるが、いずれも類例が少ないと今回は除外した。

次に、分類した形態の概要について触ると、以下のとおりである。「呂」形態は、平成12年度の結果を刺金の取り付け形態をもとに、新たな分類の基準とした。刺金の刺金軸を頭部にはめこんで取り付けた形態を「呂」A形態、刺金を頭部に穿った孔に絡ませて取り付けた形態を「呂」B形態とし、これらはさらに頭部にあけられた孔の形態から、二つに分けた。小孔を穿って絡ませる形態のものを「呂」B-1形態、孔が長方形ないし正方形の孔に絡ませる形態を「呂」B-2形態とする。「8」形態は、鏡板の環体から頭部を形成せずに鉢具部の環体が取り付けられる形態である。角形形態は、板状立開の環体に小孔を穿って刺金を絡めて取り付けた形態である。この中でI期以降は、「呂」B形態が中心となる。

なお、時期については、およそ5期に分け、I期を6世紀第3四半世紀、II期を6世紀第4四半世紀、III期を7世紀第1四半世紀、IV期を7世紀第2四半世紀、V期を7世紀第3~4四半世紀の期間を設定した。この中でIV期とV期との境は、多少流動的である。

(2) 形態の変遷概要

ア 「呂」A形態

I期 鉢具立開素環鏡板付轡の初現として捉えられる形態である。刺金の刺金軸を頭部にはめこんで取り付けた形態で、この形態が以下に述べる鉢具立開素環鏡板付轡の基になる形といえる。さらに初現期の形態には、大きな特徴がある。それは鉢具に至る頭部が長く(2.6~1.4mm)、かつ頭部両側が軌道のように盛り上がり、一見断面方形状の形態をみせるもので、これが本期の形態といえるものである。また、刺金の刺金軸は、軌道から軌道までの間に差し渡すようにはめ込まれている。現在まで昭和1号墳(編年表1、和歌山県)、神宮寺第3号墳(同2、京都府)、中甲府里塙某古墳(同3、山梨県)などがある。

II期 現在まで確認例はないが、「呂」B-2形態から、頭部が短くなり、頭部両側にみられた軌道状の盛り上がりがない形態を想定できる。なお、頭部が短くなるといつても、鉢具部は腰高で推移したものと考えている。

III期 天神のこじ古墳(同4、山梨県)が唯一の例である。これといって明確な特徴はみられないが、頭部はさらに短くなり8mm前後を中心とするものと思われる。まだ明確な「呂」形態が捉えられるものといえる。ただし、鉢具立開部の突出度は、相対的であるが低くなっているようである。

IV期 春日居鎮日某墳(同5)が唯一の例である。III期

同様明確な特徴はみられない。頭部が5mm前後を中心とするものと考えられるが、中には頭部を明確に捉えられない形態もみられるようになる。突出度はさらに低くなる傾向である。

この時期以降の形態は、現在確認されていない。このことは、「呂」A形態の消滅を意味するものかも知れないが、確定的ではない。

イ 「呂」B-1形態

本形態は、A形態から派生したものと捉え、刺金を頭部に穿った小孔に絡めて取り付けた形態として独立させた。本期はII期からの出現となるが、これはA形態I期に分類していたものを、その想定時間が6世紀第4四半世紀初めころとされていたため、一段階後の時期としたことによるものである。従って、I期の段階はない。

II期 B-1形態の祖形となる時期である。頭部は「呂」A形態I期と差ほど変わらない1~1.5mm前後の長いものである。違いは、「呂」A形態I期にみられた頭部両側の軌道がみられず、板状態の頭部となるのが本形態の特徴といえる。なお、この長めの頭部傾向は次のⅢ期までとされるようである。鉢具立開の突出度は大きく、腰高である。ジンド古墳(同6、京都府)、一宮石麻某墳(同7、山梨県)などである。

III期 鉢具立開部の突出度は、相対的であるが低くなり、この中で頭部がさらに短くなり8mm前後を中心とする段階である。しかし、まだ明確な「呂」形態が捉えられる段階といえる。古内殿4号墳(同8、福岡県)、馬ノ口4号墳(同9、千葉県)、春日居梅沢某墳(同10、山梨県)などがある。

IV期 明確な特徴はないが、鉢具立開部の突出度は低くなり、この中で頭部がさらに短く5mm前後を中心とする段階である。このため「呂」形態が明確に捉えられなくなる段階といえる。聖山6号墳(同11、栃木県)、二之宮253号仕居跡(同12、山梨県)などがある。このうち聖山6号墳については、出土遺物から2时期的存在が認められるが、突出度はやや高いものの頭部が短いことから、時期の下落した本期に入れたことである。

V期 頭部がほとんどないような状況で、「呂」形態と判断するのが難しいものとなる。この時期前後かと考えられるが、鏡板の環体形状が横に長い楕円形となる。類例は少なく、中里大久保95号墳(静岡県)¹⁰、劍崎長瀬西35号墳(同13、群馬県)¹¹があげられる。

ウ 「呂」B-2形態

本形態は、B-1形態の瓶流で、刺金をからめて取り付ける形態であるが、特にからめる先の小孔が、長方形ないし方形穴に穿たれる形態である。本形態の出現時期は、それほど明確ではないがII期からと考えている。しかし、II期の中でも出土遺物からみると、同時期のB-1形態のジンド古墳より若干後出の時期ではないかと考えている。

II期 B-2形態の祖形となる時期である。形態はB-1形態同様に、頭部の長い形態(1~1.5mm前後)であることはもちろんであるが、最大の特徴は刺金の取り付け孔

が長方形ないし方形に大きく穿たれることで、これらが本期の形態といえるものである。

なお、この時期の例とした本郷大塚古墳（同14、長野県）、佐野II-7-61号土壙（同15、栃木県）の唇の引手の造りに捻りのみられることから、このような形態が過時にみられるもう少し下った時期におかれるものなのか一株の不安はあるが、鏡板の形態からすればやはり本時期がよいのではないかと考えてみた。

III期 資料はないが、B-1形態のⅢ期の形態に似る形態かと考えられる。長方形ないし方形の孔は、前後の資料からやや縫めの形態になるものと考えられる。頭部の長めの傾向は、この時期までたどるものと考えている。

IV期 鏡具などに明確な特徴はないが、鏡具立馬部の突出度は低くなり、この中で頭部はさらに短く、5mm前後を中心とする段階である。このため刺金をからめる孔は、横長の扁平な孔が穿たれることとなり、以後同様な形態をとるものと考えられる。また、「凸」形態も明確に捉えられなくなる段階といえる。定西塚古墳（同16、岡山県）⁶⁰、本郷大塚古墳（同17、長野県）などがある。

V期 B-1形態のV期同様に頭部が短く、「凸」形態と判断するのが難しいものに他に、この時期前後に新たな形態がみられるようになる。先ず、鏡具部形態が継続するものの鏡板形態は、この時期前後に横に長い楕円形態をとるようになる。また、新たな形態の環体形状もB-1形態のV期同様に横に長い楕円形態となるほか、「凸」A形態のI期の形態に先祖還りでもしたかのように、頭部が伸び長い形態となる。本郷大塚古墳（同18）、奈良13号墳（同19、群馬県）⁶¹、頭部の造りが違うが大室198号墳（同20、長野県）⁶²などがある。

エ 「8」字形態

「凸」B-1・2形態などから派生した形態と考えられる。この形態の立間は、環体から頭部を造らず直に取り付けられるのを基本とし、鏡板の環体と合わせて「8」字状の形態を呈するものである。このため鏡具部の環の間の空間（窓）は、扇形ないし楕円形となる。この形態の出現時期は、IV期ころかと考えている。このため「凸」A・B-1・B-2形態の同時期の形態との見分けが難しいものもみられる。

IV期 一宮石磨某墳（同21、山梨県）、狐塚古墳（同22、同）、寺の前古墳（同23、同）などがある。

V期 参考にあげた白砂ヶ浜C2号墳（同24、静岡県）⁶³は、刺金の取り付けの有無が明確でないが、「8」字形態が続くとすれば、このような形態が想定されるのではないだろうか。そして、他の形式同様に、この時期前後に鏡板が横に長い楕円形態になるものと考えられる。

オ 角形形態

立間が板状の角形の形態で、板状立間素環鏡板付骨の立聞き形態に、刺金をからめて取り付けた偶然の産物かと考えたが、立間はやや縦長であるが同様な形態がいくつかみられる事から形式として独立させた。刺金形態からは、

基本的には「凸」B-1・2形態、「8」形態に分類されるもので、その出現をIV期からとした。

IV期 立間は、まさに板状立間素環鏡板付骨の立間に、刺金をからめて取り付けた形態といえるもので、立間の幅は環体に近い大きさである。和田8号墳（同25、滋賀県）⁶⁴がある。

V期 立間は幅は狭いが、縦方向は前段階のIV期とは逆にやや縦長となる形態である。そして鏡板の環体形状は、この時期前後に横に長い楕円形態となる。大塚古墳（同26、長野県）、越塚古墳（同27、同）⁶⁵があげられる。

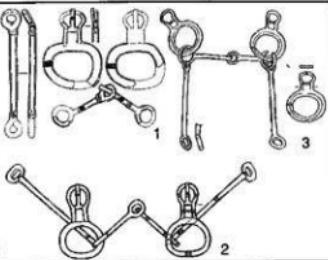
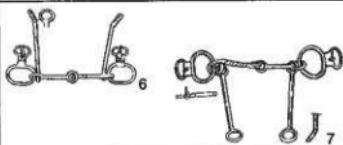
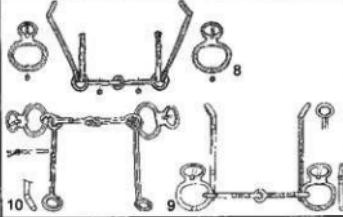
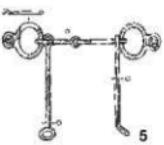
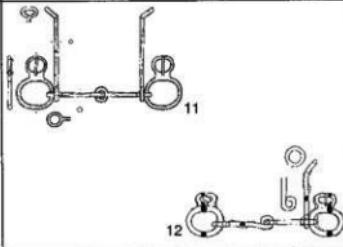
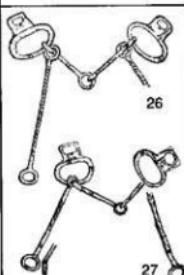
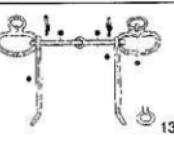
(3) 鏡板の環体の形態変化

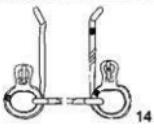
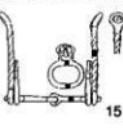
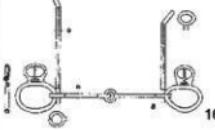
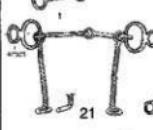
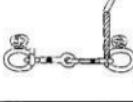
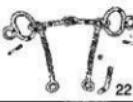
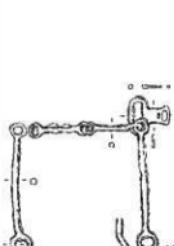
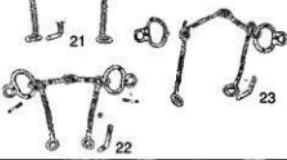
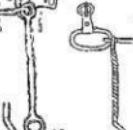
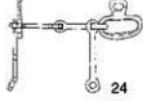
次に、鏡板の環体の形態変化について触れておきたい。この点は既に取り上げられているところであるが、再度確認しておくこととする。それは、V期前になると、鏡板の環体の形態に変化がみられることがある。この変化は、本形態ばかりでなく、板状立間素環鏡板付骨にも関係するような横一線の変化のようにみられるものといえる。ただし、その度合いには、鏡具立間素環鏡板付骨に色濃く、板状立間素環鏡板付骨にはやや薄いといった傾向がとらえられるようである。そしてその形態は、鏡板が上下に押しつぶされ横に長い楕円形態となることである。この形態は、一旦瞭然にその変化を捉えられるほどのものといえる。

それでは、このような鏡板の形態変化は何によってもたらされたものであろうか。直ちに答えられないが、この時期にみられる馬具にその基があるようにも思われる。それは、特に東国に色濃い分布をみせる長方形透鏡板付骨、すなはち毛彫り馬具である。この傳の鏡板は、基本的に長方形の横長をとるもので、その中でも7世紀前半で中頃に造られたものは、東一本柳古墳（長野県）⁶⁶、宮中野99-1号墳（茨城県）⁶⁷のように、鉄製で角が丸をとる横長の楕円形態をみせる例がある。反面、他の形式の傳の鏡板には、横長の形態のものはほとんどないことから、やはり毛彫り馬具の形態が影響を与えた可能性が高いものといえる。

鏡板の変化が、この毛彫り馬具の影響のもとに変化したものとすれば、それでは立間の長い形態は何からの影響であろうか。長方形透鏡板付骨の立間は横長で明らかに違うことから、他に立間の長い形態を探してみると、類似形態としてフ字形（S字形）棒状鏡板付骨がある。コウモリ塚古墳（長野県）⁶⁸、平兵衛奥古墳（静岡県）⁶⁹などである。この傳の立間は頭部が長く突出した板状の形態で、上部に鏡具部を付けるもので、極めて類似する形態といえる。また、この手で鏡板に鉤を取り付ける形態の立間も同様に突出するものがほとんどである。そしてこれらの時期は、「凸」B-2形態のV期と同時期の7世紀前半から中頃とされることから、これらをしたるもので、一見先祖返りのような現象をみせたものと考えられる。

いずれにしても、二つの馬具の形態から、その一部分を取り入れられたと考えるのが最も適切と思われる。

	角形形態	「呂」A形態	「呂」B-1形態
I 期			
II 期			
III 期			
IV 期			
V 期			

「呂」B-2形態	「8」形態	I 期
		II 期
		
		III 期
		IV 期
		
		
		V 期
	※参考	

(4) 変遷の西湖

以上、鉄具立開素環鏡板付帯について5形態に分類したうえで、それぞれの変遷について5期にわたって検討を試みたところである。これは、立間の頸部長の長短に着目して編年を組み立てたものであるが、既に述べたように立間の頸部の長短と時期との相関関係が微密に捉えられたものではない。しかし、その中にあっても各形態の初現期の形態と時期との間には、ある程度の形態の変化の存在を認めてよいのではないかといった状況にある。そしてそこには、若干の時間差(「呂」A形態、「呂」B—1・2形態)、或いは比較的大きな時間差(「8」形態、角形形態)などが認められることから、これらについては編年として耐えうるものと考えているところである。さらに、各形態を横断するように、7世紀第2四半世紀からどちらかといえば第3四半世紀に傾斜するころの間に、横一線で鏡板の形態が押しつぶされたような長い楕円形をとるようになることも確認できることから、この形態変化も編年として成立するものと考えている。

今後の編年について、多少克服しなければならない点も含んでいるが、その詳細については長々と述べたとおりである。そしてこれらをさらに大きくみてみると、次の三つの区間を想定できるものと考えている。それはI・II期(6世紀第3～4四半世紀)、III・IV期(7世紀第1～2四半世紀)、V期(7世紀第3四半世紀前後以降)の時期で以下のとおりある。

I・II期は、「呂」A形態と同B—1形態であるが、これらの時期の立間は、頸部形態に多少の形態変遷をみせるものの、大きさは頸部がいずれも長い形態をとる中で推移する時期と捉えることができるようである。

III・IV期は、形態的には細分した全形態が確認される時期といえるが、これといった特徴を抽出できない。しかし、あえて特徴をあげるとすれば、前後の時期にはさまれた期間にあり、頸部が短い中に收敛しない推移するものと捉えられる点であろう。

V期では、IV期からの維続が確実と確認されていない形態もみられるが、これらについては恐らく確認されている他の形態と類似のものがそれぞれ確認できるのではないかと考えているところである。この時期は、特に鏡板に明瞭な特徴が捉えられるものと考えていているが、縦り返し述べれば鏡板の形態が横長あるいは扁平の形態をみせるという点にある。このほか頸部についても変化をみせることがある。それは頸部の長さにある。前代からの系譜を引く短いか、あるいはほとんど無いような形態のもののはかに、新たに先祖返りでもしたかの様な形態みせる頸部の長いものがみられるようになる。これは長さのみからでは、I・II期に匹敵するといえるものであるが、この変化は、既に述べた経過の中で取り入れられたものといえよう。

4 おわりに

春日店町領地内の某墳から過去に採取され、中村先生

により保管されていた物について検討を加えてきた。先ずその造られた年代・性格の想定、さらに本例を副葬した古墳の含まれる春日店古墳群の組織・性格についても、不十分な内容であるが言及してみた。また、鉄具立開素環鏡板付帯について形態変遷の状況の素描を試みた。内容的には、明快なる解釈のできない点や克服する点が多々みられるが、現状での分析としてまとめてみた。

本稿を草するにあたり、中村直人先生ほか多くの方々に、ご教授、ご支援を頂いた。紙上をかりて厚くお礼申し上げたい。

註・参考文献

- (1) 抽稿 2000 「鉄具立開素環鏡板付帯の初現期の様相」『考古学論究』第7号 立正大学考古学会
- (2) 野沢昌康他 1976 「天神のこし古墳」春日店町教育委員会
- (3) 山梨県教育委員会 2000 「平林2号墳」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第175集
- (4) 山梨県 1998 「山梨県史」資料編1 原始・古代他
- (5) 抽稿 1986 「大藏經寺山無名墳の提起する問題」『山梨考古学論集』1 野沢昌康先生頌寿記念論集
- (6) 馬具の時期に明確でない点があることから、6世紀第4四半世紀を初葬としたが、他の古墳と同様に7世紀になって馬具の副葬がされたとすれば、春日店古墳群における馬具副葬が初葬より一定の時間をおいて、しかも横一線に副葬されたことになる。このことは、春日店古墳群を形成する氏族(共同体)全体が大きな外力などによって、一方に騎馬・騎兵の組織の中に組み込まれたものと捉えることができるのではないだろうか。
- (7) 碓貝正義・鶴田文弘 1973 「山梨県の歴史」山川出版社
- (8) 註4に同じ
- (9) 馬具については、大藏經寺古墳群の副葬時期が春日店古墳群の時期より遡ることから、勢力下に入ったとしても、寺本寺の建立の直前ころのことと考えられる。大藏經寺古墳群ないし横根・桜井古墳群の前面にみられる川口瓦窯跡より瓦が安定して供給された事実をもって、勢力下に入ったのではないかと考えている。
- (10) 註4に同じ
- (11) 抽稿 1983 「甲斐の郡(伴)郷制」『研究紀要』1 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- (12) 抽稿 1985 「馬具」考古学ライブラリー34 ニュー・サイエンス社
- (13) 註(1)に同じ
- (14) 静岡県教育委員会 1975 「中里久保95号墳」
- (15) 専修大学文学部考古学研究室 2003 「劍崎長瀬西5・27・35号墳」

- (16) 岡山大学考古学研究室 1997 「定古墳発掘調査現地説明会資料」
- (17) 沼田市教育委員会 2001 「奈良古墳群」
- (18) 大塚初重・小林三郎。石川日出志 1993 「信濃大寺積石塚古墳の研究」Ⅱ
- (19) 静岡県教育委員会 1980 「原古墳群・白砂ヶ谷古墳群」国道1号藤枝バイパス(藤枝地区)埋蔵文化財調査報告書第3冊
- (20) 栄東町教育委員会 1998 「和田古墳群」
- (21) 長野県 1998 「長野縣史」考古資料編 主要遺跡(南信)
- (22) 土屋長久ほか 1975 「佐久市岩村田東一本柳古墳」「信濃佐久平古代氏族の性格とまつり」
- (23) 市毛 黒 1970 「宮中野古墳群調査報告書」
- (24) 許 20に同じ
- (25) 川江秀孝 1978 「静岡市半兵衛奥古墳とその遺物」「月刊文化財」
- 岡安光彦 1985 「環状鍍板付轡の規格と多変量解析」『日本古代文化研究』第2号
- 中村 浩 1981 「和泉陶邑窯の研究」柏書房
なお、拙稿「銛具立間素環鍍板付轡の初現期の様相」で取り上げた轡についての文献は、そちらを参照していただきことで割愛させてもらった。

墨書土器ネットワークの検討 —甲斐国巨麻郡の事例—

末木 健

はじめに

1 墨書土器の出土状況

2 墨書土器の内容

3 集落における特徴

4 墨書土器の年代とネットワーク

まとめ

はじめに

奈良・平安時代の土器には、焼で文字や記号・絵画の書かれたものがあり、この他に釘状の工具で文字や記号等も書かれている。これらは墨書土器とか刻青土器・線刻土器と呼ばれ、絵画のあるものは墨画・刻画土器などとも呼ばれることがある。これらを一括して取り扱うことに問題もあるが、ここではこれを総称して「墨書土器」と呼んでおく。

墨書土器は一般的な土器と区別されて取り扱われるものは少なく、人面土器など祭祀に使用されるものを除いて、豊穴住居などから出土することが多いので、日常生活に使用されていると思われる。日常生活の中で様々な必要性に伴って文字や記号が書かれたものと理解することができる。

この墨書土器の意味についての研究は、国立歴史民俗博物館長・山梨県立博物館館長の平川南氏をはじめ、多くの研究者によって、様々な角度から研究されているが、総体的には文章や意味の分かる文字列が少なく、1~2文字のものが多いために、個々にその役割を特定することが困難となっている。しかも、1文字が記号化されている例や2文字以上が合成されていることもうかがえるので、ますますその用途は明確さを欠いているが、所有者や集団の帰属を表す例や用途、数、単位を示すものや、吉祥句の存在から祭祀・呪術に使用されるものなどが、一般的には考えられている。^{〔註〕}

山梨県内では山梨県史資料編3(山梨県 1999)でも集成されているように、近年の墨書土器の増加により、凡そ5000点の資料を得ることができるようになった^{〔註〕}。この中から、古代氏族と関係が想定される墨書をピックアップして、古代氏族と関連づけて論じたのが、「甲斐国古代氏族と墨書土器」(末木健 2005)である。そこでは、山梨郡と巨麻郡の古代氏族の強い繋りがあり想定されることとなり、しかも蔚崎市宮ノ前遺跡や北杜市明野町梅之木遺跡、同武川町宮間田遺跡などが地域的な中心である可能性を見ることができたが、未だ詳細な実態を把握する作業を経たものではなかった。

本論では古代甲斐国の巨麻郡の西北部(現在の山梨県西

北部に位置する、甲斐市・蔚崎市・北杜市・南アルプス市域)における奈良・平安時代の集落出土の墨書土器を観察することによって、土師器や須恵器・灰陶器などの上器類の形式・形態分類だけでは捉えられない、集落間のネットワークを浮かび上がらせ、更には、地域の歴史を紐解く手立てを得られるのではないかと考えた。

そこで、まず最初にこの地域の墨書土器の出土様相を述べ、同一文字を多数所有する集落と、多種類の墨書土器を所有する集落の比較を行い、次に、共通する文字等の分布から、集落間のネットワークを想定することができると言えられる。最後に、こうしたネットワークがどのような背景で成立したのか、近年では平野修氏の見解(平野修 2004)もあり、屋上屋を重ねる感もあるが、郡衙(郡家)・郷の關係や御牧・莊園などとの関係についても述べて、まとめとしたい。

なお、本論の概要版は「甲斐」第111号(2006・8 山梨郷土研究会)に「甲斐巨麻郡墨書土器分布の意味」と題して発表したものであるが、論の基礎となる図面類の提示ができなかったので、今回詳細なデーターと共に提示し、大方のご批判をいただきたいと考えている。

1 墨書土器の出土状況(第1表)

① 出土点数の比較

本論で対象とするのは山梨県内の北杜市79遺跡、蔚崎市23遺跡、甲斐市5遺跡、南アルプス市19遺跡、南巨摩郡増穂町1遺跡の合計127遺跡(第1表)で、これらから出土した墨書土器を調べた結果、墨書土器出土遺跡は110遺跡と絞られた。

このうち最大数の墨書土器が出土した遺跡は蔚崎市宮ノ前遺跡で462点である。しかしこの遺跡は隣接する宮ノ前第2遺跡15点、同第3遺跡84点、同第5遺跡17点を加えると総数578点となる。おそらく県内最大の出土数ではないかと考えられる。次は北杜市大京町寺所遺跡で436点、同市明野町梅之木遺跡407点である。この他は北杜市高根町湯瀬遺跡106点、同市武川町宮間田遺跡101

点、南アルプス市百々遺跡 87 点、同市錦物師屋遺跡 81 点、北杜市長坂町能角西遺跡 73 点、須毛町上ノ原遺跡 71 点、同市長坂町柳坪遺跡 61 点、同市大泉町城下遺跡 57 点、同市長坂町石原田北遺跡 47 点、同市白州町古御所東遺跡 46 点、同市明野町下大内遺跡 39 点、同市高根町東久保遺跡 36 点、同市大泉町原田遺跡 37 点、甲斐市松ノ尾遺跡 35 点、南アルプス市川上道下遺跡 35 点、北杜市高根町青木北遺跡 34 点、同市長坂町細屋遺跡 33 点、同市大泉町原田遺跡 30 点、南アルプス市木本遺跡 29 点、北杜市高根町社口遺跡 29 点、同市白州町旧皆原小遺跡 29 点、同市長坂町柳坪南遺跡 23 点、甲斐市松ノ尾 2 遺跡 22 点で、以下、10 点台は 10 遺跡、一桁台は 73 遺跡である。これを整理すると、次の第 2 表になる。

第 2 表 墓書土器出土数による遺跡数

点数	4	1	8	7	6	5	4	3	2	1	合計
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
遺跡数	3	2	3	2	1	1	2	8	5	10	73
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

②分布傾向（第 1 図）

墨書土器の出土量の違いが、どのように分布しているのかを示したのが第 1 図である。400 点以上の 3ヶ所の遺跡分布には特徴があり、宮ノ前遺跡は蘿井山麓の中央部、明野町梅之木遺跡は茅ヶ岳南麓の北側に位置する。また、100 点以上の高根町湯沢遺跡は茅ヶ岳南麓の南端部に位置し、武川村宮間田遺跡は釜無川右岸で甲斐駒ヶ岳東麓の入口部に位置する。また、80 点以上を出した百々遺跡と錦物師屋遺跡は南アルプス市で御動使川以南に分布する。

このように、墨書土器の数量が多い遺跡は、地域が分散していることが特徴として観察される。

③1 軒当たりの出土点数（第 3 表）

しかし、上記の数字を単純に墨書土器保有の多寡として比較する訳にはいかない。というのは調査面積や出土土遺構の差があるからで、特に大規模な集落の調査では比較的墨書土器が多い傾向があるのは当然であろう。そこで、住居跡などの遺構数で除して、その保有数の比較を行った。この結果、1 軒の住居跡から出土した墨書土器の平均値の高い遺跡と低い遺跡の差があることが明らかとなった。

住居 1 軒当たりの平均出土数がもっとも高いのは、宮ノ前第 3 遺跡 14 点、龍角西遺跡 10.4 点、寺所遺跡の 9.28 点で、これに続くのは原田遺跡 6 点、金の尾遺跡 6 点、駒井遺跡 5 点、梅之木遺跡 4.96 点、旧皆原小遺跡 4.83 点、湯沢遺跡 3.93 点、石上り遺跡 3.5 点、紺屋遺跡 3.3 点、下大内遺跡 3.25 点、東原遺跡 3.08 点、青木北遺跡 2.83 点、川上道下遺跡 2.5 点、社口遺跡 2.42 点、石原田北遺跡 2.35 点、

松ノ尾遺跡 2.33 点、御岳田遺跡 2.33 点、半縄田遺跡 2.29 点、城下遺跡 2.19 点、小和田館跡遺跡 2.11 点、甲ヶ原遺跡 2 点、蘿井遺跡 2 点である。なお住居 1 軒当たり 1 点以上の遺跡は 26 遺跡、1 点以下は 58 遺跡である。ちなみに、最大の点数を出土している蘿井市宮ノ前遺跡は、住居数が 417 軒であることから、1 軒当たりの平均出土数は 1.11 点である。

第 3 表 1 軒当たりの墨書土器点数

平均 点 数 点 数	9 点 以上	6 点	5 点	4 点	3 点	2 点	1 点	1 点 以下	合 計
遺跡数	3	2	1	2	5	1	1	2	11

第 3 表からも分かるように、9 制程の遺跡が 1 軒当たり 2 点以下の墨書土器の出土数で、保有数の多い 4 点以上は僅か 8 遺跡しかないことから、4 点以上は飛び抜けた数字である。ここでも宮ノ前遺跡や寺所遺跡、梅ノ木遺跡、龍角西遺跡等は遺跡全体の点数の多さとも合わせて注目すべき遺跡である。

④墨書の種類（第 4 表）

墨書には先に述べたように文字や記号等がある。これらは遺跡によって種類の多寡があり、1 遺跡に同一の文字や記号の点数が多い場合や、1 種類の点数が少なく種類が多い遺跡がある。遺跡毎の種類数を調べた結果は、次のとおりである。

種類が最も多い順から紹介すると、宮ノ前遺跡 66 種、梅ノ木遺跡 47 種、百々 38 種、宮間田遺跡 31 種、柳坪遺跡 20 種、東久保遺跡 18 種、鈎物師屋遺跡 18 種、寺所遺跡 17 種、古御所東遺跡 16 種、上ノ原遺跡 13 種、社口遺跡 12 種、松ノ尾遺跡 12 種、松ノ尾 2 遺跡 12 種、城下遺跡 11 種、紺屋遺跡 11 種、湯沢遺跡 11 種、宮ノ前第 3 遺跡 11 種、豆生田第 3 遺跡 10 種、龍角西 10 種であり、9 ~ 6 種の遺跡は 14 遺跡、1 ~ 5 種の遺跡は 77 遺跡である。

第 4 表 種類数別の遺跡数

種類	40 以 上	30 以 上	20 以 上	10 以 上	6 以 上	1 以 上	合 計
遺跡数	2	2	1	14	14	77	110

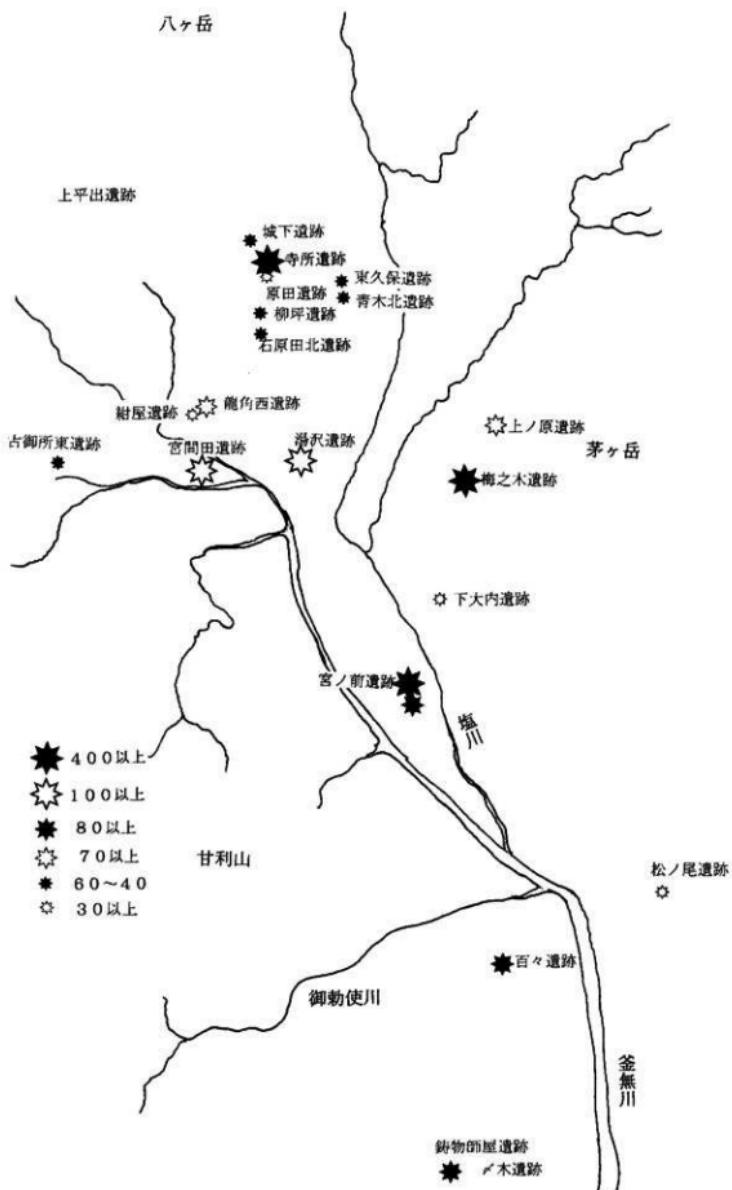
第 4 表のように 20 種類以上の墨書土器を持つ遺跡は極めて少なく、大部分が 10 種類以下である。しかし、1 遺跡の墨書土器数と種類数が比例する訳ではなく、遺跡によってバラツキが認められるので、1 種類の墨書土器が多い遺跡を調べるため、各遺跡の墨書土器点数を種類数で除

第1表 巨麻郡古代集落と墨書き土器

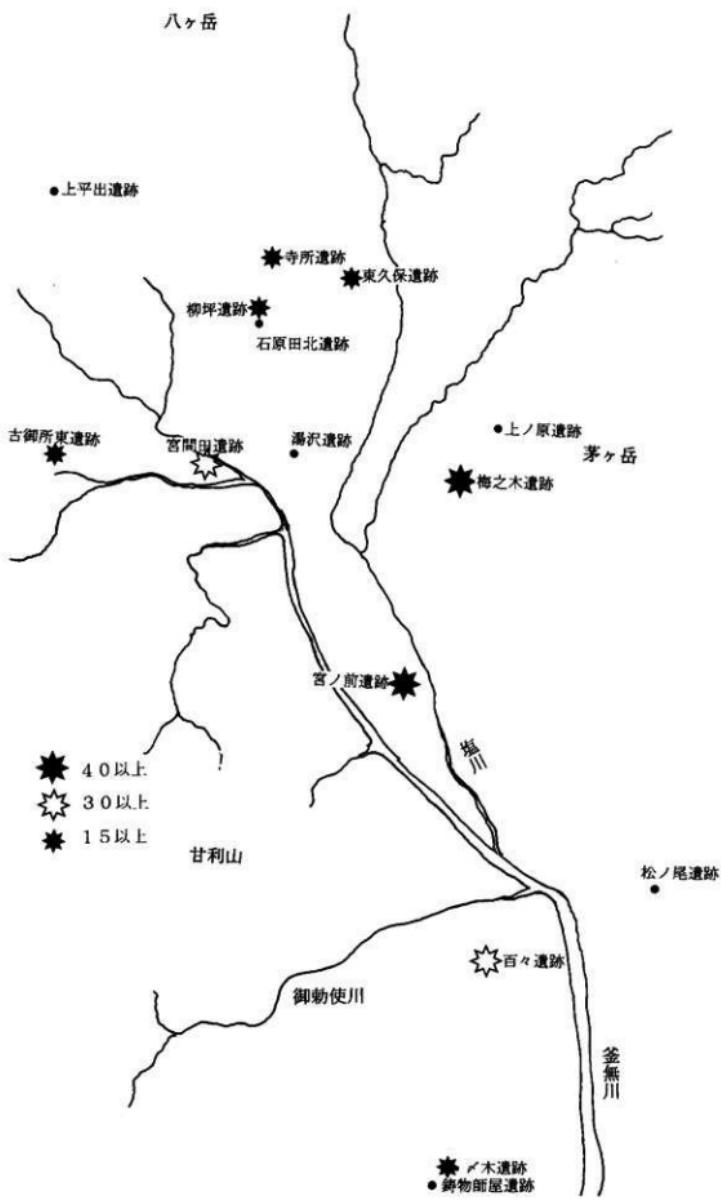
NO	市町村名	地名	時	周	件数	標立等	B種類	C種類	備考	圖書摘要	
										件	件
1	北林市	川上原	9	1	2	2			件・丁		
2	大原町	木下・大坪	9～10	8	3	3	4×1種		鹿丸		
3		金生	9～10	6	7	3			麻呂		
4		城下	10～11	26	標立2	57	11		本・二・三・月・吉・大・假・修・移・寺・中		
5		寺所	9～10	47	標立3	436	17		修・地・中・土・假・長・天・本・丁・稻・鹿丸・活立・東・萬・政所・ 月・印		
6		原山	9～10	5	獨立1 (1×9)	30	6		日・白・人・魚・酒杯		
7		東坂神社	9～10	8	獨立	5	5		平・高・井・安造・春力		
8		里生田第3	9～10	8	獨立	12	10		大・生・A・麻呂・西・里口・旗・正・道		
9		官地地2		3		1	1		金力		
10		東原	9～10	12	標立2 深瀬1	37	5	圓錐遺物	江・下・木・		
11		大津	9	3		0	0				
12	北林市	石上野	10	2		7	5		公力・千萬・子・革		
13	小瀬尻町	小原	9～10	3		0	0				
14		上平瀬	9～10	7		8	2		西		
15		竹原	9	3	治療	6	3		井・福・南西杯・厄		
16		前田	9	11	獨立5	3	5		並力・寺力・本力・大力・鑑		
17	北林市	新庄道上	9～11	7		2	2		海・月		
18	白瀬町	上北山3	9	3		0	0				
19		野野原小	9～10	6		29	8		?・東・肉・田・本・女力		
20		放下	9	1	獨立	4	4		米・津・?		
21		西原1	9	6	獨立4	4	3		大力・大・鑑		
22		西原2	9	10	獨立2	6	3		?・雨		
23		深水	10～12	7		12	5		釋迦・丁・文・女力・九九九		
24		古瀬所東	9～12	42		46	16		丁力・毛力・芋・合力・ ⁺ ・三・正・石力・本・挺・食・月・?		
25		西之久保		3		3	3		玉		
26	北林市	大八田・原田	9～10	8		7	7		衆・大方・丸力・守・田・今		
27	長瀬町	櫛野村	9～10	14		1	1		伴		
28		小畠山跡跡	10	9	獨立	19	8		子照・足・月・八・弱力		
29		小畠山北		1		1	1		族力		
30		添卓	10	1		1	1		守		
31		南畠西	10	6		2	2		邑・力		
32		柳原	9～10	38		61	20		大・八・石・山・他・山・廣・深・月・長・生・木・魚		
33		柳原B	9～10	4		7	4		真・雙・穴		
34		柳原D	9～10	15		23	4		齒・獸・定・頭・圓・本力・内力・九		
35		堤原	9～10	9		5	4		丸・石・太		
36		船原	9～10	10	小治治	33	11		東・千・三・山・長・礪・本・尾・仙・上・善・南・X		
37		当用	9～10	1		2	2				
38		心原田北	10～12	20		47	8		木・守・部・丁力・吉・中・山・人		
39		北野西	9～10	7	獨立3	73	10		南・子・幸・良・上・十八力・主力・味		
40		魔舟	10	1		1	1		?		
41		船原	9～11	6	獨立1	1	1				
42		西崎南	9～10	3		1	1				
43		原町学校	9～10	4	獨立2	2	2		貴・寺・X		
44		小屋敷	10	2		2	1		J		
45	北林市	青木北	10	12	獨立5	34	4		上・下・不・四方力		
46	高瀬町	海道南	9	3		1	1		育		
47		片口	9～10	12		29	12		矢・巾・千人・成・木・十・四方・圭・不・氏・?		
48		洞内	9	7		2	2		川力・月		
49		藤原寺跡	9	3	獨立1 (往×9)	1	1		大力		
50		水木保	9～10	33	獨立7	36	18		吉・穴・女力・火・石・六方・家庭・家・宿・定・酒・J・上・井・大麻呂・止		
51		深堀堂		6		5	2		丈・丈力		
52		溝沢	9～10	27	獨立8 繩列	106	11		丁・川・大力・太力・芳・酒・巾・中・平力・?		
53		人村上	9	5		3	3		□		
54		宮ノ前	10～11	2		0	0				
55		川又坂上	9	1		1	1				
56		西原	9～10	2		1	1				
57		西原北	9	2		3	3	繩	物		
58	北・武田	吉瀬山	9～11	74	獨立45 治治	101	31		生・神・圭・乙・川・X・木・忍・子・穴・作・基・4・向・万力・ 千村力・牧・廣・七・?		
59	北林市	塙川	9～10	5		6	3		大力・加		
60	美山町	大久保久	9～10	4	土器焼成8	3	1		川力		
61		西川	9～10	14		2	2		大		
62		人又・山田	8～11	9		12	9		刀・巴・丸・中・西・遇・仲・大		
63		上ノ原	9～10	72	獨立10	71	13		吉・木・十・し・六方・據・山・上・X・北・依・大・生		
64		浅下	9～12	7		1	1				
65		坂木	10	7		1	1		金		
66		黒谷	8～10	2	獨立2	3	2		大微・貞力		

第1表 巨麻郡古代集落と墨書き土器

67	北杜市 明野町	神取	9~10	12	2	2	時々、信
68		宮窓	9~10	21	0	0	
69		下大内	9~11	12	39	4	女・寛
70		西台・中谷井	9~10	12	7	4	仲御・下さ・六ヶ
71		村之内Ⅱ	11	22	7	5	高ヶ・山ヶ・國・生
72		村之内Ⅲ	11	2	4	2	大
73		地牧添	9~10	23	9	5	在・舟・貞ヶ・?
74		屋敷添2	10	2	2	2	千ヶ・
75		森山田	8~10	4	0	0	
76		大川上原	9~10	1	1	1	L
77		南門寺	9	1	0	0	
78		梅之木	9~10	82	407	47	呪詛帶
							山・乙・金・真・又・有・尔・東・悪人・本・土御・人・仁・則御・本・御・山・吉・羊・益・正・財・因・甚・政・酒・华・万・因・金・七・祖・神・子・八・家・矢・津・山鹿・丸・九万・無・解・應・日・後・丈・
79		北原	10	6	概々2	0	0
80	首崎市	新田	9~12	6	2	2	仁・?
81		後田	8~10	12	11	5	手・祝ヶ・南ヶ・高・穴ヶ
82		上木田	8~10	11	概々1	8	升・止・四・山・木・大・?
83		北坂田	8~	41	概々4	5	あ十・×・?
84		北斗条	8~9	9	1	1	E
85		御井	8~10	1	5	2	虫ヶ・?
86		坂井南	10	7	1	1	ト
87		大輪寺家	9~10	3	2	2	上・下
88		家の前	8~9	16	8	4	金糸織錦
89		中田小学校	8~12	22	概々2	11	手・藤ヶ・幸ヶ・南
90		中道	11~12	4	0	0	山・幼少・須半瓦杯・手・角ヶ・?
91		平岡田	9~11	7	概々1	16	9 瓦
92		前田	8~12	10	2	2	十・一・し・つ・?
93		立石	11~12	3	概々1	1	又ヶ
94		水無	10~11	2	0	0	八程織
		宮ノ前					又ヶ・脚ヶ・×・七・上・瓦・宅・生・木・岡ヶ・川・生方・谷ヶ・分・万・徒・人・中・貞・用田・一・上・城・子・山・門・御・御・又・又・外・北・渡・北・氏・吉・足・寺・井・美・民・私・植・有・手・傳・秋・十・波・水・伴・大・良・山・長・毛・末・親・兄・義・中・木・稻・主・淨・人・?
95			8~11	417	概々54	462	瓦
96		宮ノ前第2	9	10	概々10	15	9
97		宮ノ前第3	8~9	6	概々2	84	11
98		宮ノ前第5	8~11	12	概々1	17	7
99		前田	8~9~11	12		1	1
100		二宮地	10	15	概々5	7	2
101		上郷塚	8~10	4		1	1
102		仁之坪	9~12	22		5	3
103	甲斐市	金の尾	9~10	0		1	矢
104	数鳥町	金の尾5	9	3		18	5
105		板ノ尾	9~12	15		35	12 小金鋼仮
106		板ノ尾2	9~12	0		22	12
107		御山田	10~11	3		17	3
108	南アルプス市 (山北山村)	大坂	8~11	33		0	0
109		野牛山・大坂	8~9	9		1	1
110		石下	9	13	概々5	5	2
111		桜原・大神	10	2		0	0
112		心臓丸塚	8~12	13		0	0
113	山ノア (山白根町)	森ヶ	9~10	199	概々13	87	牛馬骨多數
114	市アルプス市 (旧檍原町)	御物語	9~10	114	概々2	81	18
115		十六所	9~12	2		0	0
116		川上道下	9~10	14		35	8
117		木ヶ	8~11	34	概々4	29	9
118		村前東A I	10~11	8		8	6
119		村前東A III	10~11	21		2	2
120		村前東A IV	10~11	14		3	2
121		南岡道下	8~10	43	概々3	3	3 右堅平帶
122		肥能B	8~10	11	概々6	4	2
123	南アルプス市 (旧新草町)	舟乃湯2	9~10	10	概々4	5	4
124		淡岱木5~2		5		4	2
125		寺部町附6	10~11	7		0	0
126		村北2	11	1		0	0
127	若狭町	大平	9~10	20		4	2
		合計		2155		2938	681



第1図 墨書文字数の多い遺跡



した。

この結果、同一種類の墨書き上器が最も多い遺跡は寺所遺跡で、1種類当たり平均25.6点である。以下多い順に述べると下内大遺跡9.7点、湯沢遺跡9.6点、梅之木遺跡8.6点、青木北遺跡8.5点、宮ノ前第3遺跡7.6点、東原遺跡7.4点、龍角西遺跡7.3点、宮ノ前遺跡7点、石原田北遺跡5.8点、柳坪南遺跡5.7点、御岳田遺跡5.6点、上ノ原遺跡5.4点、城下遺跡5.1点、原田遺跡5点、鎧物師屋遺跡4.5点、川上道下遺跡4.3点、上平出遺跡4点、旧省原小遺跡3.6点、金の尾5遺跡3.6点、二宮地遺跡3.5点、宮間田遺跡3.2点、メ木遺跡3.2点、柳坪遺跡3点、紺屋遺跡3点で、2点台は22遺跡、1点台は63遺跡である。点数が低いほど遺跡出土墨書きのバラツキが多く、点数が高いほど遺跡内に同じ墨書きが多いことになる。

この数値は平均値であるから各遺跡の性格の一端を垣間見るだけであるが、寺所遺跡は同一墨書きが極めて多いことを示しており、これと比較すると梅之木遺跡や宮ノ前遺跡は比較的バラツキが多い。また、宮間田遺跡や古御所遺跡は前二者より更にバラツキが認められよう。このように同一墨書きが多い集落と、バラツキの多い集落とは成立や経営の違いを反映しているものと考えられる。

第5表 同一種墨書き保有数平均値

同 一 種 類 数	25 以上	9点	8点	7点	5点	4点	3点	2点	1点	合計
		1	2	2	4	6	3	7	22	63
遺 跡 数	1	2	2	4	6	3	7	22	63	110

2 墨書き土器の内容

今回の対象とした遺跡からの出土墨書き上器は2938点である。これは壙書・刻書の文字、記号、数字、則大文字など全てを含んだ数字であるが、これより以降、ここでは数字や漢字を主として取り扱うことにする。以下に墨書き文字と出土数、遺跡名をあげる。ただし、ここでの選別は記述された意味を検討、把握した上で分類したものではなく、たぶんに筆者の主観が入ったものであることを申し添えておく。⁽ⁱⁱⁱ⁾

① 数字

- ・ 一 1遺跡3点 藤崎市宮ノ前遺跡3
- ・ 二 1遺跡1点 甲斐市松ノ尾遺跡1
- * このほか || の記号 3遺跡3点 北杜市城下遺跡1 古御所遺跡1 梅之木遺跡1
- ・ 三 2遺跡2点 北杜市柳坪遺跡1 紺屋遺跡1
- * このほか = の記号 4遺跡6点 北杜市城下遺跡1 古御所遺跡1 高内遺跡1 宮間田遺跡3
- ・ 四方ヶ 1遺跡1点 北杜市青木北遺跡1
- ・ 五 1遺跡1点 南アルプス市古御所遺跡1
- ・ 六 1遺跡1点 北杜市高台・中谷井遺跡1

- ・ 六万 2遺跡2点 北杜市東久保遺跡1 北杜市上ノ原遺跡1
- ・ 七 2遺跡2点 北杜市宮間田遺跡1 藤崎市宮ノ前遺跡1
- ・ 八 4遺跡10点 北杜市小和田遺跡1点 柳坪遺跡7点 梅之木遺跡1点 藤崎市宮ノ前3遺跡1点
- ・ 九 4遺跡5点 北杜市雑木遺跡1 柳坪遺跡2 上ノ原遺跡1 南アルプス市村前東遺跡1
- ・ 一 9遺跡14点 北杜市中ノ原遺跡1 寺所遺跡1 雜木遺跡1 石原田北遺跡1 宮間田遺跡2 梅之木遺跡4 藤崎市北後田遺跡2 坂井南遺跡1 中田小遺跡1
- ・ 十八 1遺跡2点 北杜市龍角西遺跡2
- ・ 十 2遺跡3点 北杜市高内遺跡1 藤崎市上本田遺跡2 *これは記号の可能性もある
- ・ 卅 2遺跡2点 北杜市新居道上遺跡1 藤崎市中田小遺跡1 *これは記号の可能性がある
- ・ 百 1遺跡1点 甲斐市松ノ尾遺跡1
- ・ 併 1遺跡4点 北杜市古御所遺跡3
- ・ 八百 1遺跡3点 北杜市古御所遺跡8 宮間田遺跡2 石上り遺跡1 紺屋遺跡1 龍角西遺跡23 同湯沢遺跡10 紺屋添2遺跡1 藤崎市宮ノ前遺跡1 甲斐市松ノ尾遺跡2
- ・ 万 6遺跡31点 北杜市城下遺跡2 石上り遺跡2 宮間田遺跡1 梅之木遺跡1 藤崎市宮ノ前遺跡24 同第3遺跡1
- ・ 万千 1遺跡1点 北杜市行上り遺跡1
- ・ 億 1遺跡1点 北杜市前田遺跡1

② 規模を表す文字

- ・ 人 17遺跡41点 北杜市城下遺跡1 寺所遺跡2 原田遺跡4 豆生田第3遺跡1 同所帯1遺跡2 同柳坪遺跡1 藤林寺跡遺跡1 湯沢遺跡3 咸川遺跡1 西川遺跡1 大豆生田遺跡1 上ノ原遺跡6 村之内Ⅲ遺跡2 梅之木遺跡1 藤崎市上本田遺跡1 宮ノ前遺跡1 南アルプス市川上道下遺跡12
- ・ 大万 1遺跡1点 北杜市八田・原田遺跡1
- ・ 大麻呂 1遺跡1点 北杜市東久保遺跡1 (人名)
- ・ 人徳 1遺跡2点 北杜市藤巻北遺跡2 (徳のある人物・僧侶・または人名か)
- ・ 中 10遺跡17点 北杜市寺所遺跡4 石原田北遺跡3 湯沢遺跡1 大豆生田遺跡1 梅之木遺跡1 藤崎市宮ノ前遺跡3 甲斐市松ノ尾遺跡1 南アルプス市立石下遺跡1 メ木遺跡1 宮間田遺跡1
- ・ 小千 1遺跡1点 南アルプス市メ木遺跡1
- ・ 小万 1遺跡6点 南アルプス市メ木遺跡6
- ・ 小介 1遺跡2点 北杜市龍角西遺跡2点 (位・身分か)
- ・ 多 1遺跡1点 甲斐市松ノ尾遺跡1

③ 方向・方位を表す文字

- ・ 東 5 遺跡 9 点 北杜市寺所遺跡 1 旧菅原小遺跡 4
紺屋遺跡 2 梅之木遺跡 1 宮ノ前遺跡 1
- ・ 西 3 遺跡 8 点 北杜市柳坪遺跡 2 大豆生田遺跡 2
並崎市宮ノ前第 2 遺跡 4
- ・ 南 6 遺跡 9 点 北杜市所帶 II 遺跡 1 紺屋遺跡 4
龍角西遺跡 1 宮間田遺跡 1 菊崎市後田遺跡 1 畜
の前遺跡 1
- ・ 北 3 遺跡 6 点 北杜市上ノ原遺跡 1 菊崎市宮ノ前
遺跡 4 宮ノ前第 3 遺跡 1
- ・ 上 7 遺跡 43 点 北杜市紺屋遺跡 1 龍角西遺跡 1
青木北遺跡 22 東久保遺跡 1 上ノ原遺跡 1 菊崎市
宮ノ前遺跡 2 宮ノ前第 3 遺跡 15
- ・ 下 3 遺跡 6 点 北杜市東原遺跡 3 青木北遺跡 2
高台・中谷井遺跡 1
- ・ 左 1 遺跡 1 点 北杜市大八田・原田遺跡 1
- ・ 外 1 遺跡 1 点 菊崎市宮ノ前遺跡 1

④ 干支(方位・時刻)・十干を表す文字

- ・ 丁 5 遺跡 17 点 寺所遺跡 1 東久保遺跡 1 梅之木
遺跡 1 紺屋市後田遺跡 7 点 宮ノ前遺跡 7 点
- ・ 丑 1 遺跡 1 点 北杜市前田遺跡 1
- ・ 牛 1 遺跡 5 点 北杜市寺所遺跡 5
- ・ 巳 2 遺跡 2 点 北杜市大豆生田遺跡 1 菊崎市宮ノ
前 3 遺跡 1
- ・ 羊 1 遺跡 1 点 菊崎市人輪寺東遺跡 1
- ・ 申 1 遺跡 1 点 菊崎市宮ノ前遺跡 1
- ・ 乙 2 遺跡 10 点 北杜市宮間田遺跡 1 梅之木遺跡
10
- ・ 内 2 遺跡 2 点 菊崎市宮ノ前遺跡 1 南アルプス市
鉄物師原遺跡 1
- ・ 丁 2 遺跡 2 点 北杜市宮間田遺跡 1 菊崎市宮ノ前
遺跡 1

⑤ 身分・官位を表す文字

- ・ 守 3 遺跡 3 点 北杜市大八田・原田遺跡 1 深草遺
跡 1 石原田北遺跡 1
- ・ 介 1 遺跡 10 点 菊崎市宮ノ前遺跡 10
- ・ 小介 (前掲)
- ・ 目 1 遺跡 2 点 北杜市梅之木遺跡 2
- ・ 長 7 遺跡 20 点 北杜市古御所東遺跡 1 柳坪遺跡 1
術屋遺跡 4 菊崎市二反田遺跡 1 宮ノ前遺跡 2 鉄
物師屋遺跡 10 メ木遺跡 1
- ・ 直 1 遺跡 1 点 菊崎市宮ノ前遺跡 1
- ・ 王 3 遺跡 3 点 北杜市寺所遺跡 1 菊崎市北下条遺
跡 1 南アルプス市石々遺跡 1
- ・ 公 1 遺跡 1 点 菊崎市石之坪遺跡 1
- ・ 連 1 遺跡 2 点 菊崎市宮ノ前第 2 遺跡 2
- ・ 主 7 遺跡 15 点 北杜市豆生田第 3 遺跡 2 柳坪南
遺跡 3 古御所東遺跡 1 宮間田遺跡 1 上ノ原遺跡
3 菊崎市宮ノ前遺跡 4 南アルプス市角力場第 2 遺
跡 1

- ・ 刑 1 遺跡 1 点 北杜市甲ッ原遺跡 1

- ・ 因 1 遺跡 1 点 北杜市梅之木遺跡 1 (浮図などか)

⑥ 施設を表す文字

- ・ 家 3 遺跡 7 点 北杜市東久保遺跡 4 梅之木遺跡 1
並崎市宮ノ前遺跡 2
- ・ 宅 1 遺跡 24 点 並崎市宮ノ前遺跡 24
- ・ 政 2 遺跡 5 点 北杜市上ノ原遺跡 2 梅之木遺跡 3
- ・ 戸・戸殿 2 遺跡 2 点 菊崎市宮ノ前 1 宮ノ前第 3
遺跡 1
- ・ 寺 4 遺跡 5 点 北杜市城下遺跡 1 前田遺跡 1 原
町学校 1 菊崎市宮ノ前遺跡 2
- ・ 秩寺 1 遺跡 1 点 北杜市甲ッ原遺跡 1
- ・ 藏 1 遺跡 1 点 南アルプス市鉄物師屋遺跡 1
- ・ 庄 1 遺跡 1 点 北杜市紺屋遺跡 1
- ・ 舟 1 遺跡 1 点 菊崎市宮ノ前遺跡 1
- ・ 牧 1 遺跡 1 点 北杜市宮間田遺跡 1
- ・ 道 1 遺跡 2 点 北杜市大豆生田遺跡 2
- ・ 田 9 遺跡 60 点 北杜市旧菅原小遺跡 1 大八田・
原田遺跡 1 柳坪遺跡 1 柳坪南遺跡 2 梅之木遺跡
33 菊崎市宮ノ前遺跡 2 宮ノ前第 2 遺跡 1 宮ノ前
第 3 遺跡 16 中斐市松ノ尾遺跡 3 (田部カ)

⑦ 自然物・地理等を表す文字

- ・ 山 10 遺跡 22 点 北杜市柳坪遺跡 1 柳坪南遺跡 5
紺屋遺跡 1 石原田北遺跡 1 村之内 II 遺跡 1 梅之
木遺跡 3 菊崎市上本田遺跡 2 中川小遺跡 1 宮ノ
前遺跡 5 宮ノ前第 3 遺跡 1 (山部カ)
- ・ 岳 1 遺跡 2 点 柳坪遺跡 2
- ・ 峯カ 1 遺跡 4 点 北杜市湯沢遺跡 4
- ・ 岐 3 遺跡 8 点 北杜市湯沢遺跡 5 梅之木遺跡 2
菊崎市石之坪遺跡 1
- ・ 丘 1 遺跡 1 点 中斐市松ノ尾 2 遺跡 1
- ・ 川 1 遺跡 1 点 中斐市松ノ尾 2 遺跡 1 (三・三など
と区別が困難のものもある)
- ・ 水 1 遺跡 1 点 菊崎市宮ノ前遺跡 1
- ・ 氷 1 遺跡 1 点 北杜市前田遺跡 1
- ・ 碓 1 遺跡 1 点 北杜市寺所遺跡 1
- ・ 土 2 遺跡 3 点 菊崎市大輪寺東遺跡 1 宮ノ前遺跡
2
- ・ 石 4 遺跡 8 点 北杜市寺所遺跡 2 古御所東遺跡 1
境原遺跡 2 東久保遺跡 3
- ・ 穴 2 遺跡 2 点 北杜市柳坪B遺跡 1 菊崎市後田遺
跡 1
- ・ 天 2 遺跡 2 点 北杜市前田遺跡 1 菊崎市宮ノ前遺
跡 1
- ・ 日・日下 2 遺跡 3 点 北杜市原田遺跡 2 菊崎市宮
ノ前第 3 遺跡 1 (*人名か)
- ・ 月 2 遺跡 4 点 北杜市小和田遺跡 3 柳坪遺跡 1
- ・ 春 2 遺跡 2 点 北杜市東姥神遺跡 1 紺屋遺跡 1
- ・ 秋 1 遺跡 1 点 菊崎市宮ノ前遺跡 1
- ・ 風カ 1 遺跡 1 点 北杜市城下遺跡 1

- ・花 1 遺跡 1 点 北杜市寺所遺跡 1
- ・虫 1 遺跡 1 点 菊崎市駒井遺跡 1
- ・鹿カ 2 遺跡 2 点 北杜市木ノド・大坪遺跡 1 寺所遺跡 1
- ・羊 (前掲)
- ・木 8 遺跡 18 点 北杜市柳坪遺跡 1 石原田北遺跡 1 宮間田遺跡 1 大豆生田遺跡 1 菊崎市上本田遺跡 1 宮ノ前遺跡 11 甲斐市松ノ尾遺跡 1 南アルプス市百々遺跡 1
- ・根カ 2 遺跡 4 点 北杜市城下遺跡 2 寺所遺跡 2
- ・梶 1 遺跡 22 点 北杜市梅之木遺跡 22
- ・麻 2 遺跡 2 点 北杜市梅之木遺跡 1 菊崎市宮ノ前遺跡 1
- ⑧ 食糧・食器などを表す文字
 - ・米 2 遺跡 2 点 北杜市坂下遺跡 1 大八田・原田遺跡 1
 - ・穀 1 遺跡 1 点 菊崎市宮ノ前遺跡 1
 - ・栗 2 遺跡 2 点 菊崎市石之坪遺跡 1 甲斐市金の尾 5 遺跡 1
 - ・魚 2 遺跡 5 点 北杜市原田遺跡 3 柳坪遺跡 2
 - ・穴 1 遺跡 3 点 北杜市東久保遺跡 3
 - ・肉 1 遺跡 1 点 北杜市旧首原小遺跡 1
 - ・鹿カ (前掲)
 - ・羊 (前掲)
 - ・酒 3 遺跡 5 点 北杜市東久保遺跡 1 湯沢遺跡 1 梅之木遺跡 3
 - ・酒杯 1 遺跡 1 点 北杜市原田遺跡 1
 - ・前酒杯 1 遺跡 1 点 北杜市前田遺跡 1
- ⑨ 氏族・人名を表す文字
 - ・安雲 1 遺跡 1 点 北杜市東経神B遺跡 1
 - ・祝 2 遺跡 3 点 菊崎市後田遺跡 1 宮ノ前遺跡 2 (祝部-職業・身分か)
 - ・刑・刑部カ 2 遺跡 2 点 北杜市梅之木遺跡 1 甲斐市松ノ尾 2 遺跡 1
 - ・狗 1 遺跡 1 点 甲斐市松ノ尾 2 遺跡 1 (高處か巨麻にかかるか)
 - ・丈 4 遺跡 8 点 北杜市東久保遺跡 2 薬師堂遺跡 3 梅之木遺跡 1 宮ノ前遺跡 2 (丈部か)
 - ・葛井 1 遺跡 1 点 菊崎市中H小遺跡 1
 - ・倭 1 遺跡 1 点 北杜市梅之木遺跡 1 (倭-倭神社・倭部か)
 - ・伴 1 遺跡 1 点 菊崎市宮ノ前遺跡 1 (伴・伴か)
 - ・日・日下 (前掲)
 - ・丸 3 遺跡 7 点 北杜市境原遺跡 1 湯沢遺跡 1 梅之木遺跡 5 (丸部か)
 - ・源 1 遺跡 4 点 北杜市梅之木遺跡 4
 - ・神 2 遺跡 3 点 北杜市宮間田遺跡 2 梅之木遺跡 1 (神部・神人部などか)
 - ・物 1 遺跡 2 点 北杜市西原北遺跡 2 (物部か)
 - ・矢 4 遺跡 20 点 北杜市宮間田遺跡 12 梅之木遺跡
- 6 甲斐市金の尾遺跡 1 南アルプス市角力場 2 遺跡 1 (矢作部か)
- ・部 1 遺跡 1 点 北杜市石原田北遺跡 1
- ・氏 1 遺跡 5 点 菊崎市宮ノ前遺跡 5
- ・大麻呂 1 遺跡 1 点 北杜市東久保遺跡 1
- ・麻呂 1 遺跡 1 点 北杜市立生田第3 遺跡 1
- ・万呂 2 遺跡 2 点 北杜市金生遺跡 1 菊崎市二反田遺跡 1
- ・家吉 1 遺跡 1 点 北杜市東久保遺跡 1
- ・大徳 (前掲)
- ・淨人 1 遺跡 1 点 菊崎市宮ノ前遺跡 1
- ・征人 2 遺跡 2 点 菊崎市宮ノ前遺跡 1 三宮地遺跡 1
- ・人 5 遺跡 16 点 北杜市梅之木遺跡 11 菊崎市宮ノ前遺跡 2 甲斐市金の尾 5 遺跡 1 松ノ尾遺跡 1 南アルプス市村前東 A I 遺跡 1
- ・足 3 遺跡 9 点 北杜市小和田遺跡 1 級屋遺跡 3 点 菊崎市宮ノ前第3 遺跡 5
- ・廢 5 遺跡 6 点 北杜市豆生田第3 遺跡 1 小和田北遺跡 1 柳坪遺跡 1 宮間田遺跡 1 菊崎市宮ノ前遺跡 2
- ⑩ 吉祥を表す文字
 - ・侈 (し) 又は「福」 2 遺跡 158 点 北杜市城下遺跡 1 寺所遺跡 157
 - ・正 4 遺跡 4 点 豆生田第3 遺跡 1 古御所東遺跡 1 梅之木遺跡 1 南アルプス市百々遺跡 1
 - ・吉 6 遺跡 12 点 北杜市城下遺跡 1 石原田北遺跡 1 東久保遺跡 3 梅之木遺跡 2 菊崎市宮ノ前遺跡 4 宮ノ前第2 遺跡 1
 - ・恵 2 遺跡 2 点 南アルプス市鉢物師屋遺跡 1 川上道下遺跡 1
 - ・良 2 遺跡 3 点 菊崎市宮ノ前遺跡 1 南アルプス市川上道下遺跡 2
 - ・幸 2 遺跡 9 点 北杜市糸屋遺跡 1 梅之木遺跡 8
 - ・円 1 遺跡 1 点 北杜市小屋敷遺跡 1
 - ・全 1 遺跡 2 点 北杜市梅之木遺跡 2
 - ・益 1 遺跡 1 点 北杜市梅之木遺跡 1
 - ・恭 1 遺跡 1 点 北杜市梅之木遺跡 1
 - ・得 1 遺跡 2 点 南アルプス市百々遺跡 2
 - ・貞 2 遺跡 4 点 甲斐市松ノ尾遺跡 1 南アルプス市潤呂木遺跡 3
 - ・企 4 遺跡 7 点 北杜市占御所東遺跡 1 須米遺跡 1 梅之木遺跡 4 南アルプス市鉢物師屋遺跡 1
 - ・朕 1 遺跡 1 点 北杜市柳坪遺跡 1
 - ・有 3 遺跡 3 点 北杜市海道前遺跡 1 梅之木遺跡 1 菊崎市宮ノ前遺跡 1
 - ・福 4 遺跡 8 点 北杜市寺所遺跡 2 竹原遺跡 4 梅之木遺跡 1 宮ノ前遺跡 1
 - ・白 1 遺跡 2 点 北杜市原田遺跡 2
 - ・貞 10 遺跡 50 点 北杜市寺所遺跡 2 宮地第2 遺跡

- 1 柳坪遺跡 3 柳坪B遺跡 3 柳坪南遺跡 1 煙卷北遺跡 1 屋敷添遺跡 1 梅之木遺跡 36 南アルプス市村前東A III 遺跡 1
- 安 1 遺跡 1 点 北杜市柳坪遺跡 1
 - 富 3 遺跡 9 点 北杜市上平山遺跡 6 宮間田遺跡 1 莊崎市堂ノ前遺跡 2
 - 淨 2 遺跡 3 点 北杜市坂下遺跡 1 梅之木遺跡 2
 - 恒 1 遺跡 1 点 莊崎市宮ノ前遺跡 1
 - 永 2 遺跡 4 点 莊崎市宮ノ前遺跡 2 南アルプス市鈎物師屋遺跡 2
 - 玉 3 遺跡 3 点 北杜市西之久保遺跡 1 莊崎市宮ノ前遺跡 1 甲斐市松ノ尾遺跡 1
 - 和カ 1 遺跡 1 点 莊崎市宮ノ前遺跡 1
 - 成 2 遺跡 2 点 甲斐市松ノ尾遺跡 1 南アルプス市鈎物師屋遺跡 1
 - 隆 1 遺跡 1 点 甲斐市松ノ尾遺跡 1
 - 榮 2 遺跡 2 点 南アルプス市鈎物師屋遺跡 1 村前東A III 遺跡 1
 - 信 1 遺跡 1 点 北杜市神取遺跡 1
 - 幸 2 遺跡 2 点 莊崎市堂ノ前遺跡 1 宮ノ前 2 遺跡 1
 - 美 1 遺跡 4 点 莊崎市宮の前遺跡 4
 - 義 1 遺跡 2 点 莊崎市宮の前遺跡 2
- ⑪ 國・地域など行政単位や地名を表す文字
- 甲斐 1 遺跡 1 点 南アルプス市百々遺跡 1
 - 国 3 遺跡 25 点 北杜市村之内 II 遺跡 1 梅之木遺跡 22 莊崎市後川遺跡 2
 - 里 2 遺跡 4 点 北杜市豆生田第3 遺跡 1 南アルプス市鈎物師屋遺跡 3
 - 保 1 遺跡 1 点 北杜市柳坪遺跡 1
 - 須玉(环) 1 遺跡 1 点 北杜市中田小遺跡 1
 - 須 1 遺跡 1 点 北杜市東久保遺跡 1
 - 千村 1 遺跡 10 点 北杜市宮間田遺跡 10
- ⑫ 単位
- 本 10 遺跡 20 点 北杜市城下遺跡 2 寺所遺跡 1 東原遺跡 1 旧菅原小遺跡 8 占御所東遺跡 1 柳坪遺跡 1 納塚遺跡 1 北杜市梅之木遺跡 2 南アルプス市鈎物師屋遺跡 1 メ木遺跡 2
 - 間カ 2 遺跡 2 点 北杜市古御所東遺跡 1 柳坪遺跡 1
 - 斗 1 遺跡 1 点 北杜市屋敷添遺跡 1
 - 巾 4 遺跡 6 点 北杜市城下遺跡 3 柳坪遺跡 1 湯沢遺跡 1 上ノ原遺跡 1
 - 反 1 遺跡 1 点 北杜市原田遺跡 1
- ⑬ その他
- 刀 2 遺跡 2 点 北杜市新居道上遺跡 1 大豆生田遺跡 1
 - 又 5 遺跡 26 点 莊崎市宮ノ前遺跡 4 南アルプス市鈎物師屋遺跡 13 メ木遺跡 5 村前東A I 遺跡 1 川上道下遺跡 3
 - 人 1 遺跡 1 点 北杜市紺岸遺跡 1
 - 力 1 遺跡 1 点 北杜山南新居西遺跡 1
 - 女 6 遺跡 23 点 北杜市旧菅原小遺跡 1 梅之木遺跡 1 西原北遺跡 1 下大内遺跡 18 梅之木遺跡 1 南アルプス市メ木遺跡 1
 - 之 1 遺跡 1 点 南アルプス市村前東A I 遺跡 1
 - 爪 1 遺跡 1 点 甲斐市金の尾 5 遺跡 1
 - 仁 1 遺跡 1 点 北杜市神取遺跡 1
 - 方カ 1 遺跡 1 点 北杜市城下遺跡 1
 - 不 1 遺跡 1 点 北杜市青木北遺跡 1
 - 毛 1 遺跡 1 点 莊崎市宮ノ前遺跡 1
 - 手 2 遺跡 11 点 南アルプス市鈎物師屋遺跡 4 川上道下遺跡 7
 - 止 1 遺跡 1 点 莊崎市上本田遺跡 1
 - 中新 1 遺跡 2 点 北杜市高台・中谷井遺跡 1
 - 兄 1 遺跡 1 点 莊崎市宮ノ前遺跡 1
 - 平 3 遺跡 10 点 北杜市東姥神遺跡 2 甲斐市金の尾 5 遺跡 6 増穂町大平遺跡 2
 - 立 3 遺跡 3 点 原町学校 1 莊崎市宮ノ前遺跡 1 南アルプス市川上道下遺跡 1
 - 加 1 遺跡 2 点 北杜市塙川遺跡
 - 半 1 遺跡 1 点 莊崎市堂ノ前遺跡 1
 - 尔 1 遺跡 1 点 北杜市梅之木遺跡 1
 - 收 1 遺跡 1 点 北杜市寺所遺跡 1
 - 他 1 遺跡 1 点 北杜市柳坪遺跡 1
 - 牛・生方 6 遺跡 29 点 北杜市宮間田遺跡 20 上ノ原遺跡 1 村之内 II 遺跡 1 梅之木遺跡 1 莊崎市宮ノ前遺跡 5 南アルプス市百々遺跡 1
 - 民 1 遺跡 1 点 莊崎市宮ノ前遺跡 1
 - 地 1 遺跡 2 点 北杜市寺所遺跡 2
 - 年 1 遺跡 1 点 北杜市梅之木遺跡 1
 - 在 1 遺跡 1 点 北杜市屋敷添遺跡 1
 - 向 1 遺跡 1 点 北杜市宮間田遺跡 1
 - 休 1 遺跡 1 点 北杜市宮間田遺跡 1
 - 仲 2 遺跡 2 点 北杜市大豆生田遺跡 1 莊崎市宮ノ前 3 遺跡 1
 - 江 1 遺跡 1 点 北杜市境原遺跡 1
 - 朱 1 遺跡 1 点 北杜市坂下遺跡 1
 - 仰 1 遺跡 1 点 莊崎市宮ノ前遺跡 1
 - 忍 1 遺跡 1 点 北杜市宮間田遺跡 1
 - 作 1 遺跡 1 点 北杜市宮間田遺跡 1
 - 私 1 遺跡 2 点 莊崎市宮ノ前遺跡 2
 - 奈カ 1 遺跡 1 点 莊崎市宮ノ前遺跡 1
 - 定 2 遺跡 2 点 北杜市南新居西遺跡 1 西原北遺跡 1
 - 宗 1 遺跡 1 点 北杜市石上り遺跡 1
 - 味 1 遺跡 3 点 北杜市龍角西遺跡 3
 - 砥カ 1 遺跡 1 点 莊崎市宿尻遺跡 1
 - 高 5 遺跡 5 点 北杜市東姥神遺跡 1 村之内 II 遺跡 1 莊崎市後川遺跡 1 南アルプス市鈎物師屋遺跡 1

角力場第2遺跡

- ・ 時 1 遺跡 1 点 北杜市神取遺跡 1
- ・ 息 1 遺跡 1 点 北杜市南新居西遺跡 1
- ・ 財 1 遺跡 1 点 北杜市梅之木遺跡 1
- ・ 常 1 遺跡 1 点 北杜市寺所遺跡 1
- ・ 紬 1 遺跡 1 点 北杜市所帯 1 遺跡 1
- ・ 犠 1 遺跡 1 点 莢崎市宮ノ前遺跡 1
- ・ 蝶 1 遺跡 1 点 北杜市小和田遺跡 1
- ・ 最 1 遺跡 1 点 北杜市梅之木遺跡 1
- ・ 寛 1 遺跡 1 点 北杜市下大内遺跡 1
- ・ 緑 1 遺跡 1 点 北杜市上ノ原遺跡 1

以上 231 種の墨書き土器について、出土遺跡数と出土点数を述べた。1 文字が出土する最大の遺跡数は「人」が 17 遺跡 41 点である。以下、「山」10 遺跡 22 点、「本」10 遺跡 20 点、「十」9 遺跡 14 点、「丁」9 遺跡 49 点、「中」10 遺跡 17 点、「口」9 遺跡 60 点、「木」8 遺跡 18 点、「真」9 遺跡 49 点、「主」7 遺跡 15 点、「上」7 遺跡 43 点、「艮」7 遺跡 20 点、「万」6 遺跡 31 点、「南」6 遺跡 9 点、「女」6 遺跡 23 点、「生」6 遺跡 29 点、「吉」6 遺跡 12 点、「東」5 遺跡 9 点、「子」5 遺跡 17 点、「人」5 遺跡 16 点、「廣」5 遺跡 6 点、「又」5 遺跡 26 点、「高」5 遺跡 5 点であり、この他、4 遺跡にまたがっているものは 11 点、3 遺跡にまたがるものは 17 点、2 遺跡にまたがるものは 41 点、1 遺跡のみのものは 130 点である。

また、同一文字の点数が最も多いのは、寺所遺跡の「侈(福)」157 点で、1 遺跡から出土した同一文字数では最多である。隣接する城下遺跡から 1 点出土しているが、寺所遺跡から搬入されたものであろう。「真」は梅之木遺跡から 36 点、「山」は梅之木遺跡から 33 点、宮ノ前第3遺跡 16 点、「万」「宅」は宮ノ前遺跡から各 24 点、「千」は龍角西遺跡から 23 点、「兜」「國」は梅之木遺跡で各 22 点、「生」は宮間山遺跡から 20 点が出土している。

先にも述べたように、1 遺跡から多数の同文字が出土する遺跡と、複数の文字が出土する遺跡とがあり、墨書き土器が 400 点以上出土した宮ノ前遺跡と梅之木遺跡は種類・点数の在り方が類似しているが、寺所遺跡は点数に比較して種類が少ないという特徴を持つ。

3 集落における特徴

① 同一文字を多く所有する例

同一文字を多く出土する遺跡として 1-④で取りあげたものには寺所遺跡、下大内遺跡、湯沢遺跡、梅之木遺跡、青木北遺跡、宮ノ前第3遺跡、東原遺跡、龍角西遺跡などがある。これらの遺跡の実態を次に見ていきたい。

a 寺所遺跡

本遺跡の墨書き土器 436 点には 17 種類があり、その主要な構成は、「侈(福)」が 157 点、「艮」5 点、「中」4 点で、そのほかは 2 ~ 1 点であり、残りは記号や判読不明な文字である。

b 下大内遺跡

出土点数 39 点の内 4 種類の墨書き土器があり、「女」18 点、「寛」1 点で、残りは記号や判読不明文字である。

c 湯沢遺跡

総数 106 点のうち 11 種類が認められ、主要なものは「千」10 点、「川」10 点、「岑」5 点、「峯」4 点、「人」3 点で、そのほかは 1 点ずつか、記号・不明文字である。

d 梅之木遺跡

出土総数 407 点のうち 47 種類があり、その主要なものは「真」36 点、「田」33 点、「梶」22 点、「国」22 点、「人」11 点、「仁」10 点、「乙」10 点、「季」8 点、「矢」6 点、「丸」5 点、以下は 1 種類 4 点以下で、他に記号や判読不明文字がある。

e 青木北遺跡

出土総数 34 点のうち 4 種類があり、「上」22 点で、他は 1 ~ 2 点と記号・判読不明である。

f 宮ノ前第3遺跡

本来は宮ノ前遺跡と一体の遺跡であろうが、地点の特徴があるので取りあげておく。出土総数 84 点のうち 11 種類があり、「田」16 点、「上」15 点、「足」5 点で他は 1 点ずつであり、残りは記号・判読不明文字である。

g 東原遺跡

出土総数 37 点中に 5 種類があり、「トカ」3 点、「江」3 点で、他は 1 点か記号・判読不明文字である。数字の見かけ上は 1 種類の点数が多くなっているが、特別に多い墨書き文字がない。

h 龍角西遺跡

出土総数 62 点中に 10 種類があり、「千」23 点、「入」3 点、「味」3 点と続く。その他は記号か判読不明文字である。

i 宮ノ前遺跡

出土数 462 点のうち 66 種類の墨書き土器がある。「宅」「万」24 点、「×」22 点、「木」11 点、「介」10 点、「子」7 点、「民」6 点、「氏」「山」「生」5 点、「#」「主」4 点、「一」3 点で、そのほかは 1 ~ 2 点と記号判読不明文字である。この他の遺跡は、1 種類の同文字点数が 5 点以下であるので、同一文字が少ない遺跡群に属する。

こうしてみると寺所遺跡の「侈(福)」157 点がすば抜けて多く、次が梅之木遺跡の「真」36 点、同「山」33 点、「梶」22 点、宮ノ前遺跡の「宅」「万」24 点、「×」22 点、諸角西遺跡の「千」23 点、青木北遺跡の「穴」22 点、下大内遺跡の「女」18 点などが、同一遺跡出土の同一文字では点数の多いものである。

これらのうち、他の遺跡と墨書き文字を共有しないものは、寺所遺跡「侈(福)」157 点、宮ノ前遺跡「宅」24 点、梅之木遺跡「梶」22 点、宮ノ前遺跡「介」10 点、宮周田遺跡「千村」10 点、メ木遺跡「小万」6 点、寺所遺跡「艮」5 点、宮ノ前遺跡「氏」5 点、宮ノ前遺跡「美」4 点、湯沢遺跡「峯」4 点、紺屋遺跡「臼」4 点、梅之木遺跡「源」4 点などである。この他 1 遺跡から 1 種類の墨書き 1 ~ 3 点しか出土していない遺跡が 118 遺跡ある。この 118 遺跡

は今後の調査により新たな墨書き器の出土があれば、集落や墨書きの性格が明確になるであろう。

さて、周辺集落と関連性のない、単一の集落からしか出土しない墨書き器を有する集落は、その集団の性格の一部を墨書き土器が表していると見て良い。寺所遺跡は「移・福」「艮」であり、宮ノ前遺跡は「七」「介」「氏」「美」、梅之木遺跡は「梶」「源」、湯沢遺跡は「峯」、宮間田遺跡は「千村」、メ木遺跡は「小万」、紹屋遺跡は「伯」などである。もちろん、この文字資料だけで集落の性格が明らかになるというものではなく、各集落が所有している出土点数の多い墨書き土器も参考にしなければならない。

② 多数の遺跡をつなぐ墨書き（第7表）

次に、共通する文字を持つ集落数の比較はどのようになるだろうか。文字別に調べたものを挙げると、「大」17遺跡41点、「十」9遺跡14点、「山」10遺跡22点、「本」10遺跡20点、「田」9遺跡60点、「下」9遺跡49点、「中」9遺跡16点、「木」8遺跡18点、「真」9遺跡49点、「主」7遺跡15点、「上」7遺跡43点、「長」7遺跡20点、「女」6遺跡23点、「牛」6遺跡29点、「万」6遺跡31点、「南」6遺跡9点、「古」6遺跡12点、「東」5遺跡9点、「子」5遺跡17点、「人」5遺跡16点、「廣」5遺跡6点、「又」5遺跡26点、「高」5遺跡5点、「=」4遺跡6点、「八」4遺跡10点、「九」4遺跡5点、「寺」4遺跡5点、「石」4遺跡8点、「丈」4遺跡8点、「矢」4遺跡20点、「正」4遺跡4点、「金」4遺跡7点、「山」4遺跡6点、「立」4遺跡14点などで、「国」3遺跡25点の他、3遺跡と共有するものの14遺跡、2遺跡と共有するものの42遺跡である。

「大」は御動使扇状地の川上道下遺跡が12点で最大数を持ち、茅ヶ岳山麓の上ノ原遺跡が6点、八ヶ岳山麓の原田遺跡が4点。そのほか各地域で1~4点出土の遺跡が分布する。「山」は柳坪南遺跡と宮ノ前遺跡で5点ずつ出土し、他は八ヶ岳山麓・茅ヶ岳山麓と藤井平に分布する。「本」は駒ヶ岳山麓の旧菅原小道跡から8点出土しており、そのほかは八ヶ岳山麓と茅ヶ岳山麓、御動使地域に分布する。「田」は茅ヶ岳山麓の梅之木遺跡から33点、藤井平の宮ノ前3遺跡から16点が出土しており、他は御動使地域を除いて出土する。「下」は八ヶ岳山麓の龍角西遺跡から23点、湯沢遺跡で10点、駒ヶ岳山麓の古御所東遺跡8点が出土しており、茅ヶ岳山麓、藤井平、甲斐市などで見られる。「木」は宮ノ前遺跡11点を最大とし、各地域に1~2点が分布する。「真」は梅之木遺跡36点が最大で、八ヶ岳山麓では5遺跡があり堀川流域、御動使地域では僅かに1点ずつ分布する。「主」は藤井平の宮ノ前遺跡4点を最大として、甲斐市を除く地域に散見する。「上」は青木北遺跡22点、宮ノ前3遺跡15点が突出し、両遺跡の強い関係が認められる。茅ヶ岳地域の上ノ原遺跡で1点出土しているだけで、駒ヶ岳地域や御動使地域、甲斐市では見られない。「長」は御動使地域の鉄物師屋遺跡から10点出土しており、茅ヶ岳地域や甲斐市では見られないが、他は散

見する。「女」は茅ヶ岳地域の下大内遺跡で18点と集中しており、八ヶ岳地域で1遺跡、駒ヶ岳地域で2遺跡2点、御動使地域で1遺跡1点がある。「生」は駒ヶ岳地域の宮間田遺跡から20点出土し、藤井平の宮ノ前遺跡から5点、その他は茅ヶ岳地域で3遺跡3点、御動使地域で1遺跡1点である。「方」は宮ノ前遺跡から24点が出土し、八ヶ岳地域に2遺跡4点、茅ヶ岳地域に1遺跡1点、駒ヶ岳地域に1遺跡1点が分布する。「吉」は宮ノ前遺跡などから5点が出土し、八ヶ岳地域では3遺跡5点、茅ヶ岳地域では1遺跡2点がある。「子」は宮ノ前遺跡と後田遺跡から7点ずつ、他は八ヶ岳地域で2遺跡2点、茅ヶ岳地域で1遺跡1点が出土している。「人」は梅之木遺跡から11点が出土し、藤井平の宮ノ前遺跡から2点、御動使地域で1遺跡1点、甲斐市で2遺跡2点が出土している。「又」は御動使地域の鉄物師屋遺跡から13点、メ木遺跡5点があり、藤井平の宮ノ前遺跡1点、茅ヶ岳地域の梅之木遺跡2点である。「矢」は宮間田遺跡12点、茅ヶ岳地域の梅之木遺跡6点、甲斐市の金の尾遺跡1点である。「国」は梅之木遺跡に22点あり、藤井平の後田遺跡から2点が出土している。この関係を地域別に第7表とした。

これらの崩壊土器と出土遺跡の関係は、数が多い遺跡から少ない遺跡に伝播したと想定した場合、人の動きも想定しても良いことになるが、出土土器の年代を検討する以下の工程を経る必要があるだろう。なお、単独遺跡で多数の同一文字を出土した例も、第6表に合わせて掲載した。次に、崩壊土器の年代を加味してその関係を見ていきたい。

4 墨書き土器の年代とネットワーク

共通する文字の分布傾向には次の3種類がある。

- i 1遺跡に出土数の大多数が集中し、他の遺跡はその半数か1~3点程度の「大・田・千・真・上・女・生・長・又・万・矢・国」など
- ii 全体に点数が少なく、各遺跡とともに1~4・5点の出土で「本・十・中・主・吉・南・廣・高・八・九・正」など
- iii 1遺跡にしか出土しないもの、「移・宅・梶・介・千村・小万・長・氏」など

iの場合が多數の点数が出土する遺跡から搬出されたと考えられ、iiの場合は提点となるような遺跡がまだ発見されていないか、巨麻郡の外に主体があると考えられる。iiiは集団の主体がその遺跡にとどまり、移動していないか、その遺跡の特殊な性格を反映しているものと考えられる。

① 共通する文字の分布

そこで、第6表の一覧表で取り上げた15点の主要な同一墨書き文字の上器年代から集落間の関係を調べると、藤井平地域から八ヶ岳山麓へ展開するものは8文字「上・万・本・田・長・宅・山・中・」であり、「上・長・宅・中」は移動後に数的に増加している。同じく藤井平地域から御動使

同一墨书文字共有墨迹

第7表 出土量による墨書分布

八ヶ岳地域

墨書	八ヶ岳地域	茅ヶ岳地域	駒ヶ岳地域	塩川・藤井平地域	御動使地域	甲斐市地域
千	龍角西 23 + 12	1	10	1	0	2
立	龍角西 11 + 1	0	0	1	1	0
上	青木北 22 + 3	1	0	17	0	0
計	72	2	10	19	1	2

茅ヶ岳地域

墨書	八ヶ岳地域	茅ヶ岳地域	駒ヶ岳地域	塩川・藤井平地域	御動使地域	甲斐市地域
十	3 梅之木 4		3	4	0	0
田	4 梅之木 33		1	19	0	3
真	10 梅之木 36 + 1		0	1	1	0
人	0 梅之木 11		0	2	1	2
国	0 梅之木 22 + 1		0	2	0	0
女	1 下大内 18 + 1		2	0	1	0
計	18	127	6	28	3	5

駒ヶ岳地域

墨書	八ヶ岳地域	茅ヶ岳地域	駒ヶ岳地域	塩川・藤井平地域	御動使地域	甲斐市地域
生	0	3 宮間田 20		5	1	0
矢	0	6 宮間田 12		0	1	1
木	6	2 旧皆原小 8 + 1		0	3	0
東	3	1 旧皆原小 4		1	0	0
計	9	12	45	6	5	1

塩川・藤井平地域

墨書	八ヶ岳地域	茅ヶ岳地域	駒ヶ岳地域	塩川・藤井平地域	御動使地域	甲斐市地域
山	8	5	0	宮ノ前 6 + 3	0	0
木	2	0	1	宮ノ前 11 + 2	1	1
主	5	3	2	宮ノ前 4	1	0
方	4	1	1	宮ノ前 25	0	0
吉	5	2	0	宮ノ前 5	0	0
子	2	1	0	宮ノ前 7 + 後田 7	0	0
計	26	12	4	70	2	1

御動使地域

墨書	八ヶ岳地域	茅ヶ岳地域	駒ヶ岳地域	塩川・藤井平地域	御動使地域	甲斐市地域
大	13	9	2	5	川上道下 12	0
長	5	0	1	3	鍛物師屋 10 + 1	0
又	0	0	0	4	鍛物師屋 13 + 9	0
計	18	9	3	12	45	0

地域へ展開するのは「木・又・長・中」の4点で、「又・長」は量的にも発展的な進出を行っている。藤井平地域から駒ヶ岳地域に広がるのは「万・木・田・長・主・中」の6文字であるが、いずれも1点～2点程度で定着や発展は見られない。次に、藤井平地域から茅ヶ岳地域へ展開しているのは「上・万・田・主・山・中」の6点であるが、「H」が33点と圧倒的な数となっているのが目立つ。そのほかは1～3点で強いつながりは見えない。同じく藤井平地域と甲斐市地域のつながりであるが、「木・中」のみで親密な関係を示すものは見られない。このことから、藤井平地域は主として八ヶ岳地域と結びつきが強いことがわかる。

八ヶ岳地域から他地域へ発展したと考えられるのは「真」である。これは茅ヶ岳地域で37点が発見されているが、藤井平や御動使地域にはそれぞれ1点が見られるに過ぎない。また、「大」は甲斐市地域を除くすべての地域から伝播した可能性がある点では特異な文字である。

駒ヶ岳地域にその源を置くのは「千・矢・本」である。これらは藤井平地域と関係しないことを最大の特徴としている。「千・本」は八ヶ岳地域と関係が強く「千」は35点、「本」は6点の出上がり、「矢」は八ヶ岳地域を跨いで茅ヶ岳地域から同筆と思われる文字が出土し、両者の強い関係を示している。

茅ヶ岳地域から発信している「女」は、やはり藤井平地域と無関係で、八ヶ岳地域や御動使川地域で各1点ずつ、駒ヶ岳地域で2点が出土しているが、密接な関係とは言いたい。

それでは、各文字について少し詳細に観察していきたい。
(第3図~第12図)

「上」(第3図)は青木北遺跡22点、宮ノ前遺跡群17点が主要なもので、青木北遺跡の墨書き上器は9世紀末~10世紀中期前半の上師器環・内面黒色土器环に記されたもので、連筆なものは少ない。宮ノ前3遺跡の上師器は9世紀後半~末を中心としたもので、墨書きは2画の頃がやや左に傾く癖を持つ。年代からは宮ノ前遺跡群~青木北遺跡の影響が考えられる。

「万」(第4図)は宮ノ前遺跡から24点が出土しており、10世紀初頭を跨ぐ時期の遺物を中心とする。「万」の3画が2画からつなげて書かれるものと、1画につながるものとあるが、同一器種に2種類の文字が見られることから、両者は意識して書き分けられない。八ヶ岳山麓の石上り遺跡は「万千」が2点、「万」が2点あり、ここでも「万」の文字は2種類が見られる。青木遺跡の「四方」は「文字を作成したとの考え方」が示されている。土器の年代によって藤井平地域から八ヶ岳山麓へ広がったことは想定できる。

「木」(第4図)は宮ノ前遺跡から11点が出土しているが、9世紀前半の上師器環蓋や皿に書かれたものが多く、10世紀のものは底部外側に大きめに書かれている。この他宮田遺跡や柳坪遺跡群、甲斐市松ノ尾遺跡から1点ずつが出土している。年代的には宮ノ前遺跡以外は9世紀末に近い年代であるから、宮田遺跡から周辺地域へと拡散したと考えられる。

「田」(第5図)は梅之木遺跡33点が主体で、藤井平の宮ノ前遺跡群19点が続く。「田」の墨書きは田畠の田であるとともに、古代の初期では皇室や豪族の屯倉を管理するための「田舎」「田部」が置かれたことを示すことも考えられ、更に奈良・平安時代では屯倉・庄園の管理を行なう「田令」や、税を徴収するための「田所」がおかれたので、この場所や関係者を表すのも考えられる。宮ノ前遺跡群の墨書き「田」は主として9世紀代のもので、「口」が楷書のものと草書風の2種があり、草書風のものは2画のねが強い。梅之木遺跡は10世紀のものが主で、「田」の字は四角張って稚拙な文字がある。宮ノ前遺跡から梅之木遺跡への伝播や集団移動を想定することができる。

「又」(第6図)は鉢物師屋遺跡13点が最大数であるが縦刻が多いので手筆は明らかではない。この遺跡の文字の特徴は1画が山形の曲線を描いていることである。あたかも針金を曲げて交差させたような記号とも見える。9世紀後半から10世紀初頭段階のものである。しかし、年代的に古いのは宮ノ前遺跡で、8世紀後半代の上師器と須恵器甕に縦刻文字があるので、ここが発信源であろう。鉢物師屋遺跡に近接する川又道・遺跡では、時期や文字が酷似している。メ木遺跡では1画が直線的であり、土器の時期も

9世紀中葉段階で古いことから、御動使扇状地ではメ木遺跡から周辺の2遺跡に拡散する可能性がある。

「長」(第7図)は御動使扇状地の鉢物師屋遺跡が10点で最大数であり、書き慣れた手筆のものがほとんどであるが、5画目が左に長く、右肩上がりの特徴や、6画~8画が1つ1つ丁寧に描かれているものと連続しているものがある。大きめは右肩上がりと下がりの2種に分かれる。年代は9世紀末~10世紀前半のものが多い。藤井平の宮ノ前遺跡は達筆で右肩上がりの特徴を持つ9世紀前半代のものである。八ヶ岳山麓の紹屋遺跡は9世紀後半から10世紀前半で、連筆な文字である。そして特徴を探せば、2画と6画の縦線が直線にならないことであろう。年代からは宮ノ前遺跡からその他の遺跡に拡散したことになる。

「主」(第7図)は8世紀末から9世紀前半に宮ノ前遺跡に出現し、9世紀前半代には八ヶ岳山麓の豆生田第3遺跡、9世紀中葉段階には八ヶ岳山麓の柳坪遺跡などに広がり、ほぼ同時期か9世紀後半には茅ヶ岳山麓の上ノ原遺跡、駒ヶ岳山麓の宮間田遺跡などに広がっている。「主」の第2画が点ではなく横棒に書かれる特徴にしており、ほとんどがこれを踏襲している。

「山」(第8図)は8世紀末から9世紀初頭段階に宮ノ前遺跡で出現し、そこから茅ヶ岳山麓の梅之木遺跡・村之内II遺跡へ、9世紀後半から10世紀に広がったことが上器年代で観察される。八ヶ岳山麓の柳坪遺跡群や紹屋遺跡も10世紀にはいる年代である。

「中」(第8図)は藤井平地域の宮ノ前遺跡群から4点が出土している。宮ノ前第3遺跡の須恵器環が9世紀中葉段階のもので、他は土師器の底部に小振りの文字で書かれている。この文字サイズからも比較的古い墨書きの可能性がある。これは甲斐市地域の松ノ尾遺跡も同様であり、広い底部の中央に小振りな文字で書かれているので、おそらく9世紀前半~中葉の土師器であろう。宮間田遺跡の堀堤は削り出し高台を持つ土師器環であり、9世紀中葉~後半でも早い時期と思う。八ヶ岳山麓の寺所遺跡や石原田北遺跡や梅之木遺跡は10世紀前半にはいるもので、藤井平地域から八ヶ岳地域と茅ヶ岳地域に拡散したことが分かる。

「真」(第9図)は梅之木遺跡33点を中心、柳坪遺跡群に7点が分布する。梅之木遺跡の「真」は10世紀代の土師器環に記されたものが主体で、文字は正確な楷書のものではなく画数も形も「真」の文字を模倣したものである。柳坪遺跡は9世紀末から10世紀の上師器に書かれたもので、これも楷書を真似た文字であるが、梅之木遺跡の墨書きとは大きく異なるので、同一集団ではないだろう。土師器の年代から柳坪遺跡・梅之木遺跡への影響が考えられる。

次に、「千」(第10図)は八ヶ岳山麓の龍丘西遺跡23点が最大値で同じ八ヶ岳山麓の湯沢遺跡の10点が続き、次は駒ヶ岳山麓の古御所東遺跡8点である。八ヶ岳山麓と駒ヶ岳山麓の強い結びつきを表しているこの文字は、駒ヶ岳山麓の宮間田遺跡出土「千」「千村」10点と強い繋がりがあるかもしれない。宮間田遺跡は「牧」墨書きが出土した

ことから、旧来より推定されている御牧「真衣野牧」に関わる遺跡と目されており、湯沢遺跡は攝立柱建物群や欄列の存在から牧監などの役所的な施設と見られること（末木健 1983）などから、八ヶ岳山麓の龍角西遺跡も牧と関連があると想定することもできる。

この「千」の文字について遺跡毎に見ていくと、龍角西遺跡墨書の第1角は右上から左斜めに払い、第2画は左から右へや右肩上がりに水平に引かれ、第3画は上から下へ力を抜いて書かれている筆使いである。第1画と第3画は離れているが、文字を書き慣れた人物によることが観察される。遺物の年代は10世紀前半である。湯沢遺跡の「千」は、第2画がなりに左右が下がり、第1画と3画が接しているが、この文字も書き慣れた人物によることがいえる。時期は9世紀後半～10世紀前半である。前2者に比べ古御所東の「千」は大きく異なる。墨書の「千」は第1画が水平に書かれるものがあり「丁」に近い文字となっている。また、第3画が左にはねるものがある。刻書「千」は数字の「4」に見えるが、「千」と見て良いと思う。古御所東遺跡は9世紀後半から10世紀にまたがる遺跡である。これから、「千」の文字は共有するが、同一集団が分散しているというよりは、かつての母体が同じでも、相応な時間の経過があり古御所東遺跡から八ヶ岳山麓に移り、湯沢遺跡や龍角西遺跡はそれぞれ独立した存在となっていると思われる。では、その母体はどこかといえば、駒ヶ岳山麓の宮間田遺跡が注視される。宮間田遺跡の「千」「千村」は9世紀前半から見られ、筆法は筆差で湯沢遺跡に類似するが、年代差があり同一手になるものではない。この年代から宮間田遺跡→湯沢・石上り・古御所東遺跡→龍角西遺跡への変遷が想定されよう。

「矢」(第11図)は駒ヶ岳山麓の宮間田遺跡12点と茅ヶ岳山麓の梅之木遺跡から6点が出土している。宮間田遺跡の出土品は9世紀後半に属し、線刻文字と墨書き文字と両者を重ねた3者が存在する。1画と2画を連続して書き、その下にのびと大を書く筆法は筆差である。梅之木遺跡の文字は9世紀後半から10世紀にまたがるもので、墨書きと墨書きに刻書を重ねた2種類がある。墨書きには稚拙な文字がある。墨書きと刻書きを重ねる手法は、両遺跡の緊密な関係を示しているが、筆跡が類似しているので書き手は同一人物ではなかろうか。おそらく宮間田遺跡から梅之木遺跡へとの移動があったと推定される。この他甲斐市の中尾遺跡や御動使地域の角力場2遺跡からも1点ずつ出土している。

「本」(第11図)は旧菅原小遺跡から8点が出土しており、「大」と「十」を重ねて「本」としたもので、接しているものと離れているものなど、手書きは2～3種に分かれるが、年代は9世紀末～10世紀初頭のものである。近隣の古御所東遺跡の「本」は10世紀のもので、「大」と「十」が接している。八ヶ岳山麓の寺所遺跡1点は大が大きく開くもので、10世紀にはいる。城下遺跡2点は10世紀末～11世紀であり、梅之木遺跡の2点は「本」の「十」の縦の線

が長く書かれており、他と区別される。この年代は10世紀前半である。梅之木遺跡の「本」も人の両足が長く、十の縦は短い。年代は10世紀のものである。駒ヶ岳山麓の旧菅原小遺跡が古く、八ヶ岳山麓・茅ヶ岳山麓・御動使扇状地へと広がっている。

「人」(第12図)は御動使扇状地の川上道下遺跡が12点で最大出土数を持つが、「大」と明確に記されたもの他に「又」「兀」などの文字もある。「大」では2画が3画よりも長い特徴とし、土器の年代は9世紀中頃～後半である。駒ヶ岳山麓の所當1遺跡からは2点が出土し、これは須恵器杯に記されており1点は第2画が長い川上道下遺跡と同じ特徴を持つが、残り1点は不明。年代は9世紀前半から中頃と見て良い。茅ヶ岳山麓の上ノ原遺跡からは6点が出土し、第3画が長く横に引かれることが多い。年代は9世紀後半に属される。八ヶ岳山麓では原田遺跡から4点が出土している。10世紀の上師器杯で字が太くぼつとして特徴を持つ。宮ノ前遺跡からは須恵器杯に1点があり、線刻であるがバランスの良い字で、その年代は9世紀中葉である。八ヶ岳山麓が年代的には新しく、その他の地域はほぼ同時期であるものの、それぞれ筆が異なる。

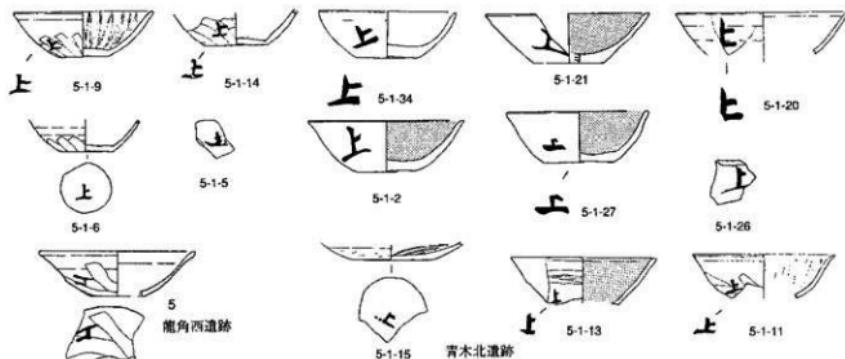
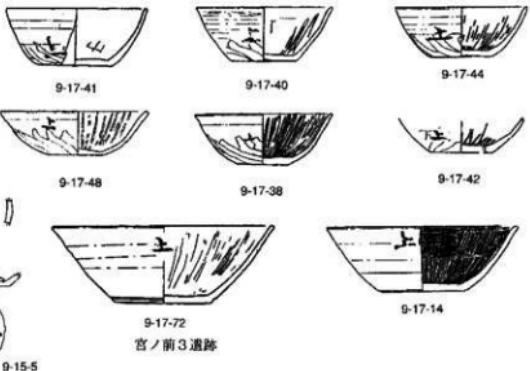
「女」(第12図)は茅ヶ岳山麓の下大内遺跡18点を最高に梅之木遺跡1点、八ヶ岳山麓の東久保遺跡1点、駒ヶ岳山麓の雜木遺跡1点、旧菅原小遺跡1点である。下大内遺跡の「女」文字には2種類があり、第1画が「くの字」に明確に折れるものと、曲線を描くものがあり、後者は梅之木遺跡や旧菅原小遺跡と類似する。雜木遺跡の線刻文は変形しており「女」とは読みがたく、旧菅原小遺跡の文字は1画目が「くの字」に書かれて、「文」の可能性が高い無骨な文字である。東久保遺跡の「女」は旧菅原小遺跡の文字と同じく、1画が「くの字」を呈さず、1画から3画が1点で交差する特徴を持つ。同じ遺跡に「丈」があり、これの変形かもしれない。下大内遺跡は9世紀末から10世紀、梅之木遺跡10世紀。東久保遺跡は10世紀である。茅ヶ岳山麓の下大内遺跡が中心集落となる。

なお、この他、「生」は宮間田遺跡が20点で最大であるが、草書風のくずし字が特徴である。続く宮ノ前遺跡の文字は楷書であり、集団の関連性は認められない。「人」は梅之木遺跡から11点が出土しており、「人」も2点ほどある。宮ノ前遺跡に「人」は2点あるが明確ではないので、遺跡の関連は不明である。

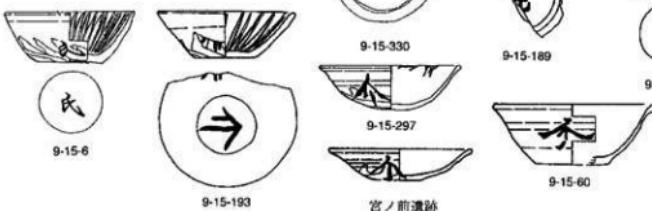
以上のことから同一文字が書かれた土器の年代を遺跡毎に調べていくと、必ずしも出土量が多い遺跡から少ない遺跡へと伝播したのではないことが知られる。また、古い時期のものから新しい時期のものに伝播した可能性は高いものの、「矢」などの明確なものを除き、同時期でない限り手書きなどから模倣を直接的に証明することは困難である。

なお、巨麻郡北部の各地域の集落とのネットワークが最も強いのは、並崎市の宮ノ前遺跡であることが明らかになった。次に八ヶ岳山麓の集落が周辺地域の集落と結びつきが強く、駒ヶ岳地域からの情報発信も、茅ヶ岳地域の發

【上】
駒ヶ岳地域 八ヶ岳地域 茅ヶ岳地域
御勒使地域 藤井平地域 甲斐市地域

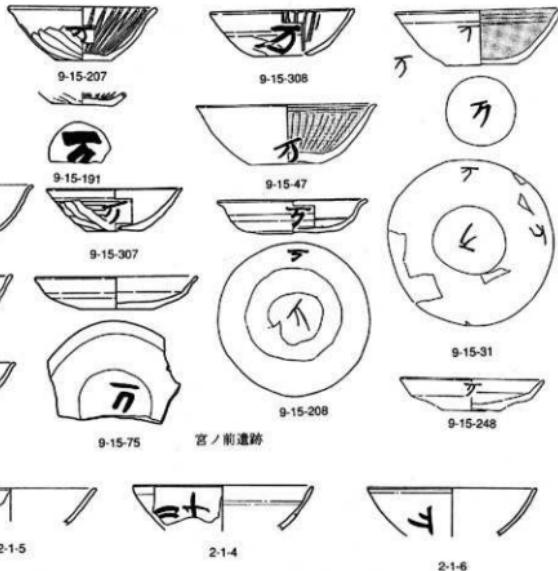


【宅・家・氏・介】
駒ヶ岳地域 八ヶ岳地域 茅ヶ岳地域
御勒使地域 宮ノ前遺跡 藤井平地域 甲斐市地域



第3図 墨書文字の展開1

【万】
 駒ヶ岳地域 | 八ヶ岳地域 | 茅ヶ岳地域
 御勤使地域 | 藤井平地域 | 甲斐市地域
 1 4 1
 25

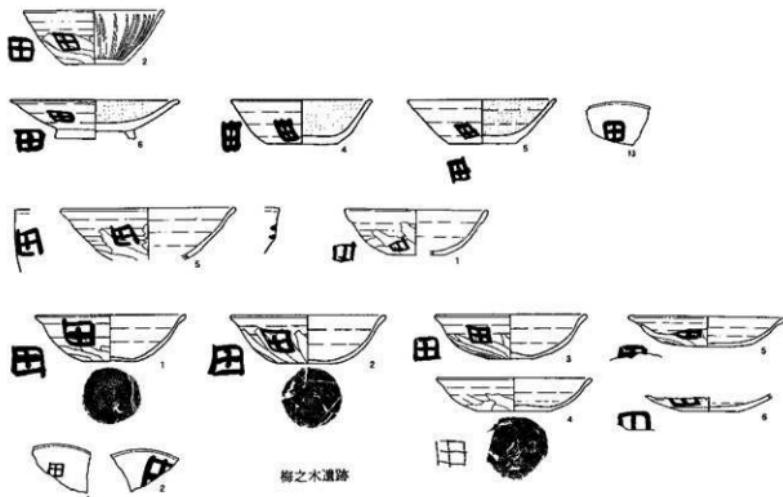


宮ノ前遺跡

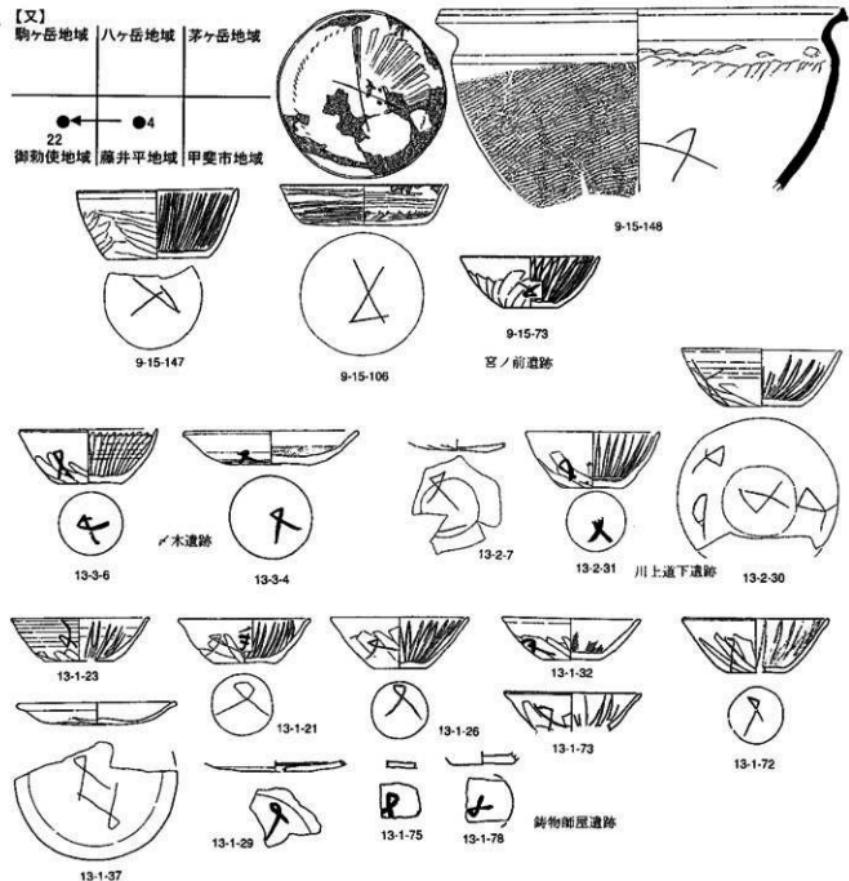


第4図 墨書文字の展開2

【田】
駒ヶ岳地域 ハケ岳地域 茅ヶ岳地域
1 4 33
19
御勅使地域 藤井平地域 甲斐市地域



第5図 墨書文字の展開3



第6図 墓書文字の展開4

信から比べると、年代的には新しいが強い関係を見ることができよう。茅ヶ岳山麓の集落の成立は比較的遅かったのか、他地域への影響はあまり強くない。

② 1遺跡からしか出土しない墨書き器（第3・13回）

1遺跡から出土する1文字の墨書き土器は157点を最大として、最小は1遺跡1点で、後者の例は多数存在するが、ここでは1遺跡から出土する同一文字が5点以上のものを取りあげる。3-①でも述べたごとく、この墨書き文字が集落の特徴を示している可能性があるので、第6表下段の文字についてその意味や年代、広がりなどを検討したい。

寺所遺跡出土の「侈」は音読みで「シ・イ」であるが、「侈」

の文字は草書で書かれており「福」「側」などとも読めないことはない。釋史では「侈」と読んでいる。この文字の意味は「①おごる ほごる 他をあなどり尊大にする ②おおい 大きい ひろい はる ③ほしいまま みだら度をこえる 節度がない ④ひらく はなれる しまりがない」(白川静 2001)などの意味がある。吉祥句として用いられたとすれば②の意味が使われたのであろう。寺所遺跡は八ヶ岳南面山麓のほぼ中央に位置しており、その視界を遮るものがない地理的な要素が「侈」の文字となったものであろうか。なお、これを山下孝司氏は「福」と読んでおり(山下孝司 1994)、これを吉祥句とみている。

次に、宮ノ前遺跡から出土する「宅・介」などである（第3回下段）

「宅」は宮ノ前遺跡から24点が出土している。古代の「宅」はどのような施設であろうか。「宅」については、「越前国雜物納取帳」「村部豊島解」（『大日本古文書』4-76）に、「介宅・掾宅・大目宅」という守を除く国司四等官の「宅」と、「次田前・帆船・阿刀館」など史生の「館」が記されている。守以下国司四等官の公麻糸は、職田として経営されていた現地の管理・経営施設である「宅」に納められていたので、施設名は「介宅・掾宅・大目宅」として特定の個人名は記されなかつたといわれる。

なお、郡司の經營拠点である居宅も「殿」「宅」「家」などの墨書きが出土することが多いといわれ、郡司は郡内各所の「宅」を拠点に大規模な經營を行っていたと考えられる（田中広明 2003）。このようなことから、宮ノ前遺跡が守以下の国司や郡司にかかる施設を示していた可能性が高く、その関連を示すものとして「家」「介」「戸殿」「寺」などの墨書きを示すことができよう。

なお、「宅」は宮ノ前Ⅲ期（8世紀後半の中頃）～Ⅳ期（9世紀末～10世紀初頭にまたがる時期）に出土例が多く、「介」はⅣ期～Ⅹ期（10世紀後半）で見られるから、先の例から想定すると都司の支配する「宅」から国司の「介」の影響が強い「宅」に変わった可能性も考えられる。しかしながら、甲斐国に「介」が設置されたのは貞觀7年（865）5月16日の詔により、正式決定されたとのことであるから、遺跡から発見される墨書きは「介」の職の設置以降となり、年代的にも問題はないのではなかろうか。

「介」（第3図）は宮ノ前遺跡から10点が出土している。「介」は国司の次官の職名で、六位相当の官である。職掌は「守」と同じことで、守がないときは介が国の吏務を総裁した。遺跡の規模や瓦塔の出土、「宅・介・氏」などの特異な墨書きの出土などから宮ノ前遺跡は巨麻郡の中心的な集落と考えられるので、「宅」の項でも述べたように、都司のみならず国司の影響もあったことが想定され、①近隣の蔚崎市中田小学校遺跡から出土した「岩井」の墨書きが現在の地名「岩井」の基になった可能性や、②正倉院洞窟墨書き銘文にある奈良時代の国司「葛井述忠文」とのかかわりも想定されるなど、今後は周辺も含め注目される遺跡である。⁷⁶⁾

「梶」（第13図）は梅之木遺跡から22点が出土している。「梶」が「鍛冶」と結びついていたかどうか明らかではないが、梅之木遺跡の鉄滓や鍛冶構造が出土した住居跡の分布と重ね合わせると、「梶」と「鉄滓」「羽口」「鍛冶構造」などと重なる遺構が多い状況を見て取れる（第13図）。「梶」は本来樹木の種類であるが、船の舵や方向舵の言葉に使われることが多く、この遺跡では特別に「梶」が「かじ」→「鍛冶（かぬち・かじ）」へと転化されたものかもしれない。

「千村」は甲斐駒ヶ岳山麓の宮間田遺跡から出土しているが、この他に「千」の墨書きも出土している。これらは宮間田遺跡のⅠ期（9世紀第3四半期）Ⅱ期（9世紀第4四

半期）の出土が多い。この他同時に「□村」もあり、この集落の初期の性格を表すものではないかと、発掘担当者の平野修氏は見ている（平野修 1989）。この論文の中で、さらに平野氏は「宮間田遺跡にみられる「千村」・「□村」の墨書き土器については、吉田孝氏が指摘するように、この墨書き土器をもった集団が本貫を離れて新たなる開拓地に臨み、開拓集団として自らの「村」をより強く意識した集団であって、これらの意識が強く働き墨書き土器という形で現れたものと考えたい。」としている。なお、千は数が多いことを意味している場合があるので、宮間田遺跡の関係する集落の多さや住居の多さを示している可能性もある。

「小万」は御動使扇状地の〆木遺跡から6点が出土しているが、「小」は「大と小」が対になっており、官職の位階にも見られるなど「大」との対の可能性があるだろう。隣接する川上道下遺跡から「人」12点が出土しており、「大」の出土量は郡下で最大である。両集落の規模の比較や政治的な立場を示した可能性もある。なお、「小千」も1点出土しており、「千」「万」は数の多さを表しているものかもしれない。

「長」は守所遺跡から5点が出土している。「長」は北東方向をしめた鬼門のことであり、鬼門避けのための墨書きであろうか。

「氏」は藤井平の宮ノ前遺跡から5点が出土している。「氏」は親族集団及びその集団名である。先の「宅・介」とともに、集落の性格を反映している可能性がある。氏名を記さなかったのは、これだけで充分に集落内部や地域で通じたためであろう。

まとめ

大量的墨書き土器から同一文字に絞って、ネットワークを想定する試みをおこなってきたが、十分な成果が得られたとはとはいえない。しかし、蔚崎市の宮ノ前遺跡群の奈良～平安時代に果たした役割の一端を垣間見ることができたと考えられるので、最後にその得られた成果を述べ、まとめとしておきたい。

宮ノ前遺跡群は、蔚崎市の宮ノ前遺跡と宮ノ前第2遺跡、同第3遺跡を合わせたものを表現しているが、特にその中心を宮ノ前遺跡に置くことができよう。宮ノ前遺跡は塙川の低位段丘上に位置し、417軒の奈良～平安時代の住居跡と、攝立柱建物54棟、溝33条などが発見されている。この集落は8世紀初頭に成立し、11世紀後半まで継続するが、そのピークは9世紀後半～10世紀前半に置かれる。出土遺物は土師器や須恵器の他に、円面鏡・三彩陶器などがあることから官衙的な要素が認められ、「集落の初期段階において豪族の邸宅か郷家や官衙に付属する「越」的な施設の存在」が想定されている（平野修 1998）。また、先にも述べているように、多数の墨書き土器があり、この遺跡群が巨麻郡の八ヶ岳山麓や駒ヶ岳山麓、茅ヶ岳山麓の開発に強く結びついていることが、旧来より想定されていた。そこで、各地域の主要な遺跡の墨書き土器と同一文字が示す

具体的なネットワークを調べた結果が次のとおりである。

まず、同「墨書き器の年代と分布」とから、藤井平地域から発信した墨書きは「上・万・木・田・又・長・主・山・中・大」などがあり、このうちハケ岳地域へは「上・万・木・長・主・山・中・大」で、茅ヶ岳地域へは「田・主・山・中・」がある。駒ヶ岳地域からは「矢・本」が発信され、「矢」は主として茅ヶ岳地域へ伝わり、僅かに御動使地域・甲斐市地域へと広がっている。「本」はハケ岳・茅ヶ岳・御動使地域へと発信している。ハケ岳地域からは「真・千」が発信され、「真」は主として茅ヶ岳地域へ広がり、「千」は主として駒ヶ岳地域へ広がっている。また、茅ヶ岳地域からは「女」がハケ岳地域と御動使地域に僅かに発信されている。

このように見えてくると藤井平地域と駒ヶ岳地域からの発信量が多く、茅ヶ岳地域は「女」「大」を除いて発信することではなく、ほとんどが受け入れのみであることが特徴である。甲斐市地域はまとまった墨書きの出土は少ない。このことから6~7世紀の占領時代では盆地西部の中心的な地域であった甲斐市・荒川流域が、奈良時代にはいとその中心の座を韋崎市の藤井平地域へと移動し、そこを中心に周辺の山麓地域への集落移動や情報発信を行っていた可能性を指摘できよう⁽¹⁰⁾。そのウエイトは、藤井平地域から主としてハケ岳地域への働きかけが多く有り、ついで駒ヶ岳地域、そして限定的に茅ヶ岳地域へ関係していたと思われる。

上記のことから、藤井平地域の宮ノ前遺跡は、奈良平安時代の巨麻郡の中核的な遺跡であることは間違いない。特に宮ノ前遺跡出土の「宅」「介」は重要な意味を持ち、他の遺跡から出土していないことも注目に値する。「宅」が郡司の拠点（郡家・郡衙）を表現することや、国司の職田の管理施設等を示す文字であること。「介」は東国の官衙遺跡一ト野国府跡遺跡・茨城県神野町遺跡（常陸国鹿島郡家跡推定地）等から出土しており、郡家から出土することについては、国司の郡内巡回の際に特定して用いるための施設と見る考え方もある（津野仁 1990）。先に述べたように、甲斐国の「介」の設置は貞觀7年（865）5月16日の詔により正式決定された。遺跡から発見された「介」の墨書き土器の年代が9世紀末~10世紀初頭であり、これは「介」職の設置以降であるから、年代的にも問題はないので、宮ノ前遺跡が郡家などの官衙と関連する可能性の高さが示唆される。

また、宮ノ前遺跡群と梅之木遺跡から出土した「田」の墨書きであるが、これは「田部」「田合」などとの繋がりが考えられる。「田部」「田合」は皇室や有力豪族の屯倉を管理する役所や職業部であり、この人々が藤井平地区から茅ヶ岳山麓に展開した可能性があるとすれば、宇多天皇の御院牧から御牧へ編入されたと考えられる「穂坂牧」や、冷泉院領の牧として知られる「小笠原牧」の成立ともかかわるのではないかと思う。

甲斐の御牧には穂坂牧・柏前牧・真衣野牧がおかれて、平

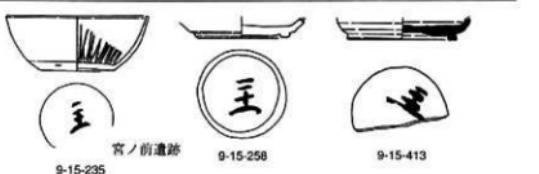
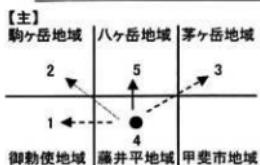
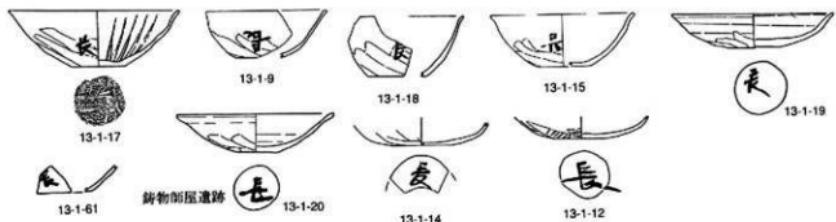
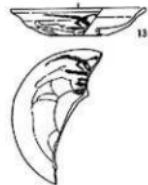
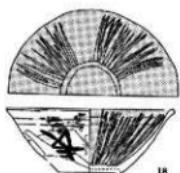
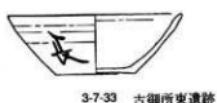
安時代では年間合計60両の馬を朝廷に貢上するための胸章をおこなっていた。この牧の成立が、平安時代に突如として出現したのではなく、天平10年（738）の「駿河国正税帳」に甲斐国より進上する御馬の御領使が通過した記事もあり、また、長慶王邸出土木簡からも8世紀には甲斐国馬司が親王邸で奉仕していたことから、当時の甲斐国内で馬の生産が盛んに行われていたであろうことが分かっている。

平安時代の朝廷に進上する馬は御牧で生産されるが、御牧は甲斐・信濃・武藏・上野の4国に設置されていた。これらの御牧で生産された馬への焼印は、「官」の文字とそれ以外の文字に分けられることが知られており、甲斐の穂坂牧は「栗」で、他の柏前牧と真衣野牧は記録がないが「官」と推定されている。「官」以外の焼き印の牧は、大武天皇4年に全国に置かれた人宝令の牧とその成立が異なるようで、その成立は皇室の牧や「御院」の牧が御牧に編入された経緯があるといわれる。すなわち焼印「栗」から、穂坂牧は宇多天皇の御院牧から御牧に編入されたと考えられるのではないか。また、隣接する後院の牧である「小笠原牧」の存在を考えると、牧を支えるための皇室や院に関係する広大な田畠等の生産用土地が、牧とその周辺に存在したと思われ、それが、「田」墨書き土器の分布と拡散の理由ではなかろうか。以上、「田」の墨書きが穂坂牧や小笠原牧の成立とかかわることを想定した。⁽¹¹⁾

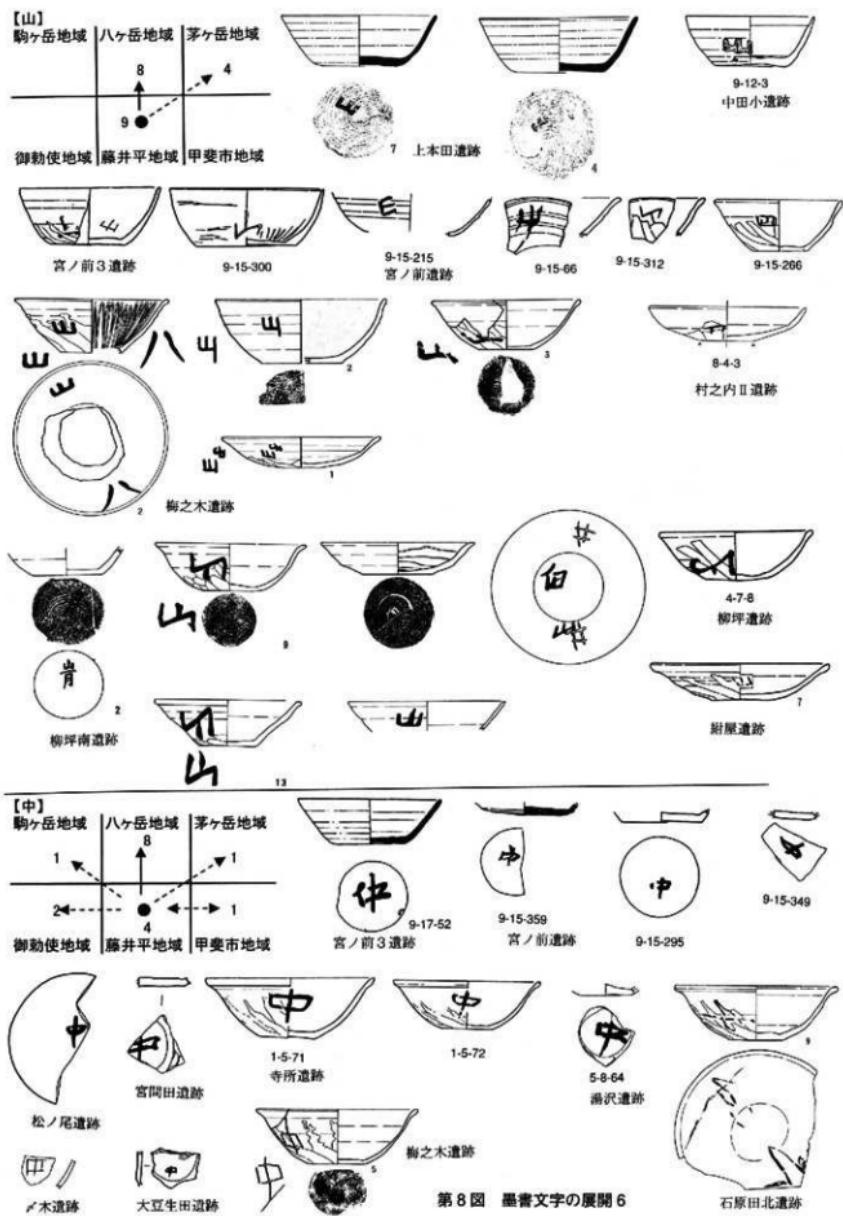
馬や牧に関係して最近注目度を高めてきたのが茅ヶ岳山麓の梅之木遺跡である。この遺跡は平安時代の呪穴住居跡108軒、掘立柱建物28棟、小鍛冶遺構5の遺構があり、土師器・須恵器の他、骨金具・石製腰帯具、皇朝十二錢の1つ「隆平永宝」、馬具等が出土し、200点以上の墨書き・刻書き土器の中には、「日・政・僕」などの文字の他、「刑部々」「刑」など人名にかかる墨書き⁽¹²⁾もあって、遺跡の性格が注目されている。なお、梅之木遺跡から南7kmにある永井原V遺跡では、全長700mに及ぶ溝が発見されており、牧の区画溝という想定もなされている。この遺跡群は小笠原牧の想定地と考えられている。

先に見た墨書き土器も、藤井平地域から多くの文字を受け入れている一方、極めて少ない文字しか周辺に発信していないのも、この地域の受け身的な性格を反映している。また、この遺跡の性格を知る上で興味深い觀察は、佐野隆氏による「甲斐型壺」と「甲斐型壺壺種」の抽出である（佐野 2002）。梅之木遺跡・寺前遺跡・上ノ原遺跡などの茅ヶ岳山麓の遺跡では、壺種が卓越して、典型的な甲斐型土器は50%であるが、他地域では「壺種」が圧倒的に少ないと云う。このような特徴は茅ヶ岳山麓の遺跡が最終的な情報や文化の受け皿として機能していたように思われる。

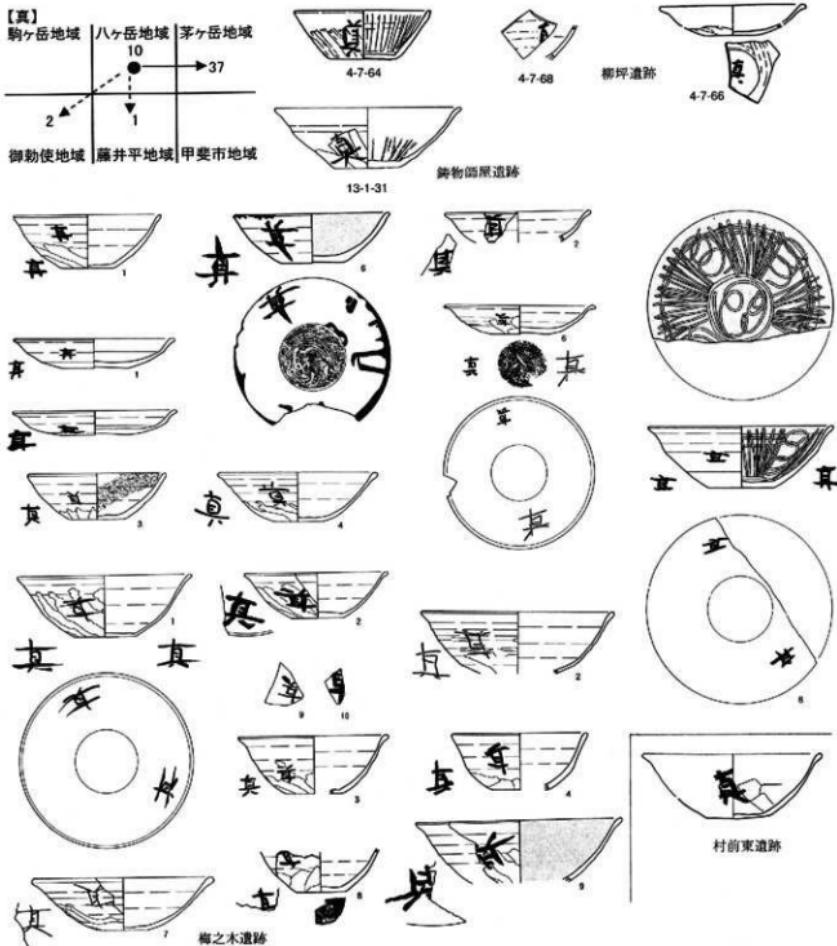
さて、次に巨麻郡での中核的な墨書き土器の存在の一つには、駒ヶ岳地域の宮間田遺跡や古御所東遺跡・山背原小遺跡などがある。宮間田遺跡は「牧」の墨書きの出土によって、御牧の一つである「真衣野牧」関連集落と考えられている。この遺跡は釜井川右岸の低位段丘上にあって、9世紀前半



第7図 墓書文字の展開 5



第8図 墨書き文字の展開 6

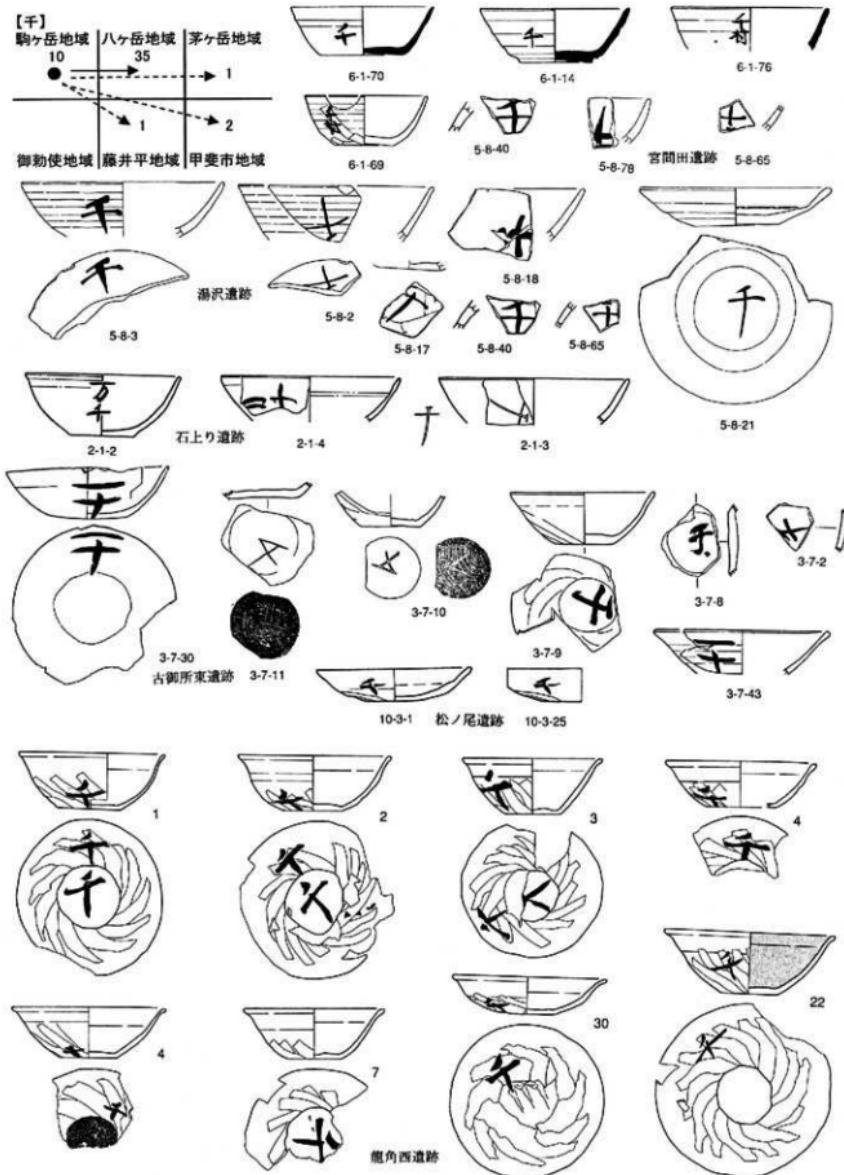


第9図 墓書文字の展開7

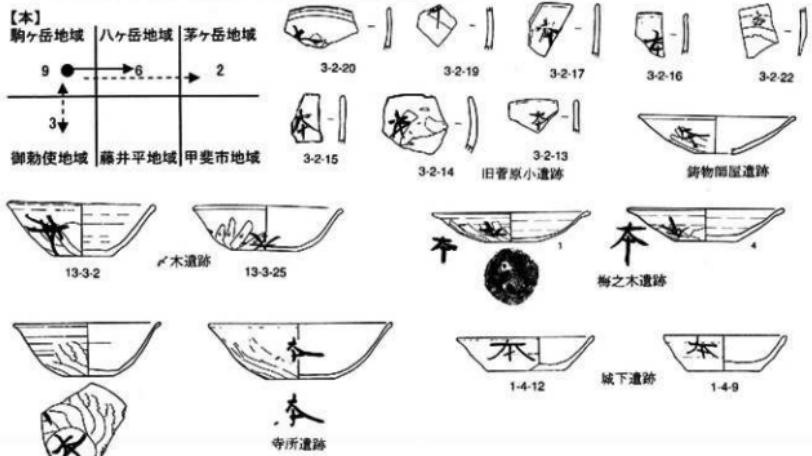
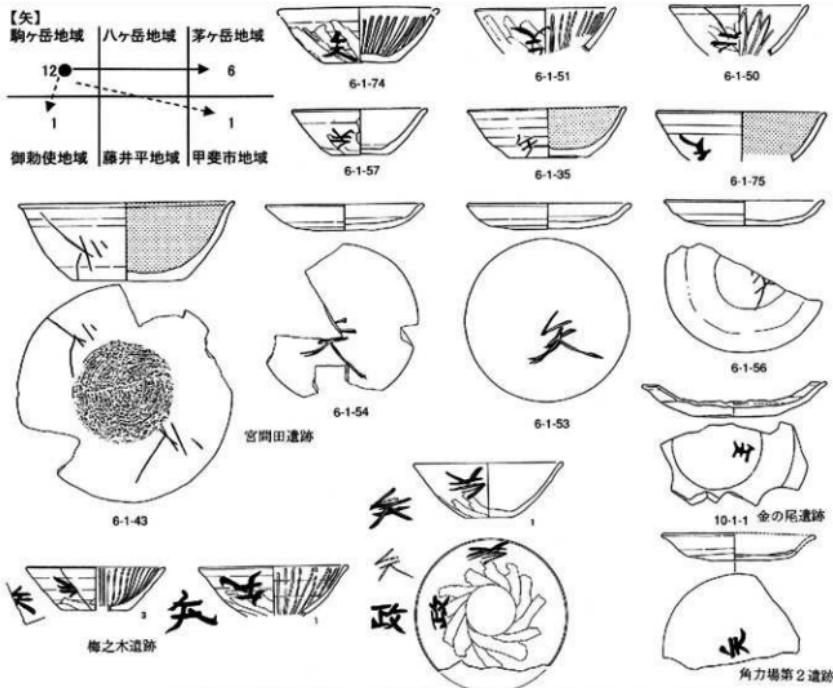
から13世紀ころまでの竪穴住居跡94軒と掘立柱建物45棟や鍛冶造構などもある。出土品には土師器や須恵器の他、帶具が出土している。古御所東遺跡も牧にかかわる遺跡であろう。

宮間田遺跡出土墨書き土器は100点を超えており、特に「矢」は墨書きと線刻文字が重ねて記されており、八ヶ岳地城を飛び越えた宮間田遺跡と梅ノ木遺跡の両遺跡の強い結びつきを示している(平野2004)。この他に駒ヶ岳地

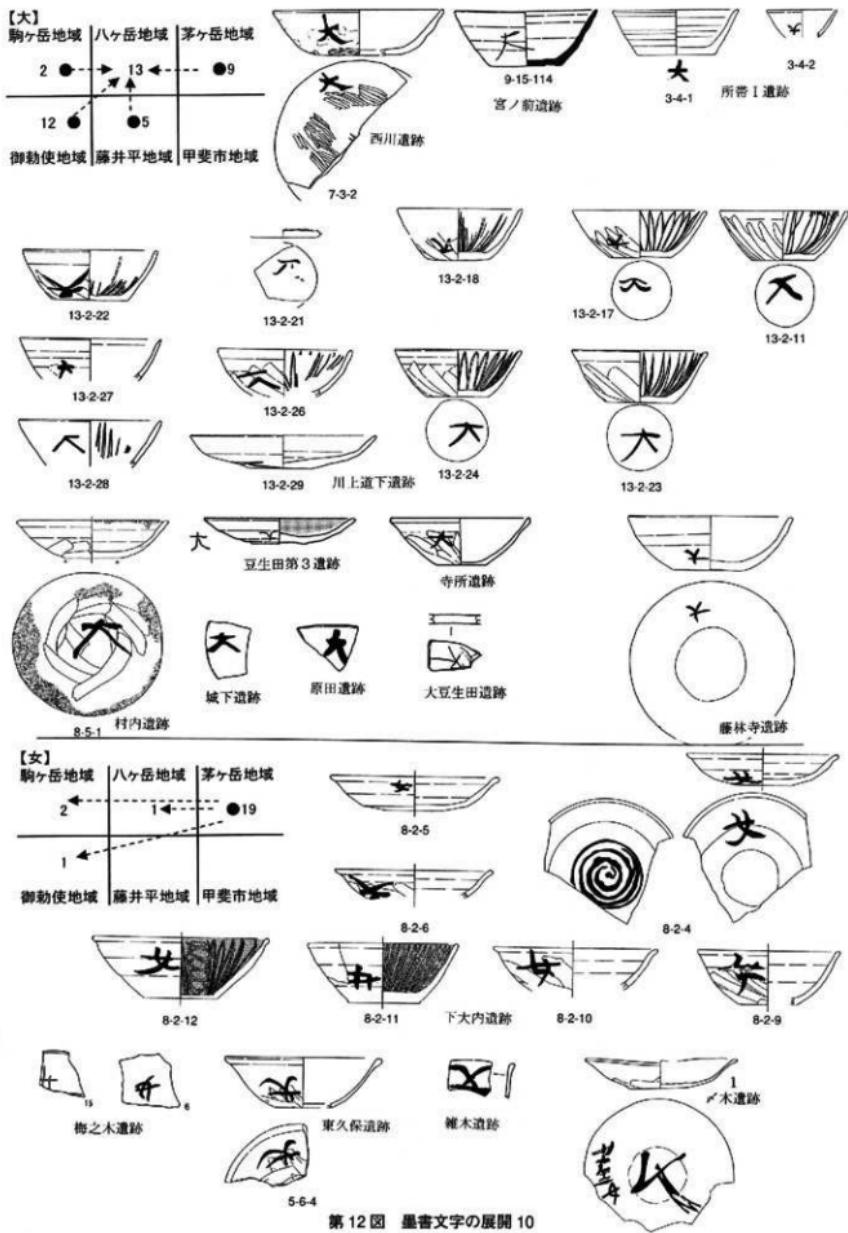
域の旧菅原小遺跡から発信された「本」は八ヶ岳や茅ヶ岳地城を主として、一部には御勤使川地域へと広がっている。駒ヶ岳地城の遺跡は御牧の真衣野牧にかかわる集落が考えられるが、八ヶ岳山麓や茅ヶ岳山麓との関連性だけから見ると、柏前牧や穂坂牧との関係、特に、同じ日に駒ヶ岳を行った柏前牧との関係が想起される。しかし、「本」の墨書き土器の共通性だけでは、八ヶ岳南麓の遺跡が柏前牧と関連し、そのため真衣野牧とも関連すると結論づけるのは、今のと



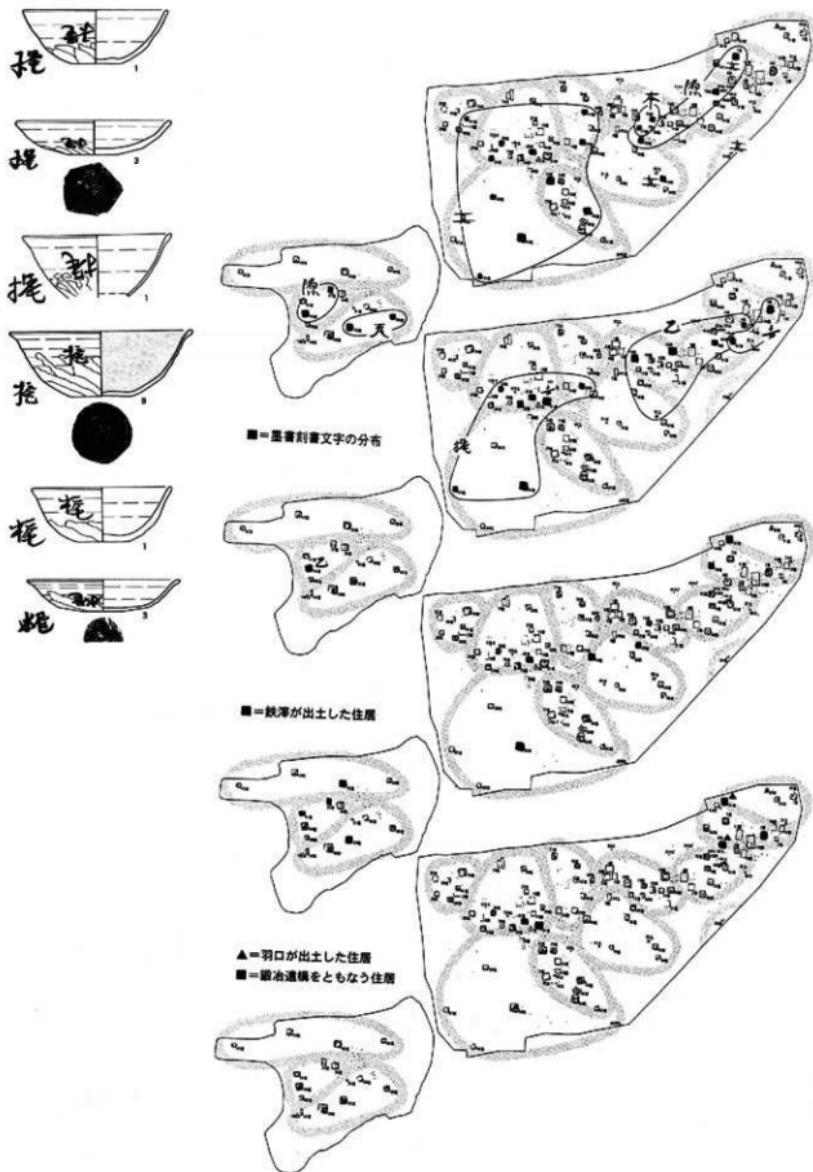
第10図 墨書き文字の展開 8



第 11 図 墓書文字の展開 9



第12図 星書文字の展開 10



第13図 梅之木遺跡の「撫」墨書と「鍛冶」関連遺構・遺物

ころ難しく検討を要するであろう。むしろ、梅之木遺跡などを「柏前牧」関連遺跡とした場合、「矢・本」の2つの墨書きが、真衣野牧と強い結びつきを表すことになるのかもしれないが、これも総合的な分析を経て判断する必要がある。

以上、古代巨麻郡の出土墨書き土器を集成し分類した結果、次のような歴史的背景の一端が浮き上がってきたので、これを列記してまとめたい。

①茅ヶ岳地域は墨書き土器をはじめ様々な情報の受け皿地域である。

②藤井平地域の宮ノ前遺跡は、「宅・介」などの墨書きから、国司の職務管理や郡家の撫点施設が想定される。

③「田」の墨書きが「田部・田令」などにかかるものとすれば、「穗駄牧」が宇多上皇の御院領の牧であった可能性があり、後院の「小笠原牧」との関係も想定できる。

④古閑田遺跡と梅之木遺跡出土の「矢」墨書き土器が、線刻文字と重なる同一手法が両遺跡に見られることから、その親密な関係が想定される。

⑤藤井平地域は八ヶ岳山麓の地域と強い結びつきがあり、次に胸ヶ岳地域、僅かに茅ヶ岳地域とネットワークを持つ。

⑥八ヶ岳や駒ヶ岳、茅ヶ岳地域を発信源とする文字は、いずれも藤井平地域との関係は希薄である。

今回は考古学的な手法による墨書き土器の分析のために、文字の直接的な意味を解明することには重点を置いていないが、ネットワークの存在は一部分ながら想定できたのではないかだろうか。特に、地域間の繋がりや連携はこうした墨書き土器や、甲斐型土器・ロクロ彫形土器・灰釉土器の分布をクロスチェックすることでつかむことができよう。今後はより総合的な見地からのネットワークの構築を検討したい。なお、古代氏族と集落の関係についてはすでに述べたことがある（末木 2005）ので、本論と合わせて参考にしていただきたい。

最後ではあるが、墨書き土器の追加資料を提供していただいた平野修氏には深甚なる謝意を表したい。

註

1 県内関係では下記にあげた参考文献などがある。

2 県史資料編3の掲載数は約3700点、平野修氏追加集成数約1200点で、合計約5000点とした。墨書き土器のデーターは県史資料編掲載分と平野修氏が集計したものを基本として、平成17年3月前後の報告書を集計したが、ここで示したものは県内出土墨書きを全て網羅した集成ではない。

3 同一文字でも「甲」は「十干の「きのえ」」でもあるし、甲斐國の略した「甲」などとも考えられる。「足」は人名にも使われることが多いが、身体の一部でもある。「毛」は「毛人」「えみし」にも使われた可能性もあるが、ここではそれぞれ便宜上の分類をおこなったので、文字へ

の理解不足のために異なる分類枠へ導いているところもある。なお、この他に丸や渦巻き、点や呪術と思われる記号、則天文字などがあるが、煩雑なのでここでは取り扱わなかった。

4 「葛井」墨書き土器は8世紀後半の土器で、正倉院文書の墨書きは東大寺大仏殿開眼供養（752）に使われた技楽面の袋に書かれたものであるから、8世紀中頃のものと考えられる。葛井連惠が甲斐國守として下向していた時が8世紀中葉であり、その國関係の職員としての職位の「宅」がこの辺りに置かれていた想定も可能性がある。なお、「統日本紀」宝亀9年（778）3月10条に見える葛井連道依は「正五位葛井連道依を（中衛）少将とす。勅使少輔・中斐守故の如し」とあり、中斐に直接赴任しない遠任国司であったと考えられているが、先の葛井連惠とのかかわりが、国守任命の1つの背景となつたかもしれない。更に想像を運転するとすれば、墨書きが出土した中田小学校遺跡は、国司の公卿米を生産した職田から、私的所有地へと変化した土地とのかかわりも考えられよう。

5 東国の墨書き土器は8世紀に入って見られるようになり、9世紀から10世紀にピークを迎える。10世紀のうちに急速に減少していく傾向がある。したがって、古代前半の中心地と目される甲斐市地域では墨書きが少ない傾向がある。

6 馬と「田部」とのかかわりでは、「大化改新の際のいわゆる東国國司への詔では、東国に派遣される國司に対し「部内の馬」に乗る権限が与えられている。事後にあって、何人かの國司が派遺先で国造や田部・湯瀬の馬を奪い取ったことが明らかになり、罪状を責められることがあった。」（山梨県史 2004）であることからも、田部が馬の管理に携わっていたこと、更に牛座にかかわっていた可能性もあることが知られる。

なお、櫛坂牧が宇多天皇と関係すると考えられるのは、「政事要略」延喜十年八月十七日、「西宮宮」延喜十八年十七日の穗駄牧の駒奉記事に、馬三匹を宇多天皇に奉る記事があることなどから、もとは宇多天皇（上皇）の皇室牧で、延喜4～10年ごろ御牧に編入されたとの推測がある（大日方克己 1994）。

7 「刑部」の墨書きについては、「本朝文粹」天延2年に「前甲州馬司刑部良秀」の名が見えるので、梅之木遺跡との関係を想定したことがある（末木 2005）。

参考文献

- ・秋山 敬 2003 『甲斐の莊園』甲斐農書5 甲斐新書刊行会
- ・石原田遺跡発掘調査団 2001 『石原田遺跡』Jマート地点
- ・上ノ原遺跡調査団 1999 『上ノ原遺跡』
- ・大日方克己 1994 『古代國家と年中行事』
- ・櫛形町教育委員会 1994 『鎌物師屋遺跡』

- ・高島英之 2000 「古代出土文字資料の研究」 東京堂出版
- ・高根町教育委員会 1984 「東久保遺跡」
- ・櫛形町教育委員会 1987 「ダメ木遺跡」
- ・佐野 隆 2002 「平安時代の巨麻郡における土師器坏の流通—遺跡間の諸関係を分析する手法としての甲斐型亞種の認識と流通に関する基礎的研究」『八ヶ岳考古』平成13年度年報 北巨摩市町村文化財担当者会
- ・白川静 2001 「字通」 平凡社
- ・末木 健 1983 「平安時代集落について」『日本歴史』426 吉川弘文館
- ・末木 健 1987 「甲斐国巨麻郡の成立と展開」『研究紀要3』山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- ・末木 健 1987 「八ヶ岳山麓における古代甲信国境」『甲斐路』59 山梨郷土研究会
- ・末木 健 2005 「甲斐国古代氏族と墨書き土器」『甲斐』109号 山梨郷土研究会
- ・津野 仁 1990 「地方官衙出土の墨書き土器」『古代』89 古代学協会
- ・田中広明 2003 「地方の豪族と古代の官人」柏書房
- ・長坂町教育委員会 2001 「龍角西遺跡」
- ・韮崎市教育委員会 1992 「山梨県韮崎市 宮ノ前遺跡」
- ・白洲町教育委員会 1999 「古御所東遺跡」
- ・萩原二雄 1986 「八ヶ岳南麓における平安時代集落の展開」『山梨考古学論集Ⅰ』山梨県考古学協会
- ・平川 南 1991 「墨書き土器とその字形—古代村落における文字の実相—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第35集 国立歴史民俗博物館
- ・平川 南 1993 「上器に記された文字」『月刊文化財』362
- ・平野 修 1989 「宮間田遺跡における墨書き土器の展開」『山梨考古学論集Ⅱ』山梨県考古学協会
- ・平野 修 1992 「山梨県内の墨書き土器と線刻土器」『研究報告 第4集』帝京大学山梨文化財研究所
- ・平野修 1998 「宮ノ前遺跡」『山梨県史 資料編1』山梨県
- ・平野 修 2004 「古代甲斐国の山麓開発と御牧—集落遺跡の消長から—」『山梨考古学論集V』山梨県考古学協会
- ・武川村教育委員会 1988 「宮間山遺跡」
- ・山下孝司 1994 「墨書き土器に関する考察 一寺所遺跡に見える墨書き土器のあり方—」『山梨考古学論集III』山梨県考古学協会
- ・山梨県教育委員会 1986 「柳坪遺跡」
- ・山梨県教育委員会 1987 「寺所遺跡」
- ・山梨県 1999 『山梨県史 資料編3』
- ・山梨県 2004 『山梨県史 通史編1』

* 出典の報告書は主要なものを載せ、他は削除した。

宮の前遺跡出土の縄文土器

吉岡 弘樹

1 はじめに

2 宮の前遺跡と周辺の縄文時代遺跡

3 出土した土器類

4 おわりに

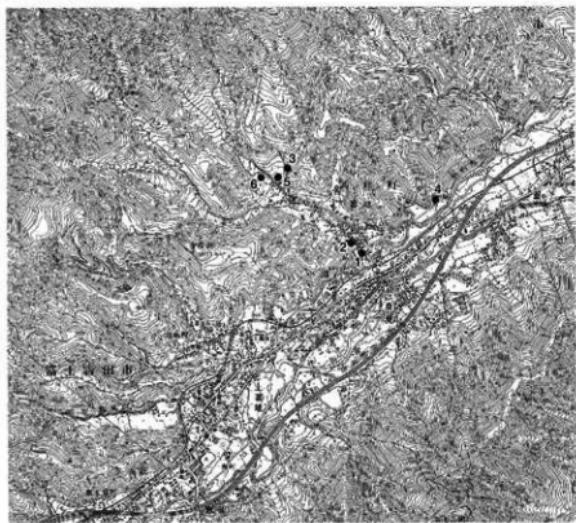
1 はじめに

宮の前遺跡の占地する桂川流域には多くの縄文時代後期を中心とした遺跡が点在することが知られており、これが郡内地域の遺跡分布の特色とされている。ここでは、今まで報告がなされていなかった平成 14 年度(2002 年)1 月 17 日と 18 の両日において桂川流域下水道発信基地建設事業に伴って実施された試掘調査によって出土した資料を紹介するものである。

2 宮の前遺跡と周辺の縄文時代遺跡

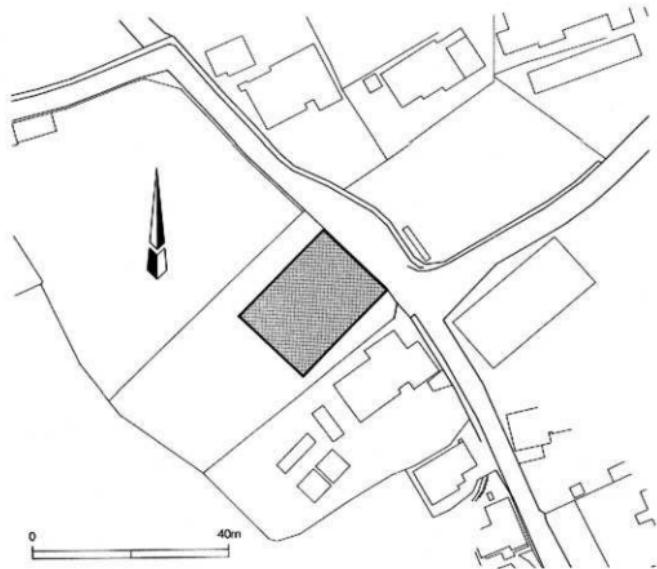
縄文時代の富士山は新富士火山期のⅠ期(10,000 ~ 3,200 年前)とⅡ期(3,200 年前 ~ 西暦 1,707 年の宝永大噴火)の範疇に含まれることになる。Ⅰ期は縄文海進があった時期で富士山では猿橋溶岩流(約 8,500 年前)や桂溶岩流(約 8,500 ~ 7,700 年前)の大規模な溶岩流の流出や小規模なテフラの噴出がみられている。しかしながら、気候の温暖化もあり、富士北麓地域でも遺跡が増加する傾向がみられる時期である。Ⅱ期は縄文時代後期の大爆発や気候の悪化、小海退が起り間氷期から氷期への移行を感じられる時期にある。

宮の前遺跡の周辺においては、西桂町で確認されている最古の縄文土器として早期初頭の撚糸文系土器が出土した寺野遺跡③が知られている。縄文時代中期になると全国各地で遺跡の急増し尚かつ大型化するようになる。柄杓流川と一石川の合流地点には中期中葉の藤内式上器や配石遺構が確認されている下尾尻遺跡④がある。しかし、代表的な遺跡としては当調査地点も含まる宮の前遺跡①・②が上げられよう。寺野遺跡の下方約 300m、標高約 660 ~ 700m に立地するのが昭和 54 · 55 年(1979 · 1980 年)に町誌編纂事業によって発掘調査された城屋敷遺跡⑤である。当遺跡からは土坑 1 基と小竪穴状遺構 5 基などが検出され、特に小竪穴状遺構からは、晚期前半の

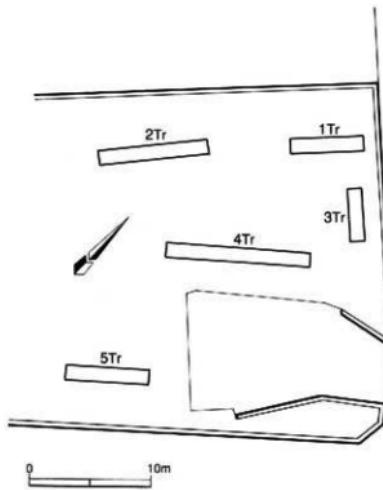


第 1 図 宮の前遺跡と周辺の縄文遺跡位置図 (S = 1/25,000)

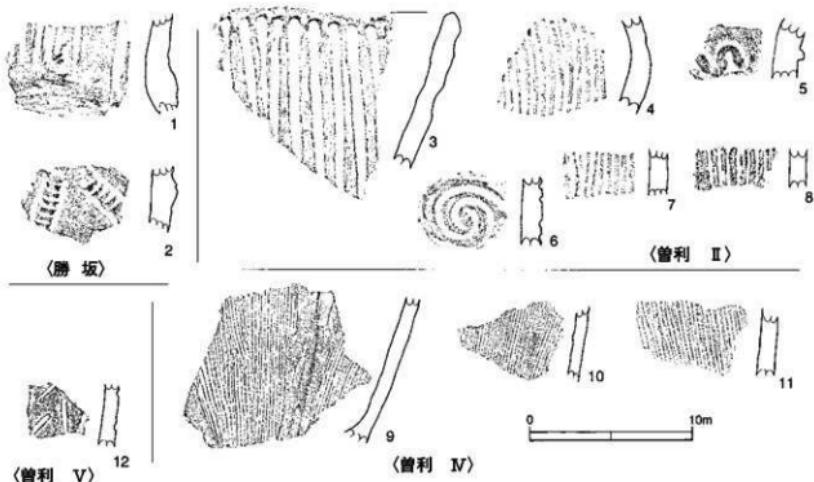
1 宮の前 遺跡	平成 13 年度発掘調査地点 平成 14 年度試掘調査・平成 15 年度発掘調査地点
2 宮の前 遺跡	昭和 62 年度発掘調査地点
3 寺野 遺跡	4 下尾尻 遺跡
	5 城屋敷 遺跡 6 休場 遺跡



第2図 調査地位置図 ($S = 1/1,000$)



第3図 トレンチ開口位置図 ($S = 1/400$)



第4図 出土遺物 その1 (S = 1/30)

清水天王山式土器が多量に出土している。また、北方より遡る石組み造構の存在も知られている。この城址敷地跡の西方約200m、標高約730~750mに休場跡⑤が占地している。西柱町誌によると大正末期に縄文時代前・晚期の上器片や石器の出土したとの記述がみられる。

宮の前遺跡は昭和62年(1987年)7月から約1ヶ月13m²を西柱町教育委員会が発掘調査し縄文時代中期後葉曾利II~IV式期の竪穴式住居4軒と同末葉の敷石住居跡が検出されたほか、イノシシのモチーフがブリッジに施された釣手上器や器高約70cmの大型埋葬が出土したことで全国的に有名となった。続いて、平成13年(2001年)にも、工場建設に伴って調査がなされ、敷石住居跡や溝状造構などを検出させていている。平成14年(2002年)1月には、今回、紹介する桂川流域下水道下等地発進基地建設による試掘調査が実施され対象地625m²に対して5条のトレント(対象地の約7.3%にあたる45.5m²)が開口され、地表下約40~60cmにおいて縄文時代後期の大型土器片が確認されたのである。その後、同年5月に本調査が行われ柄輪型敷石住居跡1軒、配石造構1基、土坑6基のほか2基の埋設土器が検出されている。

3 出土した土器類

今回、出土した土器類は縄文時代中期から後期初頭にかけてのものであり、図示し得る資料のみを掲載することとした。

1は縦方向の沈線を、2は連続爪形文を行し、ともに勝坂式期に比定できるものである。3~8は中期後半の曾利

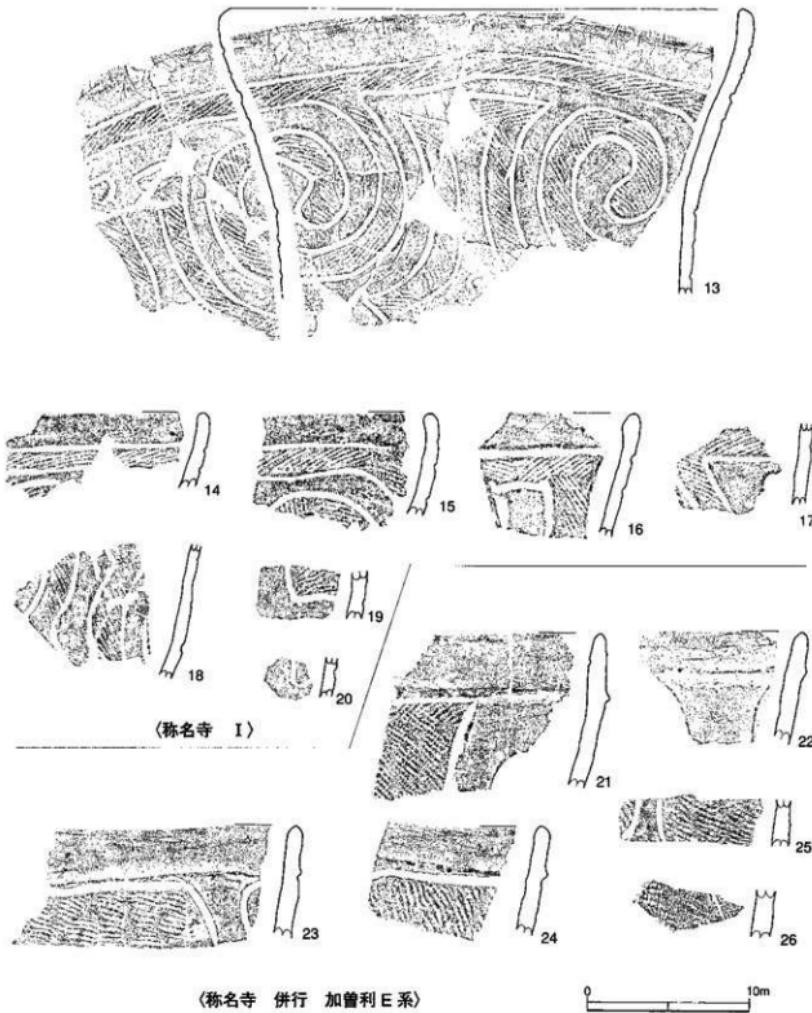
II式期にあたる。3~4には、縦位沈線が施されている。5は粘土貼り付けの波状文が、6には渦巻状の沈線が施されている。7~8には縦状の沈線が施されている。9~11は曾利IV式期に比定でき、ともに縦方向の条線が観察できる。12は曾利V式期でハ字文が施されている。13~20は後期初頭の称名寺I式期である。13は口縁部から側部上半までの大形破片で太い沈線で区画されたJ字文を基調としたモチーフ内に細かい繩文を施している。14~20についても沈線の区画内に繩文を施すものである。21~26は称名寺式期並行の加曾利E式系の土器である。

21~24には微隆起線文が横走しその下方に太い沈線によって区画された中に繩文が施されている。25~26についても21~24と同様に沈線によって区画された中に繩文を持つ構成となっている。

また、図示し得ないが縄文時代中期の浅鉢小破片も2片検出されていることを付け加えておく。

4 おわりに

今回は平成15年度(2003年)5月10日から6月17日にかけての20日間の発掘調査が実施される根拠となった試掘調査の資料が未報告であったため簡単ではあるが資料報告として紹介した。当該地は南方に富士山、西方に三ツ崎が聳えており、縄文時代に限らず旧石器時代から近世までの遺跡が多く確認されている場所である。また、相模湖より相模川と名前を変え相模湾に注ぐ桂川流域には宮の前遺跡の盛行したと考えられる縄文時代中期後半から後期と同時期に存在した人環状配石造構が確認された郡留市牛石遺



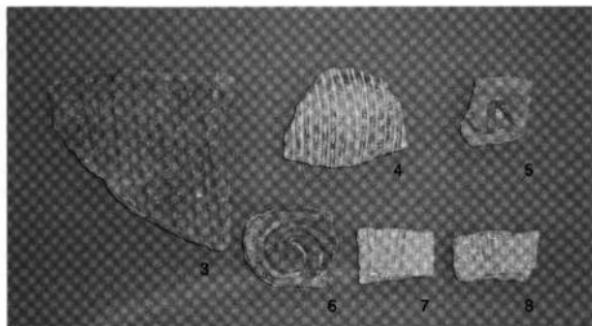
第5図 出土遺物 その2 (S = 1/30)

跡や中谷遺跡・大月市大月遺跡・塙瀬下原遺跡など多くの注目された遺跡が確認されてきている。今回紹介した資料も県東部地域の研究に対して大きな役割を持つものであり、これらの研究に今後の期待が持たれるところである。

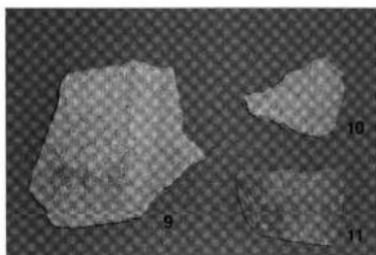
なお、本紹介をまとめるにあたっては、坂本英夫氏、三田村美彦氏に御教示を賜った。記して謝意を表したい。



勝坂式期



曾利Ⅰ式期



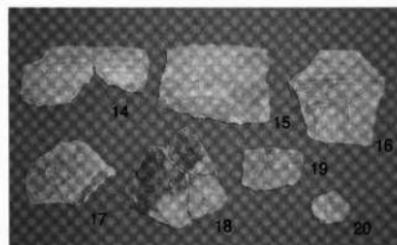
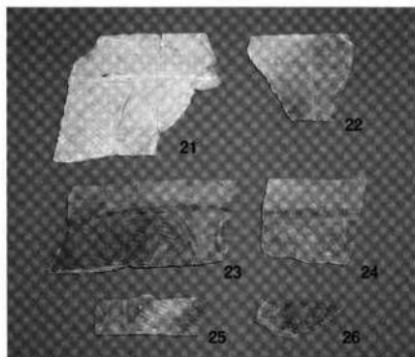
曾利Ⅳ式期



称名寺Ⅰ式期 その1



曾利Ⅴ式期



称名寺Ⅰ式期 その2

称名寺式期併行加曾利E式系

宮の前遺跡 出土土器一覧表

No	出土トレンチ	器種	部位	時期	注記表示
1	2Tr	深鉢	胴部下半	勝坂	02 宮試 2Tr
2	2Tr	深鉢	胴部	勝坂	02 宮試 2Tr
3	4Tr	深鉢	口縁部	曾利II	02 宮試 4Tr
4	2Tr	深鉢	口縁部やや下	曾利II	02 宮試 2Tr
5	2Tr	深鉢	胴部	曾利II	02 宮試 2Tr
6	2Tr	深鉢	胴部	曾利II	02 宮試 2Tr
7	2Tr	深鉢	胴部	曾利II	02 宮試 2Tr
8	4Tr	深鉢	胴部	曾利II	02 宮試 4Tr 包
9	4Tr	深鉢	胴部下半	曾利IV	02 宮試 4Tr 床
10	4Tr	深鉢	胴部	曾利IV	02 宮試 4Tr 床
11	2Tr	深鉢	胴部	曾利IV	02 宮試 2Tr
12	4Tr	深鉢	胴部	曾利V	02 宮試 4Tr 包
13	5Tr	深鉢	口縁部～胴部上半	称名寺I	02 宮試 5Tr 上
14	5Tr	深鉢	口縁部	称名寺I	02 宮試 5Tr 土
15	5Tr	深鉢	口縁部	称名寺I	02 宮試 5Tr 土
16	5Tr	深鉢	口縁部	称名寺I	02 宮試 5Tr 包
17	5Tr	深鉢	胴部	称名寺I	02 宮試 5Tr 土
18	5Tr	深鉢	胴部	称名寺I	02 宮試 5Tr 上
19	4Tr	深鉢	胴部	称名寺I	02 宮試 4Tr 床
20	3Tr	深鉢	胴部	称名寺I	02 宮試 3Tr
21	4Tr	深鉢	口縁部	称名寺併行加曾利E系	02 宮試 4Tr
22	4Tr	深鉢	口縁部	称名寺併行加曾利E系	02 宮試 4Tr 床
23	4Tr	深鉢	口縁部	称名寺併行加曾利E系	02 宮試 4Tr 包
24	4Tr	深鉢	口縁部	称名寺併行加曾利E系	02 宮試 4Tr 包
25	4Tr	深鉢	胴部	称名寺併行加曾利E系	02 宮試 4Tr 床
26	4Tr	深鉢	胴部	称名寺併行加曾利E系	02 宮試 4Tr

参考文献

- 西桂町 2000 「西桂町誌」資料編第一巻 西桂町誌編さん委員会
- 山梨県教育委員会 2002 「年報 18」 山梨県埋蔵文化財センター
- 山梨県教育委員会 2003 「年報 19」 山梨県埋蔵文化財センター
- 山梨県教育委員会 2003 「宮の前遺跡」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告第 207 収集

横堀遺跡出土の条痕文期土偶

野代恵子

1 はじめに

1 はじめに

横堀遺跡は南アルプス市在家塚（旧白根町）に所在する縄文時代晚期最終末～弥生時代中期にかけての遺跡である。発掘調査は中部横断自動車道白根インターチェンジ建設に伴う事前調査として平成11年度に行われ、調査報告書は平成12年度にすでに刊行されているが、ここで報告した遺物の中に縄文時代晚期最終末～弥生時代前期初頭に属する土偶の一部が含まれていることがわかったため、この場を借りて訂正し報告したい。

2 遺跡の概要

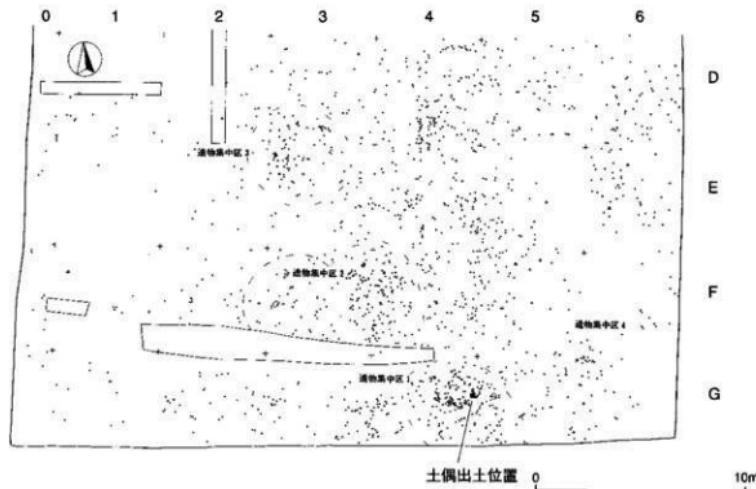
山白根町は全国でも有数の巨大な扇状地に位置している。横堀遺跡もこの扇状地上に立地している訳であるが、遺跡が含まれた縄文時代晚期最終末～弥生時代中期にかけ

2 遺跡の概要

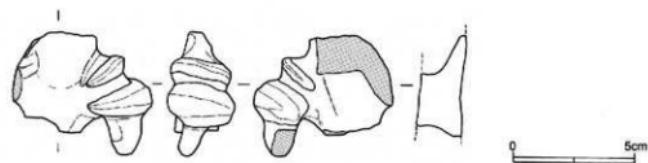
4 おわりに

ては一時的に水域から分離され、安定した土地が形成されたものと考えられる。遺構面は地表下約3.5～4.0mほどのところにみられる黒褐色粘質土を基本としており、標高はおよそ328mを測る。この層より上には厚い堆積層が幾重にも重なって堆積し、これ以後については安定した生活面は遺存していない。

遺跡の細別時期については、縄文時代晚期最終末～弥生時代前期にあたる土器群を主なものとして、その他にもごくわずかながら弥生時代中期中葉に属すると考えられる土器が含まれている。前者については、中部高地においては水式の最も新しい段階にあたり、また東海地方では櫻土式に位置づけられる。山梨県内においては宮ノ前遺跡（並崎市）の2号水田下層の土器群とほぼ同じ様相を示すもので、宮ノ前1期（中山1992）にあたる。出土土器の示す時期



第1図 横堀遺跡遺物出土状況（調査区 南半分）



第2図 横堀遺跡出土土偶 (S = 1/2)

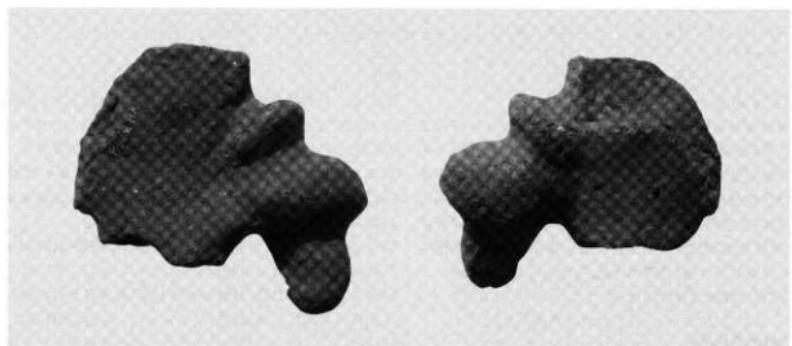
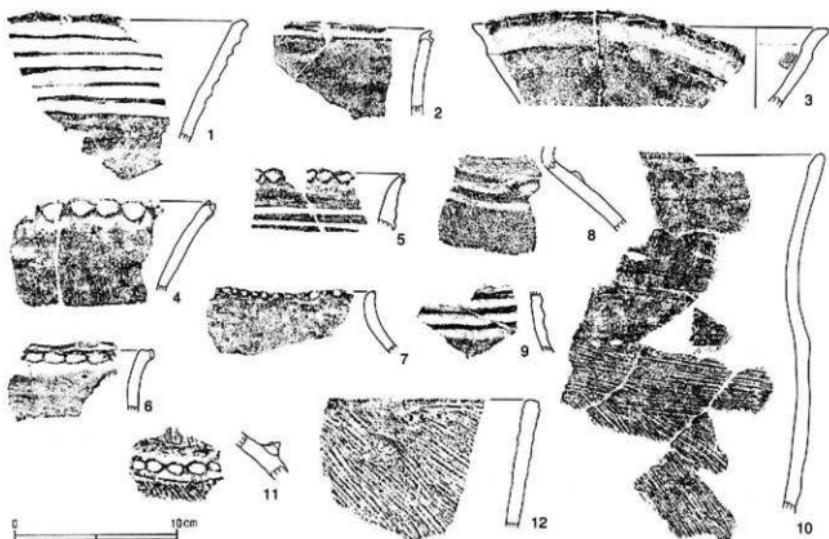
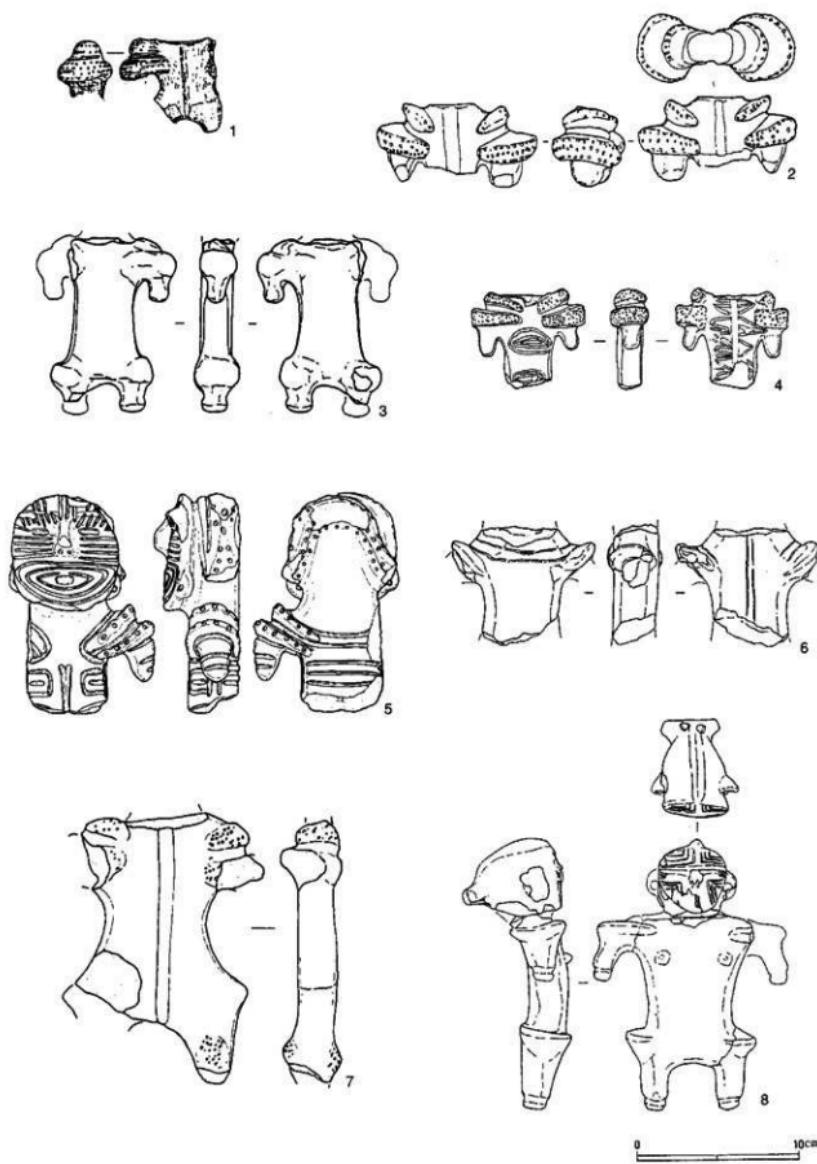


写真1 横堀遺跡出土土偶



第3図 横堀遺跡出土土器 (S = 1/3)



第4図 肩バット状の装飾をもつ土偶 (S = 1/3)
 (1・氷、2・中島A、3・青木沢、4・石行、5・伝上伊那郡出土、6・8・麻生田大橋、7・平井稻荷山)

相としては、「縄文時代晚期最終末の浮線文土器群の中に条痕文土器が流入し、混在する段階」～「前段階まで伝統的に繼承されてきた深鉢・浅鉢を主体とする土器組成から、甕・壺を主体とする土器組成へと変化する段階」と捉えることができる。

遺跡からは住居跡・土坑など、生活の痕跡を直接的に示す遺構は発見されなかったものの、2,000点を上回る土器や石器が発見されている。

遺物は調査区南半分を中心に出土しており、遺物を包含する黒褐色粘質土は調査区北半分では徐々にシルトがかった鉄分が多く含む層に変化し、同時に遺物の出土も見られなくなる。なお、土器や石器とともに出土した炭化物の小片について「C年代測定を行ったところ、補正年代値で 1960 ± 40 y.B.P.」という結果が得られている。

遺物の分布状況については20mほど離れて出土した土器片間に接合関係がみられ、また石器の分布には器種ごとに偏りがみられるなど、単なる遺物包含層としての性格のみでは捉えきれない要素をもっている。

3 横堀遺跡の土偶とその類例

報告書の中で縄文時代の土器片として載せた遺物が1点あるが、これが十個の一部であることがわかった(第2図・写真1)。残存部位は左腕のみが残った胸部～腹部にかけての部分にあたり、腕の割には胴体部分がきわめて細く作られている。肩から腕にかけては平行する2段の隆帯によって立体的に作られているが、これがいわゆる肩パッド状の装飾である。この装飾以外には文様などは全くみられない。色調は橙褐色で胎土には白色粒子・黒・金雲母を少量含んでいる。焼成は良好である。土偶は他の多数の土器片や石器とともに見つかっているが、特に遺構に伴っているものではない。出土地点はG-4グリッドで、ここは調査区の中でも遺物が多く集中してみられる場所である(第1図)。

横堀遺跡でみられるような肩パッド状の装飾をもつ土偶は中部高地を中心として分布することが知られているが、長野県水道跡・中島A遺跡・青木沢遺跡・石行遺跡・伝上伊那郡出上例・愛知県平井福荷山遺跡・麻生田大橋遺跡などで類例がみられる。水道跡・青木沢遺跡例(第4図-1・3)は肩部分がこぶ状に隆起しており、水道跡のものはこの部分と腕部分に刺突が施されている。中島A遺跡例(第4図-2)は肩部分に刺突を施した隆帯が2段付けられている。石行遺跡例(第4図-4)は肩部分に2段の隆帯があり、ここに刺突が施される。また胸部～腹部にかけてと背中には沈線による文様が描かれている。平井福荷山遺跡例(第4図-7)は肩から腕部分にかけて2段の隆起をもち、この隆起部分に刺突が施される。横堀遺跡例は残存部位が少ないので、他の遺跡例を見ると、肩パッド状の装飾をもつ土偶は腰部についても張り出しをもち立体的に作られているものがみられる(第4図-3・7・8)。頭部についてみると伝上伊那郡出上例(第4図-5)では、口の周りや頬、

額に数条の沈線文が左右対称に施された顔面をもつ、いわゆる有臂土偶と呼ばれるタイプである。麻生田大橋遺跡のものは顔面に沈線によってL字状の文様が施されている(第4図-8)。岡本茂史氏は平井福荷山例の土偶について、「ややなで肩の肩部に刺突を施した隆帯が貼付され、鋭角的に強く張った腰部を有するものは安行式土偶に系譜が求められる可能性がある。」としている。

縄文時代晚期最終末～弥生時代中期頃までにかけてみられる土偶については、東北地方の結髪形土偶・刺突文土偶や中部地方を中心に分布する有臂土偶など地域によって様々な形態の土偶が存在する。山型県内では該期の遺跡については細かいものまで含めるとおよそ70箇所が確認されているが、土偶が見つかっているのは横堀遺跡と金の尾遺跡の2遺跡のみである。金の尾遺跡例については弥生時代後期の住居跡からの出土であるが、住居跡内の覆土中から水神平式の土器片が出土していることから、時期的にはこれに伴うものと考えられる。とすれば横堀遺跡例は条痕文期の土偶としては県内で最も古いものに位置づけられる。

4 おわりに

今回は横堀遺跡の土偶について再報告するとともに、周辺地域の類例を挙げる中で単なる比較をするにとどまった。該期の土偶については、その特徴として縄文時代的性格をもつ部分と縄文時代的な性格が失われ、土偶祭祀自体が変質する部分について説かれることが多い。縄文時代を通じて存在し続けてきた土偶は、弥生時代中期に至ると容器形土偶・人面付壺へと移行し形態的にもその用途面からも縄文色が払拭される。横堀遺跡例はちょうどその過渡期の土偶にあたるが、この過渡期のなかで土偶がどのように変質していくのか、またその要因は何であったのか、考えていくべきことは数多い。今後の課題である。

本稿を草するにあたり、小野正文氏・中山誠二氏にはご教示いただいた。記して感謝いたします。

〈参考文献〉

- 宮下健司：1983「縄文土偶の終焉」『信濃』35-8
荒巻実・森楽博己：1985「有臂土偶小考」『考古学雑誌』71-1 日本書学会
中山誠二：1992「宮ノ前遺跡出土の縄文時代晚期末葉から弥生時代中期初頭の上器群」『宮ノ前遺跡』並崎市遺跡調査会
岡本茂史：1993「東海地方西部における縄文晚期土偶」『突帯文土器から条痕文土器へ—伊勢湾周辺地域における縄文文化の解体と弥生文化の始まり—』突帯文土器研究会佐藤嘉広：1996「東北地方の弥生土偶」『考古学雑誌』81-2 日本書学会
山梨県埋蔵文化財センター：2001「横堀遺跡」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第184集

甲府盆地から見たヤマト（1）

—甲斐銚子塚古墳出土の腕輪形石製品—

小林 健二

- | | |
|--------------------|---------------|
| 1 はじめに | 4 石材・製作技法と製作地 |
| 2 甲斐銚子塚古墳出土の腕輪形石製品 | 5 今後に向けて |
| 3 編年的位置づけについて | 6 おわりに |

1 はじめに

山梨県立考古博物館では、2006（平成18）年10月7日から11月26日まで、第24回特別展「甲府盆地から見たヤマト—甲斐銚子塚古墳出現の背景—」（以下、特別展）を開催した^①。筆者は、この展示会の担当として準備に関わることとなつたが、企画した背景には以下のようない経緯がある。

古墳時代前期では東日本最大級の規模を持つ国指定史跡甲斐銚子塚古墳は、4世紀後半に築造された全長169mの前方後円墳である。1928（昭和3）年に偶然の機会から石室が発見され、出土した三角縁神獣鏡をはじめとする副葬品及び石室構造から、畿内との強い結びつきが指摘されている古墳である。最近では、平成16年度の第2次整備事業に伴う发掘調査において、後円部北側に「尖出部」の存在が、周溝内に「区画堤」とも考えられる遺構が確認された。後円部西側の横端では木柱が、周溝内からは第1次整備事業に伴う发掘調査において出土していた円盤形・蕨手形の木製品が複数個体発見されるなど、儀礼に関わる木製品も多數出土した。笠形木製品の粗朧とも考えられるものも含まれ、これら埴丘・周溝の構造、出土品から、甲斐銚子塚古墳が極めて畿内の古墳であることが再確認されるに至り^②、内外注目されることになった。

また、第1次整備事業が行われてちょうど20年目でもあり、この間古墳時代の研究は大きく進み、特別展は改めて甲斐銚子塚古墳を紹介する絶好の機会となった。

以上の成果をもとに、特別展では、甲斐銚子塚古墳をはじめ中部・東海・畿内各地域の出土品を通して、甲斐銚子塚古墳出現の背景について専考するとともに、ヤマト政権との関わり及び東日本での位置づけ、さらに「甲斐（甲府盆地）」という東京の一地域から見たヤマト政権について展示を行つた。

関係機関の協力により、展示資料については充実した内容となつた。山梨関係では、甲斐銚子塚古墳とともに、1929（昭和4）年に発見され、現在東京国立博物館に所蔵されている大丸山古墳の副葬品のほとんどが「里帰り」し

展示され、約2ヶ月の間、間近で見ることができた。そして何よりも、甲斐銚子塚古墳については、旧来より知られていた出土品と最新の出土品を同時に展示できることは、大いに意義のあることであった。

一方では、当初のテーマ通りの内容で一貫した展示ができるかどうかは別にして、課題が多く残されたことも事実である。

その一つに腕輪形石製品があげられる。鏡とともに前期古墳の代表的な副葬品であり、工芸品としても優れた造形美から副葬品の「傑作」ともいわれており^③、今回筆者も改めて興味を注がれた。

研究的には、明治期以来鏡形石を中心とした詳細な編年的研究が進められ、成果が蓄積されてきた^④。そして、畿内を中心に各地に分布する状況から、当然のことながら古墳時代前期の政治動向と密接に関わるものとして扱われてきた^⑤。

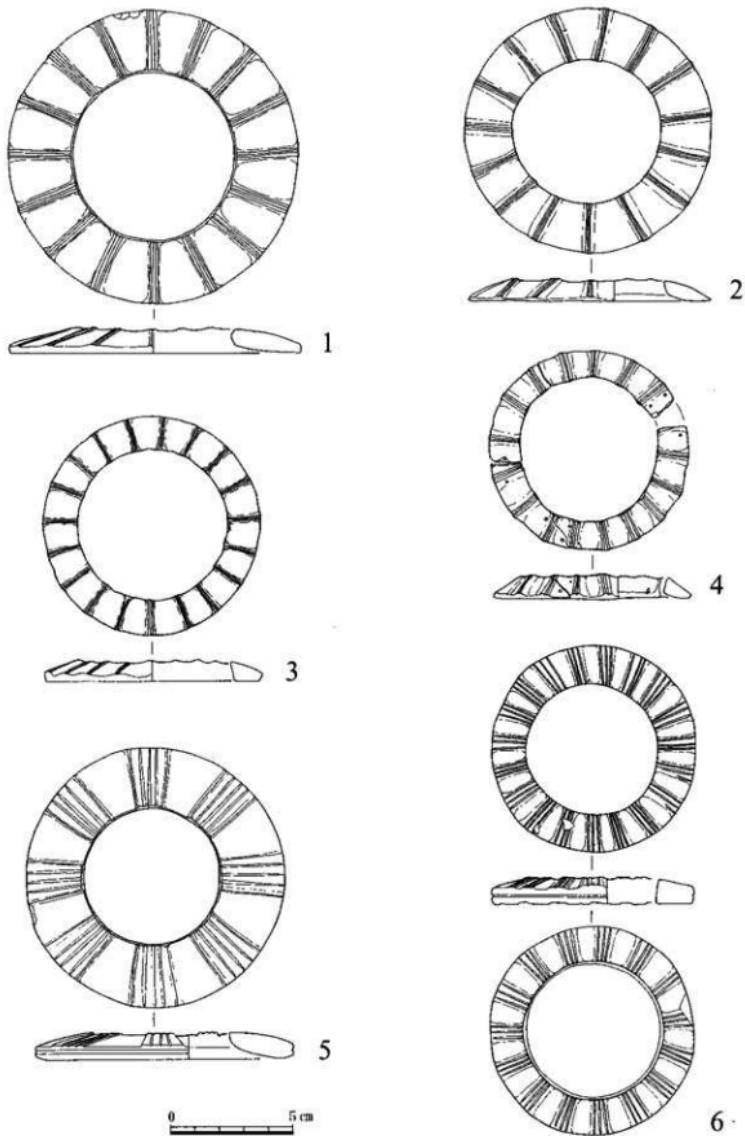
このような状況を踏まえ、甲斐銚子塚古墳出土の腕輪形石製品についても、近年の動向に基づいた、現時点における位置づけが必要と思われる。

小稿では、特別展を通じて得られた成果・課題の中で、甲斐銚子塚古墳から出土した副葬品のうち、まず腕輪形石製品を取り上げてみたい。

2 甲斐銚子塚古墳出土の腕輪形石製品

東京国立博物館所蔵の甲斐銚子塚古墳出土の副葬品については、発見後すぐに出土の状況及び個々の副葬品について報告・考察され、1930（昭和5）年の国史跡指定とともに学界で広く知られるようになった^⑥。その後、1975（昭和50）年に刊行された『中道町史』上巻に、実測図と写真が掲載された^⑦。さらに1996（平成8）年には、山梨県史編纂事業に伴い、改めて出土品の調査と実測が行われ、1999（平成11）年に刊行された『山梨県史』資料編2において実測図が掲載された^⑧。しかし、どちらも副葬品個々についての説明の記述はほとんどない。

これらのうち、腕輪形石製品には車輪石6点と石鏡5点



第1図 甲斐鎌子塚古墳出土車輪石（1:2 「山梨県史」より）

がある。鎌形石の出土は知られていない。ここでは、「山梨県史」掲載の実測図及び特別展における展示室での観察に基づき見ていくこととする。

なお、各部の名称、型式分類については、上記の研究成果を参考にしながら述べる。

(1) 車輪石 (第1回)

車輪石はすべて外形・内形ともほぼ正円形である。1点を除き環体幅は小さい。出土時の状況は、石室の中央、木棺内に埋められていたとされる。文献からもわかるとおり、表面には多量の赤色顔料が付着しているが、いずれも所々に濃い緑色の光沢が見え、研磨されているのが確認できる。石材は碧玉と思われる。

1は、外径12.1cm、内径6.6~6.9cm、高さ1cmで、外端部がわずかに欠損している。断面は内孔部で厚さ6mm、外端部で4mmを測る。底面は、外端部から環体の中ほどまで平底であるが、内孔に向かって4mmほどの傾斜をもつ。環体幅は2.5~2.6cm。斜面の放射状彫刻は、平面と沈線をもつ凸帯を組み合わせたものである。凸帯との境の屈曲が緩やかなため、実測図からは底面のようにも見える。鐘方分類のBⅢ型式、蒲原分類のI a型式斜面彫刻4・断面形Dに比定される。

2は、外径10cm、内径6~6.1cm、高さ9mmで、断面は内孔部で厚さ7mm、外端部で1.5mmを測る。底面は、1と同様外端部から環体の中ほどまで平底であるが、内孔に向かって3mmほどの傾斜をもつ。環体幅は1.9~2.1cm。1同様斜面の放射状彫刻は、平面と沈線をもつ凸帯の組み合わせで、鐘方分類のBⅢ型式、蒲原分類のI a型式斜面彫刻4・断面形Dに比定される。

3は、外径9cm、内径6.1cm、高さ8mmで、断面は内孔部で厚さ8mm、外端部で4mmを測る。底面は平底で、環体幅は1.3~1.4cm。斜面の放射状彫刻は、平面に沈線をもつ凸帯の組み合わせであるが、1・2に比べ平面の部分は底面に近い。鐘方分類のBⅢ型式、蒲原分類のI a型式斜面彫刻4・断面形Fに比定される。

4は、一部が欠損し、さらに4点に割れており、9箇所に補修がある。推定の外径は8.2cm、内径は5.8cm、高さ1cmで、断面は内孔部で厚さ6mmほど、外端部で2mmを測る。底面は内孔側でわずかに上がり底となっている。環体も欠損により幅は1.1~1.4cmとなっている。6点の中では斜面の傾斜がきつく、放射状彫刻は平面に3同様底面に近い平面に沈線をもつ凸帯を組み合わせている。鐘方分類のBⅢ型式、蒲原分類のI a型式斜面彫刻4・断面形Eに比定される。

5は、外径10.7cm、内径4.6cm、高さ1.1cmで、外端部がわずかに欠損している。断面の厚さは、内孔部で6mm、外端部で5mmを測る。底面は、内孔に向かって5mmほどの傾斜をもつ上がり底で、環体幅は2.5~2.6cm。斜面の放射状彫刻は、平面と凸帯を組み合わせたものであるが、凸帯部は3条の沈線をもつ幅広のものを8箇所配置したもの

で、さらに外端部側面にも沈線が施されており、他に類例のない、極めて特徴的な彫刻をもつ製品である。したがって、平面の形態は鐘方分類のBⅢ型式、蒲原分類のI b型式に比定されるが、斜面彫刻・断面形は比定できない。

6は、外径8.5cm、内径5.4cm、高さ1.1cmで、表面(上面)と外端部がわずかに欠損している。断面の厚さは、内孔部で1cm、端部で7mmを測り、形状は長方形に近い。底面は平坦で、環体幅は1.2~1.4cm。斜面の放射状彫刻は両面あり、組み合わせは5と同じ平面と3条(一部2条)の沈線をもつ幅広凸帯であるが、こちらは凸帯部が表面に19箇所、裏面に15箇所と密である。やはり外端部側面にも沈線が施されている。平面形態は鐘方分類のBⅢ型式、蒲原分類のI a型式に比定される。

(2) 石鏡 (第2回)

石鏡については、5点のうち1点は約3分の2が欠損している。車輪石同様、多量の赤色顔料が付着しているが、濃緑色と光沢が確認できる。石材も同じく碧玉と思われる。

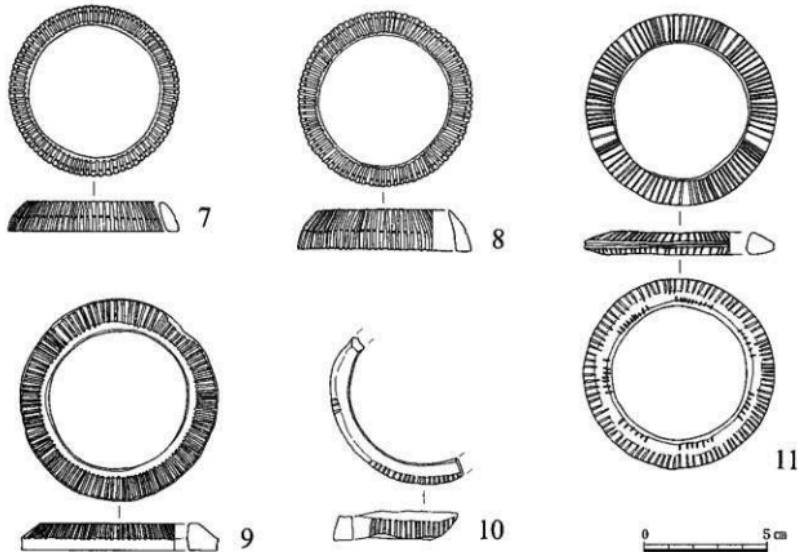
7は、外径7cm、内径5.6cm、環体高1.2cmを測り、外斜面及び側面に丸い断面をもつ細刻線が施されている。さらに境には沈線を一条巡らしている。断面形は外斜面の傾斜がきつく、内面が内傾している。鐘方分類のA I-a型式、蒲原分類のI a類に比定され、石鏡の中では多く見られる型式である。

8は、外径7.2cm、内径5.6cm、環体高1.7cmを測る。7と同じく外斜面及び側面に丸い断面をもつ細刻線が施され、境には沈線を一条巡らす。鐘方分類のA I-a型式、蒲原分類のI a類に比定され、断面形は外斜面の傾斜がややきつく、内面は内嚢しながら内傾している。

9は、外径8cm、内径5.7cm、環体高1.1cmを測る。外端部の一部が欠損している。底面(環体幅)とほぼ同じことから斜面の傾斜は比較的なだらかで、細刻線はさらに細かい。側面には1段の底面をもつ。断面形については、内面は稜線が巡るもののはば直立し、上端部に平坦な面をもつ。鐘方分類のA II型式、蒲原分類のII a類に比定され、7・8とともに多い型式のものである。

10は、上面・下面とも欠損・剥離しているが、側面に施された細刻線から、本来の形状は7・8と同様のものと見られる。推定の外径は6.8cm、内径は5.8cmとなる。現存の高さは1.3cm。

11は、外径7.8cm、内径5.5cm、高さ9mm~1cmを測る。上下面に斜面を有し、上面には7~10とは異なる細い沈線が施されており、あまり明瞭ではないが平坦面の幅のやや広い部分2条が5箇所に配置されている。下面には研磨したような平滑面を挟んで、外端部に沈線を、別工程で内端部に6~11本単位で7箇所の沈線を施し、側面にも沈線が巡る。鐘方分類のA IV型式、蒲原分類のV a類に比定される。



第2図 甲斐銚子塚古墳出土石鉄 (1:2 「山梨県史」より)

3 編年の位置づけについて

甲斐銚子塚古墳出土の車輪石と石鉄について見てきたが、ここで形態的特徴をもう一度整理してみよう。

まず車輪石については、平面形はすべて正円である。環体幅は小さいものが多く、斜面彫刻は折面や直面ではなく、平面中心の構成のものであり、両面装飾のものも含まれている。断面形は上がり底から平底への過渡的な様相が窺える。また、他には見られない型式（第1図5・6）もあるが、これについては後述する。

次に石鉄については、内面が内傾しているもの（第2図7・8）と直立しているもの（同9・10）がある。両面装飾のもの（同11）もある。

以上のような特徴から、先学の研究成果を参考にすれば、甲斐銚子塚古墳出土の腕輪形石製品は、おおむね前期の新しい段階のものであることは明らかである。

しかし一方で、車輪石・石鉄ともに非常にバリエーションが豊富という特徴が存在し、鏡形石のように粗型貝輪からの変遷が辿りにくく、北條芳隆氏も指摘するように³⁶、両者の型式変遷はわかりにくいのが現状である。

ところで、特別展で展示した滋賀県雪野山古墳と愛知県東之宮古墳の出土品については、赤塚次郎氏により濃尾平野の土器編年を基準とした編年案が提示されている³⁷。これによると、雪野山古墳は廻向Ⅲ式末に、東之宮古墳は廻向Ⅲ式中頃に位置づけられている。

濃尾平野と甲府盆地との併行関係についても、S字彫の変遷を中心に行者者が提示してきたものがある³⁸。そして、甲斐銚子塚古墳においても、最新の発掘調査において周溝からS字彫が出土しており、土器による編年の位置づけがより明確になった。すなわち土器編年でいえば、甲斐銚子塚古墳は松河戸Ⅰ式前半期—甲斐古墳Ⅳ期という併行関係に位置づけられる³⁹。筆者の年代説では4世紀後半となり、玉類など他の副葬品を考慮しても、從来の古墳の年代と相対的には矛盾するものではない。

4 石材・製作技法と製作地

それではここでさらに、特徴的な車輪石（第1図5・6）の存在について見てみると、斜面彫刻に平面をベースに凸帯と細線を多用したこの車輪石は、極めて高い技術を窺わせる作品であり、類例を探すのは難しい。特に5については、既に「地元産」ではないかとの指摘がある⁴⁰。これは、北陸または他地域から石材が運ばれ、甲府盆地で製作された「在地での生産」という意味であろうが、筆者も他の車輪石から型式的に変化したというより、独自のデザインのものと他の5点とともに甲府盆地で製作されたものと考えたい。それがどのような体制のもとに生産されたのかを明らかにするのは容易なことではないが、各地で未製品が出土していることも報告されており、製作技法が各地へ伝播している可能性は高いと思われる。

石製品の材質と製作技法に関しては、岡寺良氏による重要な視点がある¹⁶。甲斐銚子塚古墳出土の腕輪形石背品の材質は、濃緑色で硬質の碧玉である可能性は高く、石鏡の内面はすべて直立している訳ではないが、外斜面及び側面に丸い断面をもつ細刻線が施されているもの（第2図7-8）がある。そして、三角縁神獸鏡との強い共伴関係にあるということから、これら石製品は岡寺氏のいう「A系統」に属することになる。それが、軟質の緑色凝灰岩製の細かい細刻線が施された石鏡をもつような「B系統」との製作工人集団の差が捉えられるるすれば、さらにはその後にヤマト政権による積極的な施策¹⁷があったとしても、倭鏡も含めた畿内外の地での積極的な、活発な製作が行われていたことが考えられる¹⁸。

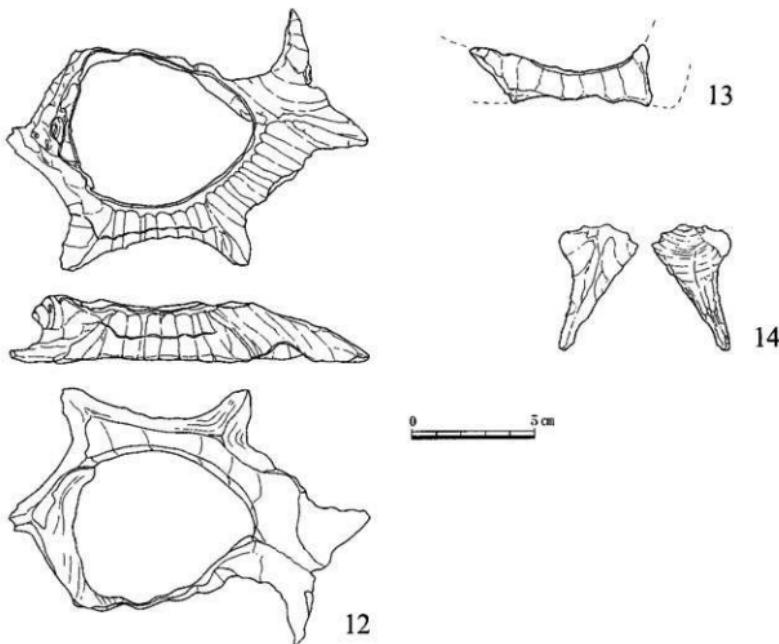
5 今後に向けて

はじめにも述べたが、特別展を開催するきっかけとなつた、甲斐銚子塚古墳の第2次整備に伴う調査において、突出部や周溝の構造、多くの木製品の使用が確認されたことにより、この古墳が前期後半の東日本において、完成された極めて畿内外の古墳であることを改めて示した。

しかし、日常使用する土器をはじめ、古墳時代前期の生

活スタイルは濃尾平野に淵源をもつ東海系によって基盤が造られ、中でもS字型を早くから選択的に取り入れた甲斐（甲府盆地）は東日本では特異な地域であることは、これまで述べてきたところである。甲斐の古墳時代のはじまりは、このS字型の波及と定着が大きな画期であり、この基盤の上に、まず前方後方墳の小平沢古墳が造られ、その後天神山古墳・大丸山古墳と前方後円墳が続く。この間に起る駿河・諏訪を巻き込むS字型の拡がりは、甲斐盆地が駿河・伊豆・信濃・相模を結ぶ流通ネットワークの要衝¹⁹として、前期後半にピークを迎える²⁰。このような背景のもとに、腕輪形石製品の石材・製作技法が伝播する一方、スイジガイ製の貝鏡（第3図12～14）のようなものを手に入れるルートも存在したのである。そして、埴丘の型式・構造において、畿内の古墳に忠実な築造技術で造られた甲斐銚子塚古墳が出現する。

甲斐銚子塚古墳の東日本での位置づけについては、従来から畿内政権の東国経営の前線基地的な役割を考えられきた。甲斐盆地内にはヤマタタケルの伝承が多く残されているが、それは『古事記』や『日本書紀』に描かれているように、ヤマタタケルに代表されるヤマトの將軍たちによる東征の結果と重なり、前方後円墳や三角縁神獸鏡などの考



第3図 甲斐銚子塚古墳出土貝鏡（1:2 「山梨県史」より）

古学の成果も、こうした歴史観を裏付けるものとして解釈されてきた³⁹。しかし、前方後方墳の系譜や副葬品個々について研究が進んだ結果、ヤマトから的一方通行であった古墳文化の伝播についての考え方は、近年大きく見直されてきている。

甲斐銚子塚古墳から出土した木製品は、前期古墳では類例がほとんどなく、筆者が「円板形木製品」と呼ぶものが笠形木製品の祖型になるとすれば、最古のものとなる。それが甲府盆地で生まれ、ヤマトへ波及したものかというと、三角縁神獸鏡などの分布状況からも難しいが、地方からヤマトへ向けて発信するものがあったことも考えてみる必要があることを、特別展においても最後に述べたところである。

腕輪形石製品についてもまた、同様のことがいえるのではないだろうか。

6 おわりに

甲斐銚子塚古墳出土の腕輪形石製品について、近年の動向を踏まえ取り上げてみた。決め手となる石材について、十分な検証ができるないまま筆をとったことに批判を受けるかもしれないが、今後も引き続き、「甲府盆地から見たヤマト」について考えていきたいと思う。

註

- (1) 山梨県立考古博物館 2006 「甲府盆地から見たヤマト—甲斐銚子塚古墳出現の背景—」
- (2) 森原明廣・森田文子 2005 「銚子塚古墳附丸山塚古墳」 山梨県教育委員会
- (3) 白石太一郎 2000 「古墳の語る古代史」 岩波現代文庫
- (4) 小林行雄 1954 「鏡形石の研究」 「日本考古学協会叢書別巻 2」 三本文雄・小林行雄 1959 「伝統工芸と新興工芸」 「世界考古学大系」 3 日本Ⅲ 平凡社
- (5) 杉山晋作・八重樫純樹 1986 「電算機による石劍・車輪石の類例検索法」 「国立歴史民俗博物館研究報告」 第11集
- (6) 蒲原宏行 1987 「石劍研究序説」「比較考古学試論」 雄山閣出版
- (7) 銚方正樹 1988 「碧玉製腕輪類の研究視点」「網干普教先生草稿記念考古學論集」
- (8) 蒲原宏行 1991 「腕輪形石製品」「古墳時代の研究」 第8卷 占墳Ⅱ 腕輪品 雄山閣出版
- (9) 北條芳隆 1994 「鏡形石の型式学的研究」「考古学雑誌」 79巻第4号 など
- (10) 小林行雄 1956 「前期古墳の副葬品にあらわれた文化の二相」「京都大学文学部五十周年紀念論集」 この中で、仿製三角縁神獸鏡の配布と関わり、甲斐銚子塚古墳出土の腕輪形石製品が取り上げられている。
- (11) 川西宏幸 1981 「前期畿内政権論—古墳時代政治史研究—」「史林」 64巻第5号 など
- (12) 上田三平 1928 「銚子塚を通して観たる上代文化の一考察」「史学雑誌」 第39編第9号
- (13) 中道町史編纂委員会 1975 「中道町史」 上巻
- (14) 山梨県 1999 「山梨県史」 資料編2 原始・古代2
- (15) 北條芳隆 2002 「古墳時代前期の石製品」「考古資料大観」 第9巻 弥生・古墳時代 石器・石製品 小学館
- (16) 赤塚次郎 2005 「東之宮古墳の編年位置とその特徴」「史跡東之宮古墳調査報告書」 大山市教育委員会
- (17) 小林健二 1998 「甲斐における古式上師器の成立—3・4世紀の土器編年と墳墓—」「専修考古学」 第7号
- (18) 赤塚次郎 2006 「甲斐銚子塚古墳と東海系文化」 山梨県立考古博物館第24回特別展講演会資料
- (19) 川西宏幸 2004 「記念講演 長柄・桜山の時代」「シンポジウム 前期古墳を考える～長柄・桜山の地から～／国史跡指定記念講演会 未来に活かす史跡整備を考える 記録集」 迂子市教育委員会・葉山町教育委員会
- (20) 向寺良 1999 「石製品研究の新視点—材質・製作技法に着目した視点—」「考古学ジャーナル」 No.453 ニューサイエンス社
- (21) 河村好光 1986 「玉生産の展開と流通」「岩波講座日本考古学」 第3巻 岩波書店
- (22) 北條芳隆 1990 「腕輪形石製品の成立」「待兼山論叢」 24号 史学編
- (23) 小林健二 2007 「甲斐銚子塚古墳出土の腕輪形石製品について」「専修考古学」 第12号
- (24) 白石太一郎 2006 「甲斐銚子塚古墳とヤマト政権」「山梨県立考古博物館第24回特別展講演会資料
- (25) 小林健二 2007 「大陸中央—甲斐地域を中心に—」「考古学ジャーナル」 No.554 ニューサイエンス社
- (26) 白石太一郎 1999 「古墳とヤマト政権」 文春新書

伝中央市（旧東八代郡豊富村）出土の初期須恵器について

石神孝子

1 はじめに

1 はじめに

山梨県立考古博物館では、2006年4月29日から6月25日までの約2ヶ月間にわたって春季企画展「山梨の初期須恵器～古墳時代後半期の土器とその周辺～」を開催した。ここでは大陸から須恵器が伝播し、大阪府堺市の陶邑窯跡群を中心とした各地で生産が開始され、やがて甲府盆地にも須恵器がもたらされたことを、要点を押さえてわかりやすく紹介したもので、初めて県内出土の主な初期・古式須恵器と一緒に集められた展示会であった。

ここで紹介する初期須恵器は、この「山梨の初期須恵器」を観覧した、甲府市（山東八代郡中道町）上曾根町在住の滝本浩久氏の申し出により、その存在が明らかになったものである。この須恵器は滝本氏が30年以上前に甲府市の骨董を扱う店より購入したもので、「中央市（旧東八代郡豊富村）より出土したもの」であるとのことだが、詳細については不明である。しかしこの須恵器が、比較的古相を呈すこと、甲府盆地の須恵器出現段階を考える上で貴重な一例になり得ることなどを考慮した上で、この須恵器について考えてみたい。

2 甲府盆地の須恵器研究歴史

甲府盆地出土の初期・古式須恵器研究については、おおよそ3期の區別がみられる。まずは橋本博文氏らによる初期・古式須恵器が着目され始める時期である。橋本氏は甲府盆地の初期須恵器を集成し、その位置づけをおこなったという点で非常に意義深い^①。

2期は1980年代の中央自動車道建設に伴う発掘調査を中心とした時期で、この時期に初期・古式須恵器のみならず当該時期の資料が一気に増加したことにより、古墳時代中期の土器様相はかなり明瞭なものとなった。これらの成果を受けて、末木健・坂本美夫両氏により古墳時代土器編年案が提出された^②。また坂本美夫氏はこの段階の須恵器について整理をおこなうことで、この時期の社会様相を概観している^③。

3期は1990年代から現時点までである。1980年代後半から始まった曾根丘陵公園の円形低墳墓群の発掘調査により、墳墓の周溝部から出土する、祭祀にかかわる須恵器の

3 伝中央市（旧東八代郡豊富村）出土須恵器直口壺について

4 おわりに

類例が増加した^④。また甲府市（旧東八代郡中道町）右左町の朝日古墳周溝部などでも須恵器の出土が見られ、墳墓に圍むる須恵器の類例を増加させた。さらに近年では南アルプス市の寺部村附第6号墳でも同様の埴輪から古式須恵器の出土が認められ、盆地内での造墓活動と祭祀の様相が明らかになりつつある^⑤。筆者はかつてこうした調査に携わったことを受け、円形の低墳墓から出土する須恵器についてまとめる機会を得た^⑥。また埴輪に限らず近年の資料の増加により、初期・古式須恵器を整理し、時間軸の設定を試みた^⑦。

一方甲府市（旧東八代郡中道町）下向山町に所在する米倉山B遺跡では、現段階では甲府盆地最古のON231型式に位置づけられる大甕が出土した。ON231型式はTK73型式の範疇であるものの、TK73号窓から出土した須恵器群よりも若干古相の一群を含むため、TK73型式よりもや古い型式と考えられている。筆者はこの大甕の出土をきっかけに須恵器出現段階の様相について、考察したことがある^⑧。しかし現段階ではこの時期の資料は極めて希薄であるため、詳細については今後の資料増加を待たなければならぬ。

3 伝中央市（旧東八代郡豊富村）出土の須恵器直口壺について

第1図は、伝中央市（山東八代郡豊富村）出土の須恵器直口壺である。口径は10.8cm、底径は4.4cm、器高は20.3cmを測る。口縁部はクロコ整形で横ナデ、口唇部はシャープである。頸部は2段に区画され、2本で一对となった凸線が上下2単位、凸線の下方は波状文が配される。凸線は口唇部と同様非常にシャープである。胴部は丸みを帯びており、ロクロにより横ナデで調整される。底部は若干丸みを帯びており、やや安定性に欠ける。底部内面は四凹みがみられる。

本直口壺は、現在のところ甲府盆地では他に類例が認められないが、陶邑窯跡群ではTK73型式からTK216型式で特徴が類似する直口壺が見られる。本直口壺の特徴を見て、器形はもとより口唇部や凸線がシャープであること、波状文の形骸化が進んでいないことなどを考慮して、当該

時に位置づけることができるものと推測する。

1991年に行われた米倉山B遺跡の発掘調査において、TK73型式よりやや古相に位置づけられる須恵器大甕が出土したことは、すでに研究史で触れた。しかしこの大甕とTK216型式に位置づけられる東山B遺跡第2号墳から出土した樽型壺を中心とした須恵器群との間は、資料が少なく、長く空白であった。本直口甕は出土状況等、詳細に不明点が多いという問題はあるが、形態・技法の変遷等を考える上では、この空白を埋める貴重な事例であるといえる。

しかし依然として初期須恵器がどのように利用されるのか、また共伴する土器についても不明瞭であるなど、なお多くの課題が残る。今後の資料の増加を待ちたい。

4 おわりに

以上雑駁ではあるが、本直口甕の時間的位置づけを中心と特徴を概観した。米倉山B遺跡出土の大甕に加え、出土地点は不明であるもののこれに後続する須恵器の類例が少しずつ増加することで、朝鮮半島から須恵器が伝来してからそれほど時間を経ずして隣接地域と同様に、甲府盆地にも須恵器がもたらされる状況が理解してきた。今後さらに資料が増加することで、須恵器を含めた土器様相のみならず、カマドの初現や初期横穴式石室導入の問題等、甲府盆地の占墳時代中期の社会様相が明らかになっていくことを期待する。

(2007.1.21 脱稿)

参考文献

- (1) 橋本博文 1979 「甲斐出土のⅠ～Ⅱ期前半の須恵器」『丘陵』第7号 甲斐丘陵考古学会
- (2) 末木健・坂本美夫 1984 「山梨県」『古墳時代土器の研究』古墳時代土器研究会

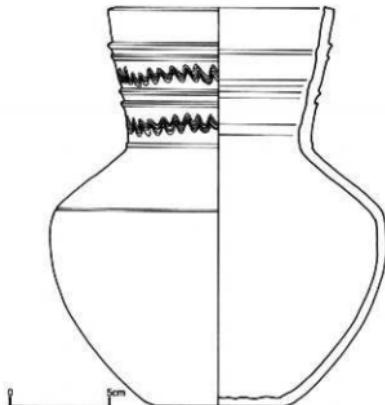


図1 須恵器直口甕実測図

- (3) 坂本美夫 1987 「山梨県」「東国における古式須恵器をめぐる諸問題」北武古代文化研究会ほか
- 坂本美夫 1990 「山梨の須恵器出現期の様相」「考古学ジャーナル」316号 ニュー・サイエンス社
- (4) 山梨県埋蔵文化財センター 1991 「東山南(B)遺跡」山梨県教育委員会
- 山梨県埋蔵文化財センター 1993 「東山南(A)遺跡」山梨県教育委員会
- 山梨県埋蔵文化財センター 2000 「岩清水遺跡」山梨県教育委員会
- (5) 南アルプス市教育委員会 2004 「寺部村附第6遺跡—新山梨環状道路建設の伴う埋蔵文化財発掘調査—」南アルプス市教育委員会他
- (6) 石神孝子 1998 「甲斐における古墳時代中期の墓制について—曾根丘陵の円形低墳墓—」『研究紀要』14 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- (7) 石神孝子 1999 「甲斐における初期須恵器の展開」『山梨考古学論集』IV 山梨県考古学協会20周年記念論文集
- 石神孝子他 1999 「甲斐における古墳時代中期の土器様相」『東国土器研究』5号 東国土器研究会
- (8) 石神孝子 1999 「第2節 10号土坑出土の須恵器について」『米倉山B遺跡』山梨県教育委員会他



写真1 直口甕頸部



写真2 直口甕

山梨県塚越遺跡の¹⁴C年代測定

小林謙一・遠部

慎・宮田佳樹・松崎浩之

(国立歴史民俗博物館・年代測定研究グループ)

正木季洋

(山梨県埋蔵文化財センター)

1 概要

2 塚越遺跡の概要

3 採取試料と炭化物の処理

4 測定結果と暦年較正

5 測定結果について

1 概要

山梨県塚越遺跡から出土した資料について加速器を用いた年代測定を行ったので、その結果を報告する。試料の採取は、山梨県埋蔵文化財センターにおいて、小林謙一・遠部慎が採取した。資料の出土層位や大凡の所属土器型式は、山梨県埋蔵文化財センター正木季洋氏の見解によるものである。

試料の前処理は、炭素年代測定グループが行い、測定は東京大学工学院工学系研究科で行った。測定結果は計測値(補正)とともに実年代の確率を示す校正年代値を示した。また、その根拠となつた校正曲線を示した。

この遺跡の年代測定の考古学的目的是、この遺跡の年代を調べることであるが、同時に縄文時代晩期～弥生時代前期の土器の実年代が推定可能な測定結果を得ることができた。

2 塚越遺跡の概要

塚越遺跡は河口2期バイパス建設工事事業に伴い、平成16年度に発掘調査を行った。調査の結果、近世・弥生時代前中期～中期初頭・縄文時代晩期初頭・縄文時代後期中葉・初頭の文化層が重層的に確認された。主だった遺構では、近世の土坑16基、弥生時代前期～中期初頭の再葬墓1基、焼土跡5基とその周辺から1,000点以上の遺物集中、縄文時代晩期初頭の住居跡1軒、後期初頭の敷石住居跡がある。

今回年代測定を行った資料は、縄文時代晩期遺物包含層(Ⅲb層)から出土した深鉢1点と弥生時代中期初頭の再葬墓であるD-9上器集中出土甕2点に付着した炭化物である。

3 採取試料と炭化物の処理

塚越遺跡からはYNMBT-2～11の土器10破片の内面

(a)・外面(b)から12サンプルの付着物を探取した。前処理した結果、土器付着物の過半は、土壤等不純物の混入が多く、炭素量が十分ではないと判断され、結果的に土器付着物3点について測定結果を得ることができた。

測定できた上器であるYNMBT-6(報告書第26図No.96)は、縄文時代晩期～弥生時代前期の深鉢である。D-5区、No.56、実測223と注記される土器で、胴部内面の焦状の付着物である。

YNMBT-8は、縄文時代晩期～弥生時代前期の深鉢で、報告書第27図D-9上器集中No.1～6と同一個体である。D-9区、土器集中、No.3、実測346と注記される土器で、胴部外側の煤状の付着物である。YNMBT-9はD-9区、上器集中、No.10、実測346と注記される土器であり、報告書第27図D-9上器集中No.7・8と同一個体の土器破片である。

試料については、補注1に示す手順で試料処理を行った。(1)前処理の作業は、国立歴史民俗博物館の年代測定資料実験室において遠部慎、(2)燃焼と(3)グラファイト化の作業は、宮田佳樹がおこなった。

4 測定結果と暦年較正

第1表

試料番号	機器番号	¹⁴ C BP	$\delta^{13}\text{C}$	校正年代(2σ) cal BC
YNMBT-6	MTC-07589	2915 ± 35	-25.7%	1255-1233 (4.3%) 1215-1005 (91.1%)
YNMBT-8	MTC-07591	2330 ± 30	-25.0%	505-455 (6.0%) 455-435 (1.8%) 415-360 (86.1%) 270-260 (1.6%)
YNMBT-9	MTC-07592	2400 ± 30	-25.0%	730-690 (8.2%) 660-650 (1.3%) 540-395 (86.0%)

()は確率密度

AMSによる¹⁴C測定は、東京大学大学院工学系研究科のAMSを用い、松崎浩之が同時に調整した標準試料を用いて測定した。測定結果については、補注2に示す方法で、補正し、較正年代を計算した。

5 測定結果について

曆年較正年代についてみると、YNMBT-6は較正年代で紀元前1215-1005年に含まれる可能性が高い結果を得た。これまでの測定結果に照らすと、縄文晚期前葉清水天王山式の時期に当たる。

同一個体と思われるYNMBT-8と9は、測定結果で1σの統計誤差以下の差があるが、2σの統計誤差でみると2340～2390¹⁴C BPの範囲で重なる。較正年代でみると、およそ紀元前400年頃では高い確率で重なり、その頃の年代と考えることができる。これは、2400年問題とも称される、過去の炭素濃度の変動が激しく較正曲線が横に寝てしまう年代の終わる頃に当たる。この紀元前400年ころとみれば、弥生前期条痕文土器として年代的に整合的である（小林2004）。

この分析は、国立歴史民俗博物館 平成17年度基礎研究「高精度年代測定法の活用による歴史資料の総合的研究」（研究代表 今村峯雄）、平成17年度科学研究費補助金（学術創成研究）「弥生農耕の起源と東アジア炭素年代測定による高精度編年体系の構築—」（研究代表 西本豊弘）の成果である。

曆年較正については今村峯雄・坂本稔の方法に従う。本稿は、概要を西本豊弘、補注1を遠部慎（国立歴史民俗博物館）、補注2を宮田佳樹（国立歴史民俗博物館）、松崎浩之（東京大学）の記録をもとに、小林謙一（国立歴史民俗博物館）が執筆した。

<補注>

(1) 前処理：酸・アルカリ・酸による化学洗浄（AAA処理）

AAA処理に先立ち、上器付着物については、アセトンに浸け振とうし、油分など汚染の可能性のある不純物を溶解させ除去した（2回）。AAA処理として、80℃、各1時間で、希塩酸溶液（1N-HCl）で岩石などに含まれる炭酸カルシウム等を除去（2回）し、さらにアルカリ溶液（NaOH、1回目0.01N、3回目以降0.1N）でフミン酸等を除去した。アルカリ溶液による処理は、5回行い、ほとんど着色がなくなったことを確認した。さらに酸処理（1N-HCl 12時間）を行いアルカリ分を除いた後、純水により洗浄した（4回）。その結果、YNMBT-2,3,4,5,7,9,10,11は回収量が0mg～0.77mgであり、測定不能であった。測定できた試料の回収率は以下の通りである。良好な炭素含有率であり、年代測定用試料として適していると言える。

第2表

YNMBT	採取量	処理量	回収量	燃焼	CO ₂ (炭素相当量)	炭素含有率 (CO ₂ /処理量)
-6	27mg	27mg	3.85mg	2.49mg	1.42mg	57.1%
-8	146mg	33mg	19.07mg	3.02mg	1.90mg	62.9%
-9	11mg	11mg	4.23mg	3.00mg	1.98mg	66.0%

(2) 二酸化炭素化と精製：酸化銅により試料を燃焼（二酸化炭素化）、真空ラインを用いて不純物を除去。

AAA処理の済んだ乾燥試料を、500mgの酸化銅とともに石英ガラス管に投じ、真空中に引いてガスバーナーで封じ切った。このガラス管を電気炉で850°Cで3時間加熱して試料を完全に燃焼させた。得られた二酸化炭素には水などの不純物が混在しているので、ガラス製真空ラインを用いてこれを分離・精製した。

(3) グラファイト化：鉄触媒のもとで水素還元し、二酸化炭素をグラファイト炭素に転換。アルミ製カソードに充填。

1.5mgの炭素量を目標に二酸化炭素を分取し、水素ガスとともに石英ガラス管に封じた。これを電気炉でおよそ600°Cで12時間加熱してグラファイトを得た。ガラス管にはあらかじめ触媒となる鉄粉が投じてあり、グラファイトはこの鉄粉の周間に析出する。グラファイトは鉄粉とよく混合した後、穴径1mmのアルミニウム製カソードに600°Cで充填した。

<補注2>

年代データの¹⁴C BPという表示は、西暦1950年を基点にして計算した¹⁴C年代（モデル年代）であることを示す。¹⁴C年代を算出する際の半減期は、5,568年を用いて計算することになっている。誤差は測定における統計誤差（標準偏差、68%信頼限界）である。

AMSでは、グラファイト炭素試料の¹³C/¹²C比を加速器により測定する。正確な年代を得るには、試料の同位体効果を測定し補正する必要がある。同時に加速器で測定した¹³C/¹²C比により、¹³C/¹²C比に対する同位体効果を調べ補正する。¹³C/¹²C比は、標準体（古生物belemnite化石）の炭酸カルシウムの¹³C/¹²C比に対する千分率偏差δ¹³C（パーミル、‰）で示され、この値を-25%に規格化して得られる¹³C/¹²C比によって補正する。補正した¹³C/¹²C比から、¹⁴C年代（モデル年代）が得られる。加速器による測定は同位体効果補正のため、必ずしも¹³C/¹²C比を正確に反映しないこともあるため、東京大学のAMSで測定したδ¹³Cは、参考としてみるべきである。そのため、前処理した試料から分取して、（株）昭光通商へ委託し、安定同位体比を質量分析計で測定した。その結果、すべて-25～-26‰と、通常の陸生の植物に由来する可能性が高い結果であった。

測定値を較正曲線IntCal04（¹⁴C年代を曆年年代に修正するためのデータベース、2004年版）（Reimer,P et al 2004）と比較することによって曆年年代（実年代）を推定できる。両者に統計誤差があるため、統計数理的に扱う方がより正確に年代を表現できる。すなわち、測定値と較正曲線データ

タペースとの一致の度合いを確率で示すことにより、曆年代の推定確率分布として表す。曆年較正プログラムは、歴博で独自に開発したプログラム RHcal (OxCal Program を応用した方法) を用いる。統計誤差は 2 標準偏差に相当する、95% 信頼限界で計算した。年代は、較正された西暦 (cal BC) で示す。() 内は推定確率である。図は、各試料の曆年較正の確率分布である。

<参考文献>

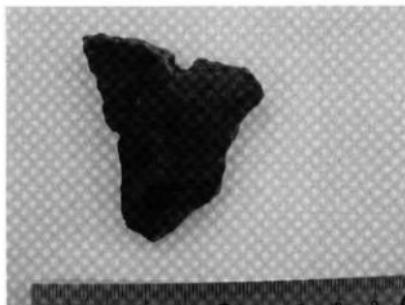
- 今村峯雄 2004 「課題番号 13308009 基盤研究 (A-1) (一般)
縄文弥生時代の高精度年代体系の構築」(代表今村峯雄)
小林謙一 2004 「東日本」「弥生時代の実年代」学生社
Reimer, Paula J., et al. 2004 IntCal04 Terrestrial
Radiocarbon Age Calibration, 0–26 cal kyr BP
Radiocarbon 46(3), 1029–1058



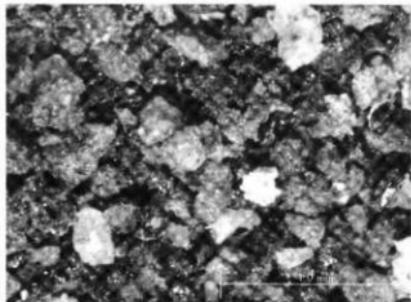
YNMBT-6 炭化物付着状態 脊下部内面



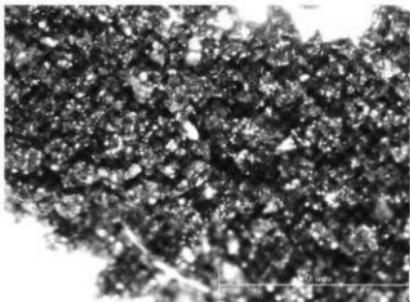
YNMBT-8 炭化物付着状態 脊外面



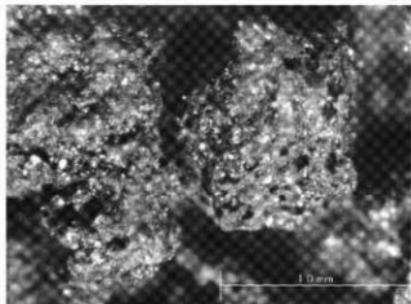
YNMBT-9 炭化物付着状態 脊外面



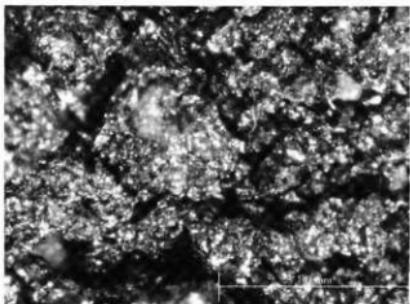
YNMBT-6 測定試料 前処理前 約 38 倍



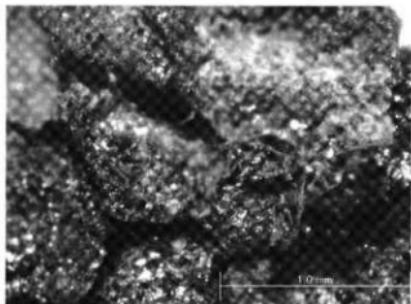
YNMBT-6 測定試料 前処理後 約 38 倍



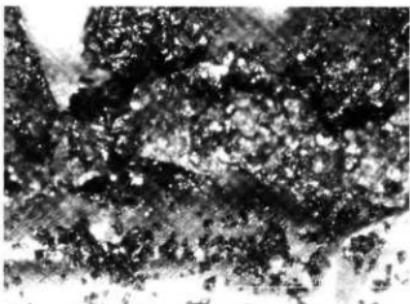
YNMBT-8 測定試料 前処理前 約 38 倍



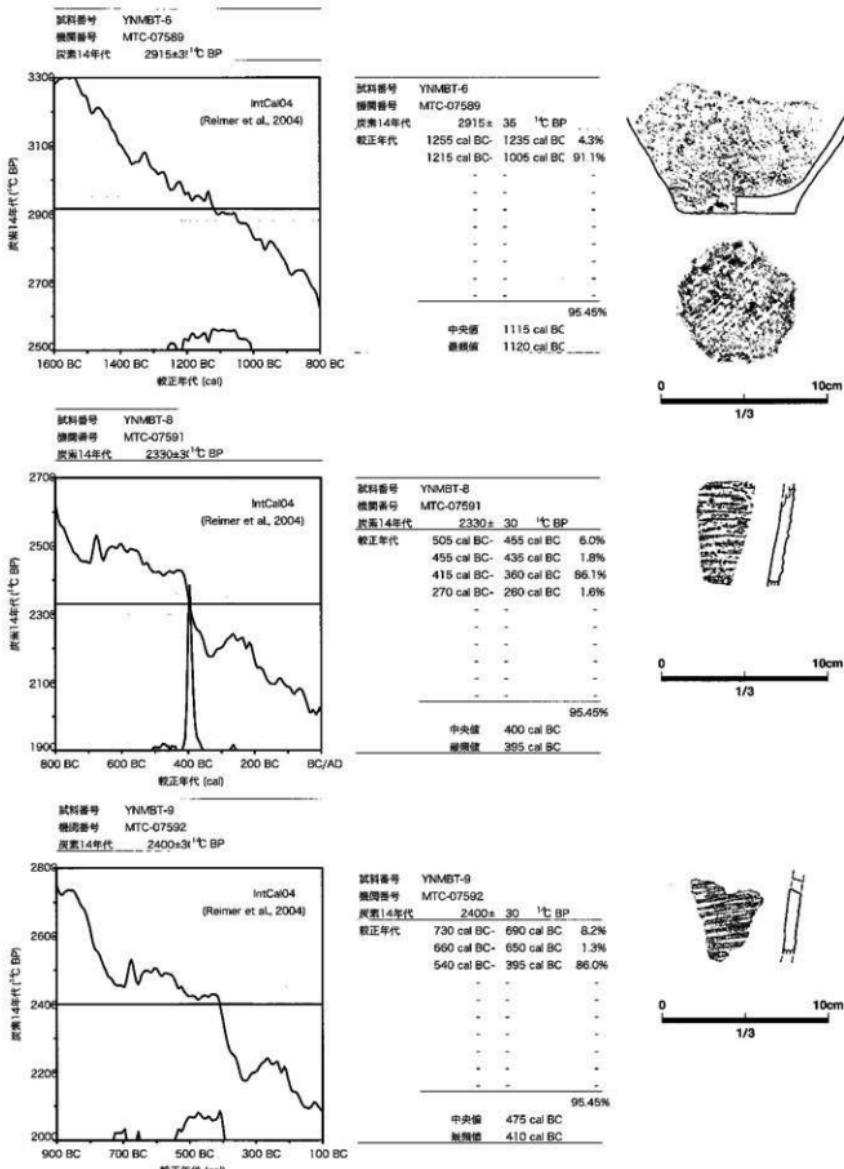
YNMBT-8 測定試料 前処理後 約 38 倍



YNMBT-9 測定試料 前処理前 約 38 倍



YNMBT-9 測定試料 前処理後 約 38 倍



第1図 較正年代確率密度分布

研究紀要 1 号～22 号執筆者一覧

1 号 板本美夫 新津 健 小野正文	甲斐の都（評） 御制 金文道跡見の「中土偶」と 2 号配石 绳文時代早期・前期初原の土器について —灰陶堂遺跡群を中心として—	森原明廣 平山 俊 坂本美夫	山梨県地域における内耳土器の系譜 甲府城の史的位置—甲斐国縄文期研究を説く 山梨県における月待信仰について —特に石造物の展開を中心として—
2 号 保坂康夫 小野正文 新津 健	山梨県下の先土器時代資料の検討—1— 所浦円錐形土器に就て 石劍考 —中部、関東を中心とした出土状況から— 甲斐における弥生文化の成立 辻金具・雲珠考	長沢宏昌	甲府盆地周辺にみられる绳文時代中期の土器群 と上器群再整理 —井戸尻塗式～曾利形式期の場合—
3 号 長沢宏昌	绳文時代前中期～中期初頭の土器底部にみられる 織物痕について 田代 孝 木村 健 坂本美夫 笠原安夫・蘿澤 浩 長沢宏昌・中山誠二 付記 種子検出方法と、検出種子の意義について	五味信吾・野代幸和 新津 健 高橋みゆき	山梨県北戸岸大泉町・原通跡花山境田の產 地同定（1）—赤外吸収スペクトル分析— 金牛通跡出土の土器 2 (晚期) 山梨県東八代郡小田町金沢出土の土師器題について
4 号 長沢宏昌 中山誠二 小林広和	山梨県内出土绳文土器の底盤压痕について 弥生時代終末における上の半邊跡の集落構造 绳文時代の上層について	宮里 学 田代 孝 柏木秀俊 高野衣明 小野正义	绳文時代の石器再考—打製石斧（1）— 中世六十六部州の奉納経簡について 近世軒瓦瓦の分類について—甲府城を例にして— 黒泥丸半～青瓦線括縫工事に先立つ牧丘町曲田 遺跡調査報告 甲府市八幡神社採集の绳文土偶
5 号 木村 健 森 和敏	甲斐伝教文化の成立 甲府盆地における季型里地割の事例	坂本美夫 吉岡弘樹 柏木秀俊 佐野和規	劍並形杏葉形の履覆制とその背景 縦横古墳についての予察 近世軒瓦瓦の分類について—甲府城を例として— 山梨縣考古資料の教材化 —学校現場へのアンケート調査に基づいて— 澤登正仁 大谷満水
6 号 清利 司	格条件压痕を有する土器について —中込遺跡出土の資料を中心に— 森原明廣 保坂康夫 河西 学	田代 孝 長沢宏昌 保坂康夫 大庭 勝	近世の同国塔と同國納経 郡留市中谷通跡出土の绳文土器底部压痕について 山梨県下の遺跡・住居址変動と歴史的理 考古資料の教材化についての・考察
7 号 中山誠二 今福利恵 千野哲道 松谷鶴子 外山秀一	身洗沢遺跡における外来系土器群の詰詰 身洗沢遺跡出土の木製品 身洗沢遺跡出土木製品の樹種について 身洗沢遺跡出土の植物標子について 山梨県身洗沢遺跡の地理環境と福作	新津 健 山本茂樹 森 和敏 野代幸和・鈴木由香 八代町童心寺遺跡および山梨市七日市（麻吉） 通跡古土通物について 石神孝子	山梨における後晩期土偶の展開 山本茂樹 4 基の前方後円墳の検討—山梨県における— 八代町童心寺遺跡および山梨市七日市（麻吉） 通跡古土通物について 甲斐における古墳時代中期の墓制について —曾根丘陵の円形低墳墓—
8 号 新津 健 出井洋文 間島信男 河西 学・保坂康夫	金牛通跡出土の土器 1 (後期) 両の木神社遺跡出土の須恵器長颈瓶について 身洗沢遺跡出土の木製品 身洗沢遺跡出土木製品の樹種について 身洗沢遺跡出土の植物標子について 明野村中村道祖神遺跡出土炭化物について	李 映福 野代幸和	長江デルタ地帯における新石器時代文化集団の 移動および绳文文化へのその影響 绳文時代前期後半から中期前段階における異 系統土器の流入の様相について
9 号 碓貝正義 保坂康夫 今福利恵 新津 健	いわゆる「東京造」について 摩群と側体消費の関わりについて 藤坂式土器成立期の基準關係 绳文時代中期後半の集落構造 —千葉県高根木戸遺跡の構造と意義— 木本 健 中山誠二 松谷鶴子・長沢宏昌 明野村中村道祖神遺跡出土炭化物について	市川恵子 新津 健 山本茂樹・桐倉邦生 甲・那道跡免掘調査報告 小林公治・吉川純子・樋泉岳二 大月市御所遺跡から検出された動物遺体とその 性格（1）	绳文時代前中期状土偶から中期後期形状土偶へ —御所町桂野那道跡出土上器に関する—考察— 绳文晚期後半通跡分布の意味と深淵 —山梨県における通跡の継続性と立地から— 甲斐の通跡免掘調査報告 (平成 10 年 3 月 3 日から 3 月 26 日) 小林公治・吉川純子・樋泉岳二 大月市御所遺跡から検出された動物遺体とその 性格（1） 笠原みゆき 大月通跡の敷石住居跡について

保坂康夫	御動使川原状地の古墳群と遺跡立地 —中部横断道の試掘調査の成果から—	奥水達司	檢前久保遺跡出土陶器片のフィッショントラック年代測定
河西 学	中津横断道試掘調査のテラ分析	坂本美夫	山梨県の中世石仏 —地藏石仏（光背形）を中心として—
小林健一	塙山市西川沿岸B区 2号古墳群出土土器の再整理	19号 保坂康夫	台形縁石器にみられる「急角度微細加工」の実験的検討
石神季子	山梨市牧神古墳群集の須恵器について	二田村美彦	山梨の縄文時代早期沈線文土器群終末期前の検討
雨宮加代子	山梨県内出土土器品について	小野正文	山型系の木島式土器について
崎田 哲	甲府城の鬼門守護と除災辟邪の思想 —福祐御輪輪にみる一考察—	創立部生	大穴造跡出土上石器の起源と系譜
坂本美夫	〈資料紹介〉高根町箕輪横森前墓地所在地の地蔵 陽刻板鏡	長沢宏昌	山間地の漁力と打矢石錐の用途
坂本美夫	山梨県における月待信仰について —文献を中心として—	新津 龍	上のう遺跡出土の動物骨器附土器とその関連 五味信吾
16号 長沢宏昌	山梨県における縄文時代早期の様相 —閑中地域と郡内地域—	山梨県北巨摩郡大泉村甲原遺跡出土琥珀の産地同定（2）—その後の研究成果とともに—	
小林公治・中野益男・中野寛子・長出正宏	磨石・敲石類、石皿と沣土器の使用法に関する事例 —大月遺跡出土上石器・石器に対する残存 脂肪分析結果と考古学的検討—	野代恵子	音の鳴る土偶（2） ～「笛」という機能の可能性～
野代恵子	方彌頭蓋にみられる匂化的発達に関する一視点 —奥川村洞窟尻遺跡の事例より—	今福利恵	（研究メモ）山梨県における腰盤式土器後半期の素描
保坂康夫	東原遺跡の平安時代集落の構造 —末代天祐の設置と集団衣食論の試み—	小林広和	湯呑把子状装飾土器の展開 —湯呑突起連続土器から湯呑把手土器へ—
野代幸和	横森赤台（東下）遺跡出土十五輪塔の形態と製作 年代について	三森鉄治	木立山B遺跡出土十六遺戔と煙袋・火打金に関する基礎的研究
宮里 学	宮指定防災工事府城跡の地質踏査 —数奇屋町門辺の遺物集中地点とその意味—	長田 乗・寺川政雄・宮里 学	福井横浜工事における強度試験監視計測について 輪岡美江
雨宮加代子	考古博物館カルチャーラクス「銅鏡づくり教室」 での銅鏡の製作について	宮久保真紀	丸山城跡葡萄酒醸造所生徒に関する諸史料について
坂本美夫	山梨県における月待信仰について —塙山市小鹿敷の二十三夜堂を中心に—	浅川 邦	甲府盆地の液化化に関する資料
17号 三森鉄治	道ヶ芽木遺跡の土馬と土馬祭の起源 宮指定真紀	村石良澄	上層堆積觀察記録の整理
保坂康夫・望月明彦・池谷信一	甲府城築城における一条小川の選地について —葛風舟水の想起と甲府城—	野代幸和	土器に施された文様とその意味について（一試案） —中國西南地域の少数民族衣装等に見られる その文様から—
保坂康夫・望月明彦・池谷信一	黑曜石原産地と石材の搬入・搬出 —丘の公園—2 遺跡の原産地推定から—	北垣聰一郎	丹波山村「お松ひき」にみるソリについて
三川村美彦	山梨における早期防衛土器群後年の様相 —談合坂跡出土土器の検討を通じた予察—	雨宮加代子	動物形土製品の米倉によるアンケートから ～これには何に見えますか？～
田口明子	弥生時代の大形打製石斧は農耕具か —山梨県出土事例を中心に—	坂本美夫	山梨県の中世石仏—塙山市延命院の十三仏—
依田幸浩	御動使川原状地の北原の集落遺跡について —大塚遺跡・右根北原遺跡を中心として—	20号 保坂康夫	天神堂遺跡の複数・配石
小野美樹	人足遺跡における副葬石斧への理解 —「中国四川古代文物館」を通じて—	渡辺 誠	人面・土偶装飾付有孔鉢付土器の研究
吉岡弘樹	塙瀬下原遺跡出土の釣手土器について	小林広和	湯呑把子状装飾土器の本義
湯川修一	埋蔵文化財センターが行なう学校への教育普及活動に関する一考察 —「総合的な学習の時間」にどのように対応したらよいか—	今福利恵	甲斐国四日市郡における古代牧についての 視点
田中宗博	発掘調査と並行した資料作成と活動に関する一考察 坂本美夫	坂本美夫	山梨県の中世石仏—六地蔵石幢（單刻）—
18号 新津 龍	縄文中期の手土器考証	21号 渡辺 誠	人面装飾付釣手土器の再検討
笠原みゆき	塙瀬下原遺跡出土の石住石住跡について	末木 健	甲斐と河内と馬
三森鉄治	山梨県内における出土土器の現状と課題	今福利恵	甲斐國山梨郡・八代郡・都留郡における古代牧についての一視点
小林 勘	熊沢河岸跡出土の泥面土について	坂本美夫	山梨県の中世石仏—地蔵塚地蔵石仏—
宮久保真紀	甲府城内御菴西廻道所について	22号 渡辺 誠	山梨県出土の人面・土偶装飾付深鉢形土器
橋尾岳二・小林公治	—因縁ワインの発祥地甲府—	末木 健	竜巣方形凸石遺構の復元について —塙瀬下原遺跡數石化病から—
	大月市大月遺跡（第7次調査）出土の動物遺体	保坂康夫	縄文時代の剥片剥離手法

2007年3月31日 発行

研究紀要 23

編集・発行 山梨県立考古博物館
山梨県埋蔵文化財センター
甲府市下曾根町923
TEL 055-266-3881・3016

印 刷 株式会社 ヨネヤ

BULLETIN
 OF
 YAMANASHI PREFECTURAL
 MUSEUM OF ARCHAEOLOGY
 &
 ARCHAEOLOGICAL CENTER
 OF
 YAMANASHI PREFECTURE
 NUMBER 23
 CONTENTS
 MARCH 2007

Jomon Pottery with Wild-Boar Ornament	Takeshi Niitsu	1	
Report on a Bit of <i>Sōtsume</i> Tenshi in Kasagai	Yoshio Sakamoto	15	
An Examination of the Regional Networks Through Ink - inscribed Pottery	Takeshi Sueki	27	
— In the Case of Kōra county, Kai province —			
Earthenware of Jomon of <i>Miyasone</i> Site Excavation	Hiroki Yoshioka	59	
The Clay Figurine of Jōkōmon Period of <i>Yokodori</i> Site Excavation	Keiko Noshiro	65	
The Political Power of <i>Yamato</i> Viewed Through the Kofu Basin (1)			
— The Bracelet-shaped Jasper object from <i>Kai Chōshizuka</i> Tumulus —		Kenji Kobayashi	69
The Early Stages of Sucki Said to have been from Chūō City	Takako Ishigami	75	
Carbon 14 Age Analysis of <i>Tsukakoshi</i> Site	Kenichi Kobayashi Shin Onbe Yoshiki Miyata Hiroyuki Matsuizaki Toshihiro Masaki	77	